

2015（平成 27）年

沖縄県感染症発生動向調査事業報告書

沖縄県保健医療部健康長寿課
沖縄県衛生環境研究所

はじめに

沖縄県の感染症発生動向調査事業の推進につきましては、一般社団法人沖縄県医師会をはじめ、定点医療機関など関係者の皆様方に多大なご協力をいただき、厚くお礼申し上げます。

本事業は、「感染症の予防及び感染症の患者に対する医療に関する法律」に基づき実施しており、感染症の発生動向を継続的に把握し、その分析を行い、情報を公表することによって、感染症の発生及びまん延を防止することを目的としています。

さて、平成 27 年を振り返りますと、海外においては、平成 26 年に西アフリカを中心に猛威を振るったエボラ出血熱の流行が継続し、加えて、これまで中東諸国を中心に患者が発生していた中東呼吸器症候群（MERS）が、韓国国内において主に院内感染による拡大をみせました。これらについては本県においても万が一の侵入に備え、引き続き関係機関との連携、医療体制及び検査体制の整備等を行い、対策を強化しているところです。

また、蚊媒介感染症においては、平成 26 年のデング熱の国内感染例発生とその後の拡大を受け、蚊媒介感染症に関する特定感染症予防指針が策定されました。そして中南米ではジカウイルス感染症の流行が発生し、ジカウイルス感染症は平成 28 年 2 月には感染症法の一部改正に伴い、四類感染症に位置づけられております（平成 28 年 2 月施行）。亜熱帯気候に属し、一年を通して蚊の活動が確認される本県においては、媒介蚊対策は重要な課題であり、指針に基づく対策を進めているところです。

本県としましては、引き続き関係機関と連携を図りながら、患者情報等の収集・解析・情報還元を積極的に行うとともに、本事業の推進と感染症対策の強化に努めて参りたいと考えております。関係機関の皆様方には、今後とも御協力を賜りますようお願い申し上げます。

平成 29 年 3 月

沖縄県保健医療部健康長寿課長

目 次

医療機関届出対象感染症一覧	1
I 事業の概要	3
(1) 保健所別定点数（県内）	4
(2) 報告週対応表（2015年）および定点種別定点数（全国）	5
(3) 感染症発生動向調査事業定点医療機関一覧（県内）	6
II 報告の概要	7
1 全数把握感染症（一～五類：82疾患）の報告状況	
(1) 腸管出血性大腸菌感染症（2）つつが虫病（3）レプトスピラ症	
(4) カルバペネム耐性腸内細菌感染症	7
(5) 梅毒	8
2 五類定点把握感染症（週報19疾患、月報7疾患）の報告状況	
(1) 週報	
ア インフルエンザ / 小児科定点	8
イ 眼科/基幹定点	8
(2) 月報	
ア 性感染症(STD) / 基幹定点	9
3 週別患者発生状況	
(1) 報告数一覧表（沖縄県）	11
(2) 報告数一覧表（全国）	11
(3) グラフ一覧（沖縄県）	12
(4) グラフ一覧（全国）	15
4 月別患者発生状況	
(1) グラフ一覧（沖縄県）	18
(2) 報告数一覧表（沖縄県）	18
(3) グラフ一覧（全国）	19
(4) 報告数一覧表（全国）	19
III 定点把握対象 五類感染症（週報・月報）発生状況	
1 週報	
（インフルエンザ/小児科定点）	
インフルエンザ	21
RSウイルス感染症	24
咽頭結膜熱（プール熱）	26
A群溶血性レンサ球菌咽頭炎	28
感染性胃腸炎	30
水痘	32
手足口病	34
伝染性紅斑	36
突発性発疹	38
百日咳	40
ヘルパンギーナ	42
流行性耳下腺炎	44

(眼科定点)

急性出血性結膜炎	46
流行性角結膜炎	48

(基幹定点)

細菌性髄膜炎	50
無菌性髄膜炎	52
マイコプラズマ肺炎	54
クラミジア肺炎	56
感染性胃腸炎（ロタウイルス）	58

2 月報

(性感染症(STD) 定点)

性器クラミジア感染症	60
性器ヘルペスウイルス感染症	60
尖形コンジローマ感染症	60
淋菌感染症	60
疾患別報告数	61
性別・年齢別患者報告数	62

(基幹定点(薬剤耐性菌))

メチシリン耐性黄色ブドウ球菌(MRSA) 感染症	64
ペニシリン耐性肺炎球菌(PRSP) 感染症	66
薬剤耐性緑膿菌感染症	68

IV 資料編

1 各表

表1 疾病分類別報告数（沖縄県・2015年）	71
表2 疾病分類別報告数（全国・2015年）	74
表3 疾病別、年齢別区分による比較（週報・沖縄県・2015年）	77
表4 疾病別、年齢別区分による比較（月報・男女・2015年）	78
表5 疾病別、年齢別区分による比較（月報・男性・2015年）	78
表6 疾病別、年齢別区分による比較（月報・女性・2015年）	79

2 全数把握感染症（全医療機関報告・2015年1月1日～12月31日）

(1) 一類感染症	80
(2) 二類感染症	80
(3) 三類感染症	94
(4) 四類感染症	96
(5) 五類感染症	98

3 定点把握対象 五類感染症（週報および月報）

感染症発生動向調査システム 警報・注意報の解説	107
-------------------------	-----

(1) 週報

(インフルエンザ/小児科定点)

インフルエンザ	108
R S ウイルス感染症	110
咽頭結膜熱（プール熱）	112
A群溶血性レンサ球菌咽頭炎	114
感染性胃腸炎	116
水痘	118
手足口病	120
伝染性紅斑	122
突発性発疹	124
百日咳	126
ヘルパンギーナ	128
流行性耳下腺炎	130

(眼科定点)

急性出血性結膜炎	132
流行性角結膜炎	134

(基幹定点)

細菌性髄膜炎	136
無菌性髄膜炎	138
マイコプラズマ肺炎	140
クラミジア肺炎	142
感染性胃腸炎（ロタウイルス）	144

(2) 月報

(性感染症(STD) 定点)

性器クラミジア感染症	146
性器ヘルペスウイルス感染症	147
尖形コンジローマ感染症	148
淋菌感染症	149

(基幹定点(薬剤耐性菌))

メチシリン耐性黄色ブドウ球菌(MRSA) 感染症	150
ペニシリン耐性肺炎球菌(PRSP) 感染症	151
薬剤耐性緑膿菌感染症	152

V 参考資料

結核の発生動向（2015年）	153
腸管出血性大腸菌感染症の発生動向（2015年）	155
レプトスピラ症の発生動向（2015年）	158
梅毒の発生動向（2015年）	160
後天性免疫不全症候群（HIV感染者／AIDS患者）の発生動向（2015年）	162

感染症法における届出対象疾患一覧

(平成27年5月21日現在)

1 医師による届出対象疾患

○届出基準:「感染症の予防及び感染症の患者に対する医療に関する法律第12条第1項及び第14条第2項に基づく届出の基準等について」

一類

- | | |
|-----------------|-------------|
| (1) エボラ出血熱 | (5) ペスト |
| (2) クリミア・コンゴ出血熱 | (6) マールブルグ病 |
| (3) 痘そう | (7) ラッサ熱 |
| (4) 南米出血熱 | |

二類

- | | |
|---|---|
| (8) 急性灰白髄炎(ポリオ) | (12) 中東呼吸器症候群
(病原体がベータコロナウイルス属MERSコロナウイルスであるものに限る) |
| (9) 結核 | (13) 鳥インフルエンザ(H5N1) |
| (10) ジフテリア | (14) 鳥インフルエンザ(H7N9) |
| (11) 重症急性呼吸器症候群
(病原体がベータコロナウイルス属SARSコロナウイルスであるものに限る) | |

三類

- | | |
|------------------|------------|
| (15) コレラ | (18) 腸チフス |
| (16) 細菌性赤痢 | (19) パラチフス |
| (17) 腸管出血性大腸菌感染症 | |

四類

- | | |
|---|------------------------------|
| (20) E型肝炎 | (41) 東部ウマ脳炎 |
| (21) ウエストナイル熱(ウエストナイル脳炎を含む) | (42) 鳥インフルエンザ(H5N1及びH7N9を除く) |
| (22) A型肝炎 | (43) ニパウイルス感染症 |
| (23) エキノコックス症 | (44) 日本紅斑熱 |
| (24) 黄熱 | (45) 日本脳炎 |
| (25) オウム病 | (46) ハンタウイルス肺症候群 |
| (26) オムスク出血熱 | (47) Bウイルス病 |
| (27) 回帰熱 | (48) 鼻疽 |
| (28) キャサヌル森林病 | (49) ブルセラ症 |
| (29) Q熱 | (50) ベネズエラウマ脳炎 |
| (30) 狂犬病 | (51) ヘンドラウイルス感染症 |
| (31) コクシジオイデス症 | (52) 発しんチフス |
| (32) サル痘 | (53) ボツリヌス症 |
| (33) 重症熱性血小板減少症候群
(病原体がフレボウイルス属SFTSウイルスであるものに限る) | (54) マラリア |
| (34) 腎症候性出血熱 | (55) 野兔病 |
| (35) 西部ウマ脳炎 | (56) ライム病 |
| (36) ダニ媒介脳炎 | (57) リッサウイルス感染症 |
| (37) 炭疽 | (58) リフトバレー熱 |
| (38) チクングニア熱 | (59) 類鼻疽 |
| (39) つつが虫病 | (60) レジオネラ症 |
| (40) デング熱 | (61) レプトスピラ症 |
| | (62) ロッキー山紅斑熱 |

五類 全数把握対象

- | | |
|---|-----------------------------------|
| (63) アメーバ赤痢 | (73) 侵襲性髄膜炎菌感染症 *直ちに届出 |
| (64) ウイルス性肝炎(E型肝炎及びA型肝炎を除く) | (74) 侵襲性肺炎球菌感染症 |
| (65) カルバペネム耐性腸内細菌科細菌感染症 | (75) 水痘
(患者が入院を要すると認められるものに限る) |
| (66) 急性脳炎
(ウエストナイル脳炎、西部ウマ脳炎、ダニ媒介脳炎、東部ウマ脳炎、日本脳炎、ベネズエラウマ脳炎及びリフトバレー熱を除く。) | (76) 先天性風しん症候群 |
| (67) クリプトスポリジウム症 | (77) 梅毒 |
| (68) クロイツフェルト・ヤコブ病 | (78) 播種性クリプトコックス症 |
| (69) 劇症型溶血性レンサ球菌感染症 | (79) 破傷風 |
| (70) 後天性免疫不全症候群 | (80) バンコマイシン耐性黄色ブドウ球菌感染症 |
| (71) ジアルジア症 | (81) バンコマイシン耐性腸球菌感染症 |
| (72) 侵襲性インフルエンザ菌感染症 | (82) 風しん |
| | (83) 麻しん *直ちに届出 |
| | (84) 薬剤耐性アシネトバクター感染症 |

診断後直ちに届出

全数報告

七日以内に届出

五類 定点把握対象

週報・月報報告

週報・小児科定点	(85) RSウイルス感染症 (86) 咽頭結膜熱 (87) A群溶血性レンサ球菌咽頭炎 (88) 感染性胃腸炎 (89) 水痘 (90) 手足口病 (91) 伝染性紅斑 (92) 突発性発しん (93) 百日咳 (94) ヘルパンギーナ (95) 流行性耳下腺炎	週報	基幹定点
週報	(96) インフルエンザ ^{*1} (鳥インフルエンザ及び新型インフルエンザ等感染症を除く)	週報	基幹定点
眼科定点	(97) 急性出血性結膜炎 (98) 流行性角結膜炎	週報	眼科定点
性感染症定点	(99) クラミジア肺炎(オウム病を除く) (100) 細菌性髄膜炎 (インフルエンザ菌、髄膜炎菌、肺炎球菌を原因として同定された場合を除く。) (101) マイコプラズマ肺炎 (102) 無菌性髄膜炎 (103) 感染性胃腸炎(病原体がロタウイルスに限る) (104) 性器クラミジア感染症 (105) 性器ヘルペスウイルス感染症 (106) 尖圭コンジローマ (107) 淋菌感染症 (108) ペニシリン耐性肺炎球菌感染症 (109) メチシリン耐性黄色ブドウ球菌感染症 (110) 薬剤耐性緑膿菌感染症	月報	性感染症定点

*1 インフルエンザ(鳥インフルエンザ及び新型インフルエンザ等感染症を除く)の基幹定点の届出対象は入院したもの

*2 (86)感染性胃腸炎のうち、病原体がロタウイルスであるものを基幹定点から届け出る

定点報告

新型インフルエンザ等感染症

(111) 新型インフルエンザ

(112) 再興型インフルエンザ

指定感染症

該当なし

法第14条第1項に規定する厚生労働省令で定める疑似症

- (113) 摂氏38度以上の発熱及び呼吸器症状(明らかな外傷又は器質的疾患に起因するものを除く。)
(114) 発熱及び発疹又は水疱(ただし、当該疑似症が二類感染症、三類感染症、四類感染症、五類感染症の患者の症状であることが明らかな場合を除く。)

届出は管轄保健所へ

2 獣医師による届出対象疾患と動物

○届出基準:「感染症の予防及び感染症の患者に対する医療に関する法律第13条第1項の規定に基づく届出の基準について」

感染症法第13条に基づく獣医師が届出を行う感染症と動物

- | | |
|---|-------------------------------------|
| (1) エボラ出血熱(サル) | (6) ウエストナイル熱(鳥類に属する動物) |
| (2) 重症急性呼吸器症候群(病原体がSARSコロナウイルスであるものに限る(イタチアナグマ、タヌキ及びハクビシン)) | (7) エキノコックス症(犬) |
| (3) ペスト(プレリドッグ) | (8) 結核(サル) |
| (4) マールブルグ病(サル) | (9) 鳥インフルエンザ(H5N1またはH7N9(鳥類に属する動物)) |
| (5) 細菌性赤痢(サル) | (10) 中東呼吸器症候群(ヒトコブラクダ) |

届出は管轄保健所へ

I 事業の概要

I 事業の概要

沖縄県は 1980 年 7 月から県医師会および定点医療機関の協力のもとに全県的な感染症の報告体制を構築し、疾患の流行状況の把握に努めるべく感染症サーベイランス事業を、厚生省（現厚生労働省）より早く開始した。

厚生省は、1981 年 7 月から感染症の実態を的確に把握するために全国的な感染症サーベイランス事業を開始した。さらに、1987 年 1 月から新たに「結核・感染症サーベイランス事業」となり、全国の保健所、都道府県（指定都市）、厚生省（現厚生労働省）間がコンピュータオンラインシステムで結ばれ、結核および感染症の情報が迅速かつ的確に利用できるようになった。

感染症サーベイランス事業は、1998 年より感染症発生動向調査事業となり、さらに「感染症の予防及び感染症の患者に対する医療に関する法律」（以下「感染症法」とする。）が 1999 年 4 月から施行され、感染症対策の強化が行われてきた。

2006 年 4 月には、新しい全国オンラインシステムである感染症サーベイランスシステム（NESID）が稼働している。

2015 年末までに届出対象となる感染症は、一類感染症 7 疾患、二類感染症 7 疾患、三類感染症 5 疾患、四類感染症 43 疾患、五類感染症 48 疾患（全数 22 疾患、定点把握 26 疾患）、新型インフルエンザ等が 2 疾患、指定感染症 0 疾患（該当なし）、法第 14 条第 1 項に規定する厚生労働省令で定める疑似症が 2 疾患の計 114 疾患である（医療機関届出対象感染症一覧を参照）。

これらの感染症は、患者発生状況を医療機関が所管保健所に報告し、各保健所からの報告を県健康長寿課で集約して国に報告している。感染症情報の迅速な提供を図るための施設として感染症情報センターが衛生環境研究所に設置され、データ収集及び提供を行っている。県健康長寿課および各保健所においては、感染症情報センターで処理された集計データおよび全国の還元データを利用し、各関係機関に情報提供をするとともに、感染症の流行状況の把握を行っている（次頁「感染症発生動向調査事業～患者情報の流れ～」を参照）。

2013 年 4 月 1 日に、那覇市の中核市への移行に伴い、那覇市保健所が設置（県中央保健所は廃止）され、これまでの定点医療機関の所管保健所に変更はあったが、感染症情報の集約および国への報告はこれまでとおり県健康長寿課で行っている。

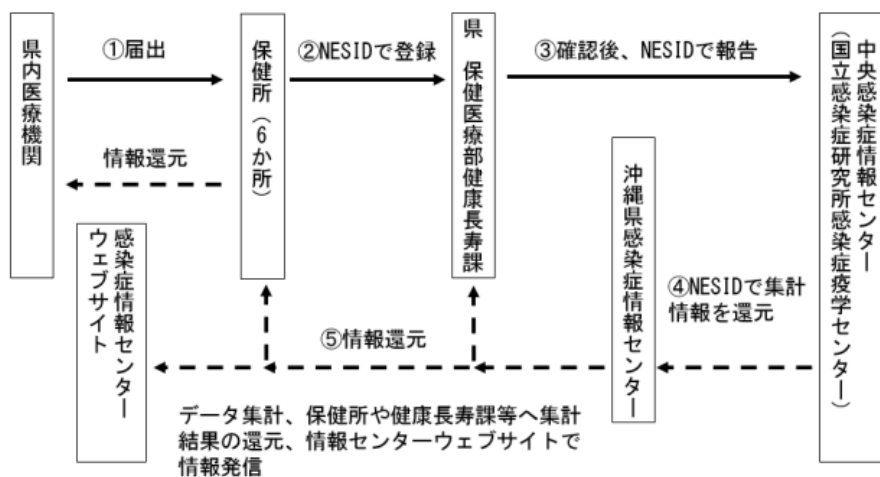
〔沖縄県感染症情報センター ウェブサイト〕

<http://www.pref.okinawa.jp/site/hoken/eiken/kikaku/kansenjouhou/home.html>

（定点医療機関）

2015 年の県内の定点医療機関は、小児科 34 定点、インフルエンザ 58 定点（同小児科定点＋内科 24 定点）、眼科 10 定点、性感染症 12 定点、基幹 7 定点の合計 87 定点である。

感染症発生動向調査事業 ～患者情報の流れ～



（１）県内の保健所別定点数（2015年1月1日～2015年12月31日）

保 健 所 名	小児科 定点 (ア)	内科 定点 (イ)	インフル エンザ定点 (ア)+(イ)	眼科 定点	性感染症 (STD) 定点	基幹 定点	医療 機関数
①北部保健所	3	2	5	1	1	1	5
②中部保健所	12	8	20	3	4	2	24
③那覇市保健所	7	5	12	1	3	1	10
④南部保健所	8	6	14	3	4	1	15
⑤宮古保健所	2	2	4	1	0	1	5
⑥八重山保健所	2	1	3	1	0	1	3
合 計	34	24	58	10	12	7	62

※性感染症定点の1か所に、休止期間（2015年1月～4月）あり。

(2) 報告週対応表 (2015年) および定点種別定点数(全国)

			週 報				月 報	
			インフルエ ンザ定点	小児科定 点	眼科定点	基幹定点	STD定点	基幹定点
月	週	平 均 期 間	4924	3146	687	477	980	479
1月	1	12/29 ～ 1/4	4674	2954	660	476	977	479
	2	1/5 ～ 1/11	4937	3151	688	477		
	3	1/12 ～ 1/18	4953	3162	689	477		
	4	1/19 ～ 1/25	4953	3160	685	477		
	5	1/26 ～ 2/1	4953	3162	687	478		
2月	6	2/2 ～ 2/8	4952	3161	687	478	981	477
	7	2/9 ～ 2/15	4945	3155	687	478		
	8	2/16 ～ 2/22	4945	3154	689	478		
	9	2/23 ～ 3/1	4948	3156	689	478		
3月	10	3/2 ～ 3/8	4944	3153	690	478	969	479
	11	3/9 ～ 3/15	4935	3150	690	478		
	12	3/16 ～ 3/22	4942	3152	690	478		
	13	3/23 ～ 3/29	4940	3153	691	478		
	14	3/30 ～ 4/5	4948	3158	688	478		
4月	15	4/6 ～ 4/12	4935	3159	690	478	982	479
	16	4/13 ～ 4/19	4947	3161	691	478		
	17	4/20 ～ 4/26	4941	3157	691	478		
	18	4/27 ～ 5/3	4876	3121	671	477		
5月	19	5/4 ～ 5/10	4944	3163	690	478	982	479
	20	5/11 ～ 5/17	4943	3162	688	478		
	21	5/18 ～ 5/24	4937	3155	689	476		
	22	5/25 ～ 5/31	4937	3155	686	478		
6月	23	6/1 ～ 6/7	4933	3155	691	478	981	480
	24	6/8 ～ 6/14	4934	3155	691	478		
	25	6/15 ～ 6/21	4940	3158	689	478		
	26	6/22 ～ 6/28	4934	3154	689	477		
	27	6/29 ～ 7/5	4938	3159	688	478		
7月	28	7/6 ～ 7/12	4939	3158	691	478	985	480
	29	7/13 ～ 7/19	4917	3149	687	478		
	30	7/20 ～ 7/26	4931	3153	690	478		
	31	7/27 ～ 8/2	4933	3154	691	478		
8月	32	8/3 ～ 8/9	4916	3148	682	476	983	480
	33	8/10 ～ 8/16	4780	3047	675	478		
	34	8/17 ～ 8/23	4883	3118	690	478		
	35	8/24 ～ 8/30	4917	3139	690	478		
	36	8/31 ～ 9/6	4933	3159	691	478		
9月	37	9/7 ～ 9/13	4936	3159	688	477	981	480
	38	9/14 ～ 9/20	4865	3121	679	477		
	39	9/21 ～ 9/27	4921	3146	689	478		
	40	9/28 ～ 10/4	4936	3157	691	477		
10月	41	10/5 ～ 10/11	4923	3152	685	477	982	478
	42	10/12 ～ 10/18	4932	3155	688	478		
	43	10/19 ～ 10/25	4934	3156	690	477		
	44	10/26 ～ 11/1	4934	3153	690	478		
11月	45	11/2 ～ 11/8	4933	3155	690	478	983	478
	46	11/9 ～ 11/15	4939	3156	691	477		
	47	11/16 ～ 11/22	4930	3153	689	477		
	48	11/23 ～ 11/29	4940	3158	691	477		
	49	11/30 ～ 12/6	4945	3157	691	478		
12月	50	12/7 ～ 12/13	4945	3161	690	476	984	480
	51	12/14 ～ 12/20	4947	3161	692	476		
	52	12/21 ～ 12/27	4937	3155	687	478		
	53	12/28 ～ 1/3	4858	3094	678	478		

(3) 平成27年度 感染症発生動向調査事業 定点医療機関一覧

平成27年12月31日現在

				全 87定点	24	34	10	7	12
保健所名	医療機関名	住 所	(定点名)	内科	小児科	眼科	基幹	STD	
北部保健所	1 県立北部病院	名護市大中2-12-3	小児科、内科、基幹	●	●		●		
	2 儀保小児科内科医院	名護市大西2-4-32	小児科		●				
	3 今帰仁診療所	今帰仁村字謝名139	小児科、内科	●	●				
	4 辻眼科	名護市宮里1-26-11	眼科			●			
	5 なかち泌尿器科クリニック	名護市大中5-4-50	STD(泌)						●
中部保健所	1 ほくと会北部病院	宜野座村字漢那469	内科	●					
	2 石川医院	うるま市石川2-21-5	内科	●					
	3 金武診療所	金武町字金武94	内科	●					
	4 岸本内科クリニック	沖縄市登川1-1-24	内科	●					
	5 愛聖クリニック	沖縄市高原5-15-11	内科	●					
	6 よなみね内科	宜野湾市普天間2-4-5	内科	●					
	7 ライフケアクリニック長浜	読谷村字長浜1530-1	内科	●					
	8 ちばなクリニック	沖縄市字知花6-25-15	小児科、内科、STD(産)	●	●				●●
	9 県立中部病院	うるま市宮里281	小児科、基幹		●		●		
	10 みやぎ小児科クリニック	宜野湾市我如古447	小児科		●				
	11 嘉数医院	沖縄市諸見里1-26-2	小児科		●				
	12 大嶺医院	うるま市田場1417	小児科		●				
	13 山田小児科内科医院	うるま市石川東山1-19-11	小児科		●				
	14 もりなが内科・小児科クリニック	北谷町美浜2丁目7-4	小児科		●				
	15 伊元小児科医院	沖縄市字泡瀬4-39-12	小児科		●				
	16 そけん小児科	読谷村字波平2459	小児科		●				
	17 愛知クリニック	宜野湾市字愛知16-1	小児科		●				
	18 いとむクリニック小児科	宜野湾市伊佐1-10-9	小児科		●				
	19 宮里眼科	うるま市石川東山1-22-2	眼科			●			
	20 ひかり眼科	宜野湾市字愛知45	眼科			●			
	21 松永眼科	沖縄市美里2-10-2	眼科			●			
	22 中頭病院	沖縄市知花6-25-5	基幹				●		
	23 上村病院	沖縄市胡屋1-6-2	小児科、STD(産)		●				●
	24 名城病院	うるま市字赤道174-6	STD(産)						●
南部保健所	1 浦添総合病院	浦添市伊祖4-16-1	内科、STD(産)	●					●
	2 同仁病院	浦添市城間1-37-12	内科	●					
	3 みゆき小児科	浦添市字前田3-3-8-103号	小児科		●				
	4 たから小児科医院	浦添市大平1-36-5	小児科		●				
	5 ティーダこどもクリニック	浦添市城間4-3-10-1	小児科		●				
	6 比嘉眼科病院	浦添市城間4-34-20	眼科			●			
	7 県立南部医療センター・こども医療センター	南風原町字新川118-1	小児科、内科、基幹、STD(泌)	●	●		●	●	
	8 南部徳洲会病院	八重瀬町字外間171-1	内科、STD(泌)	●					●
	9 豊見城中央病院	豊見城市字上田25	小児科、内科、STD(産)	●	●				●
	10 わんぱくクリニック	南風原町字津嘉山1674	小児科		●				
	11 与那原中央病院	与那原町字与那原2905	内科	●					
	12 ひめゆりクリニック	糸満市字伊原107-1	小児科		●				
	13 あおぞら小児科	与那原町字上与那原340-1	小児科		●				
	14 安里眼科	糸満市字潮平722	眼科			●			
	15 はえばる眼科医院	南風原町字兼城725	眼科			●			
宮古保健所	1 県立宮古病院	宮古島市平良字東仲宗根807	小児科、基幹		●		●		
	2 ひが小児科医院	宮古島市平良西里781-5	小児科		●				
	3 下地内科医院	宮古島市平良下里1259-1	内科	●					
	4 池村内科医院	宮古島市平良字東仲宗根194	内科	●					
	5 下地眼科医院	宮古島市平良下里577-1	眼科			●			
保八健重所山	1 県立八重山病院	石垣市字大川732	小児科、内科、基幹	●	●		●		
	2 よしもとこどもクリニック	石垣市登野城1024-1	小児科		●				
	3 宮良眼科医院	石垣市字大川140	眼科			●			
那覇市保健所	1 国場十字路医院	那覇市字仲井真272-1	内科	●					
	2 那覇市立病院	那覇市古島2-31-1	小児科、内科、基幹、STD(産)	●	●		●	●	
	3 沖縄赤十字病院	那覇市与儀1-3-1	小児科、内科、STD(産)	●	●				●
	4 沖縄協同病院	那覇市古波蔵4-10-55	小児科、内科	●	●				
	5 西町クリニック	那覇市西3-4-1	小児科、内科	●	●				
	6 かおる小児科	那覇市字国場724-3 メゾンセブン101	小児科		●				
	7 宮城小児科医院	那覇市牧志2-16-5	小児科		●				
	8 安謝小児クリニック	那覇市安謝215-1	小児科		●				
	9 石川眼科	那覇市泉崎2-3-20	眼科			●			
	10 大浜第一病院	那覇市天久1000	STD(産)						●

Ⅱ 報告の概要

Ⅱ 報告の概要

2015（平成 27）年、本県での報告は、一類感染症が 0 人、二類感染症が 351 人、三類感染症が 27 人、四類感染症が 32 人、五類感染症が 52,824 人（全数把握疾患：203 人、定点把握疾患：52,621 人）の報告があり、対象感染症 114 疾患の合計 53,234 人であった。

五類感染症定点把握疾患は、週単位報告（週報）と月単位報告（月報）に大別される。週報はインフルエンザ定点、小児科定点、基幹定点報告に、月報は性感染症（STD）定点と基幹定点（薬剤耐性菌）報告に細分類される。

週報は、2014（平成 26）年 12 月 29 日～2016（平成 28）年 1 月 3 日までの 53 週分である。月報は、2015（平成 27）年 1 月 1 日～12 月 31 日までの 12 ヶ月分である。

1 全数把握感染症（一～五類：82疾患）の報告状況

（Ⅳ 資料編 1 各表 表 1、表 2 及び 2 全数把握感染症（全医療機関報告）を参照）

2015 年県内で報告された全数把握感染症は 26 疾患で **613** 件である。

注目された感染症は以下のとおりである。

（1）腸管出血性大腸菌感染症（三類感染症）

2015 年 9 月から 10 月にかけて南部保健所管内の保育園にて集団発生事例があった。園児やその家族など計 12 人の感染があり、いずれも血清型 O-121、毒素型 VT2 であった。

（2）つつが虫病（四類感染症）

2011 年以降は年間 1～2 例であったが 2015 年は 4 例であった。いずれも宮古保健所管内で 50 歳代から 70 歳代の男女にみられ、ツツガムシやダニ等からの感染と考えられた。

（3）レプトスピラ症（四類感染症）

2015 年の報告数は 13 人、前年比 0.46 と半数以下となったが、依然として全国の約 4 割を占める。毎年夏から秋にかけて報告が増え、2015 年は 9 月が最も多かった。推定感染地域は、八重山地域が 6 割、本島地域が 4 割を占めた。推定感染経路の多くが水系感染（河川でのレジャー活動等における感染）であった。

（4）カルバペネム耐性腸内細菌科細菌感染症（五類感染症）

2014 年 9 月 19 日から 5 類全数把握疾患となった。2014 年の報告期間は約 3 ヶ月間で本県の報告数は 1 人であったが、2015 年は 40 人となった。同様に全国の報告は 2014 年 321 人、2015 年 1,671 人と、報告期間の相違はあるものの、前年と比べると全国以上の増加率となった。

(5) 梅毒（五類感染症）

梅毒の報告数は 2011 年以降増加し、2015 年は 17 人と前年比 0.44 と半数以下となったが、梅毒の報告は 2011 年以降増加傾向にあり、2015 年の報告数は 2006 年以降 2014 年に次いで多くみられた。

男性が 8 割以上を占めるが、女性の感染も 3 人とやや増加した。年代では 20 歳代に増加がみられた。

2 五類定点把握感染症(週報 19 疾患、月報 8 疾患)の報告状況

(Ⅳ 資料編 1 各表 表 1、表 2 及びⅢ 定点把握対象 五類感染症（週報および月報）発生状況を参照）

(1) 週報

ア インフルエンザ／小児科定点

（Ⅱ 3.（1）～（4）報告数一覧表及び週別患者発生状況グラフ一覧を参照）

2015 年県内で報告された、インフルエンザ及び小児科定点対象の疾患を年間定点当たり患者報告数が多かった順に並べると、上位 4 疾患はインフルエンザ、感染性胃腸炎、流行性耳下腺炎、手足口病であった。

2015 年の本県におけるインフルエンザ患者の報告数は 31,238 人、定点あたりの報告数は 538.59 人であり、ほぼ前年並みであった。2014/2015 シーズン（2014 年第 36 週～ 2015 年第 35 週）に医療機関から提出されたインフルエンザウィルスの検出状況は、AH3 亜型 19 例、B 型 8 例であった（総数 27 例）。シーズンの開始当初から A 型を主とする流行であったが、3 月中旬以降は B 型が主となった。

感染性胃腸炎の報告数は 5,263 人、定点あたり報告数は 154.79 人で前年比 0.92 とやや減少した。1 歳の報告が最も多く、全体の 18.5%を占めていた。

流行性耳下腺炎の報告数は 4,647 人、定点あたりの報告数は 136.68 人で前年比 2.78 と大幅に増加した。2 歳から 6 歳で全体の約 7 割を占めた。

手足口病の報告数は 2,387 人、定点あたり報告数 70.21 人で前年比 1.14 と増加した。1 歳をピークに、2 歳以下までで全体の約 8 割を占めた。

イ 眼科／基幹定点

（Ⅱ 3.（1）～（4）報告数一覧表及び週別患者発生状況グラフ一覧を参照）

県内の急性出血性結膜炎（AHC）の報告数は 30 人、定点あたり報告数は 3.00 人であり、前年比 1.88 と増加した。7月から11月にかけて散発的に警報レベルに達したが、継続することはなかった。

流行性角結膜炎（EKF）の報告数は 429 人、定点あたり 42.90 人であり、前年比 0.93 とほぼ前年並みであった。

基幹定点対象の疾患では、マイコプラズマ肺炎が最も多く報告された。本県の年間報告数は 2006 年から 2012 年にかけて急増し、その後減少に転じた。2015 年は 200 人で、前年比 1.16 とやや増加した。

その他の基幹定点対象疾患では、前年に比べ増加したのが無菌性髄膜炎（定点あたり報告数 102 人、前年比 1.59）及び細菌性髄膜炎（定点あたり報告数 40 人、前年比 1.29）、横ばいがクラミジア肺炎（定点あたり報告数 7 人、前年比 1.17）、減少したのはロタウイルス（定点あたり報告数 82 人、前年比 0.68）であった。

（2）月報

ア 性感染症(STD)／基幹定点

（Ⅱ 4.（1）～（4）報告数一覧表及び月別患者発生状況グラフ一覧を参照）

2015 年県内で報告された性感染症（STD）定点対象疾患の報告数は、性器クラミジア感染症が 169 人（定点あたり報告数 14.48 人、前年比 1.32）、性器ヘルペスウイルス感染症は 43 人（定点あたり報告数 3.62 人、前年比 1.13）、尖形コンジローマが 28 人（定点あたり報告数 2.40 人、前年比 1.12）、淋菌感染症は 21 人（定点あたり報告数 1.80 人、前年比 1.24）であり、全ての疾患について増加した。

基幹定点対象疾患では、メチシリン耐性黄色ブドウ球菌（MRSA）感染症が報告数 344 人（定点あたり報告数 49.14 人）と最も多かった。

ペニシリン耐性肺炎球菌（PRSP）感染症の報告数は 2011 年から 2012 年にかけて減少していたが、2013 年は 60 人、2014 年の報告数は 165 人（定点あたり報告数 23.58 人）、2015 年の報告数は 139 人（定点あたり報告数 19.86 人、前年比 0.84）と増加傾向にある。

薬剤耐性緑膿菌感染症の報告数は 2 人（定点あたり報告数 0.29 人）であり、前年比 0.15 と大幅に減少した。

3 週別患者報告数

(1) 報告数一覧表(沖縄県)

	疾患名	報告数(人)		定点あたり患者報告数(人／定点)		週平均の定点あたり患者報告数(人／定点／週)	
		2014年	2015年	2014年	2015年	2014年	2015年
小児科 定点	インフルエンザ	31,232	31,238	538.48	538.59	10.36	10.16
	RSウイルス感染症	1,370	1,863	40.29	54.79	0.77	1.03
	咽頭結膜熱	690	912	20.29	26.82	0.39	0.51
	A群溶血性レンサ球菌感染症	2,462	2,018	72.41	59.35	1.39	1.12
	感染性胃腸炎	5,695	5,263	167.50	154.79	3.22	2.92
	水痘	2,460	1,061	72.35	31.21	1.39	0.59
	手足口病	2,095	2,387	61.62	70.21	1.18	1.32
	伝染性紅斑	115	352	3.38	10.35	0.07	0.20
	突発性発疹	613	632	18.03	18.59	0.35	0.35
	百日咳	186	198	5.47	5.83	0.11	0.11
	ヘルパンギーナ	607	414	17.85	12.18	0.34	0.23
	流行性耳下腺炎	1,672	4,647	49.18	136.68	0.95	2.58
眼科 定点	急性出血性結膜炎	16	30	1.60	3.00	0.03	0.06
	流行性角結膜炎	459	429	45.90	42.90	0.88	0.81
基幹 定点	細菌性髄膜炎	31	40	4.43	5.71	0.09	0.11
	無菌性髄膜炎	64	102	9.14	14.57	0.18	0.27
	マイコプラズマ肺炎	173	200	24.71	28.58	0.48	0.54
	クラミジア肺炎	6	7	0.86	1.00	0.02	0.02
	感染性胃腸炎(ロタウイルス)	120	82	17.14	11.71	0.33	0.22

(2) 報告数一覧表(全国)

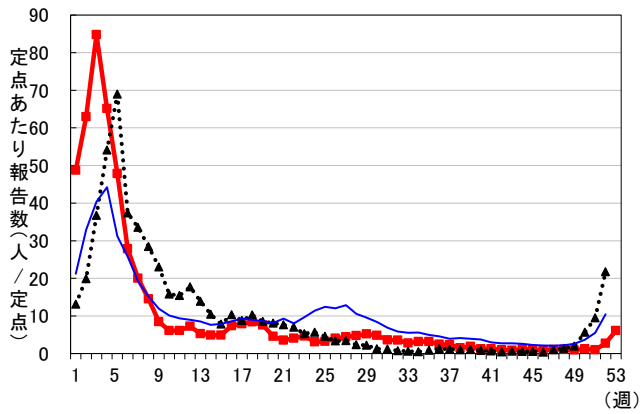
	疾患名	報告数(人)		定点あたり患者報告数(人／定点)		週平均の定点あたり患者報告数(人／定点／週)	
		2014年	2015年	2014年	2015年	2014年	2015年
小児科 定点	インフルエンザ	1,743,826	1,169,041	354.44	237.42	6.82	4.48
	RSウイルス感染症	100,394	120,049	31.93	38.16	0.61	0.72
	咽頭結膜熱	78,965	72,150	25.12	22.93	0.48	0.43
	A群溶血性レンサ球菌感染症	304,272	401,274	96.78	127.55	1.86	2.41
	感染性胃腸炎	1,005,079	987,912	319.68	314.02	6.15	5.92
	水痘	157,666	77,614	50.15	24.67	0.96	0.47
	手足口病	83,694	381,720	26.62	121.34	0.51	2.29
	伝染性紅斑	32,352	98,521	10.29	31.32	0.20	0.59
	突発性発疹	87,993	84,957	27.99	27.00	0.54	0.51
	百日咳	2,066	2,675	0.66	0.85	0.01	0.02
	ヘルパンギーナ	137,040	98,212	43.59	31.22	0.84	0.59
	流行性耳下腺炎	46,342	81,046	14.74	25.76	0.28	0.49
眼科 定点	急性出血性結膜炎	414	494	0.61	0.72	0.01	0.01
	流行性角結膜炎	20,233	25,037	29.62	36.44	0.57	0.69
基幹 定点	細菌性髄膜炎	393	402	0.83	0.84	0.02	0.02
	無菌性髄膜炎	901	1,085	1.90	2.27	0.04	0.04
	マイコプラズマ肺炎	6,476	10,384	13.63	21.77	0.26	0.41
	クラミジア肺炎	325	411	0.68	0.86	0.01	0.02
	感染性胃腸炎(ロタウイルス)	4,030	4,368	8.48	9.16	0.16	0.00

(3) グラフ一覧(沖縄県)

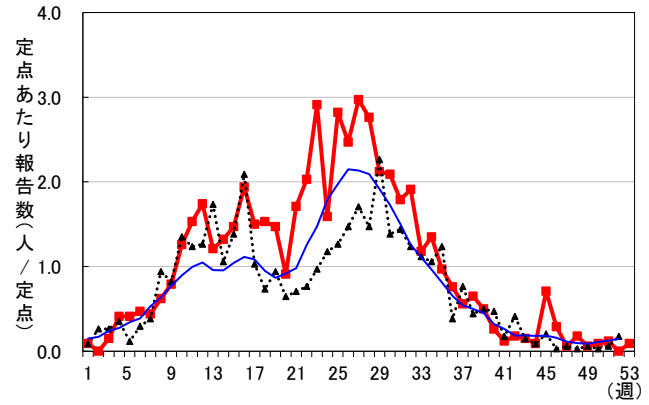
—■— 2015年 2014年 — 過去5年間の平均

*過去5年間の平均:前週、当該週、後週の合計15週の平均

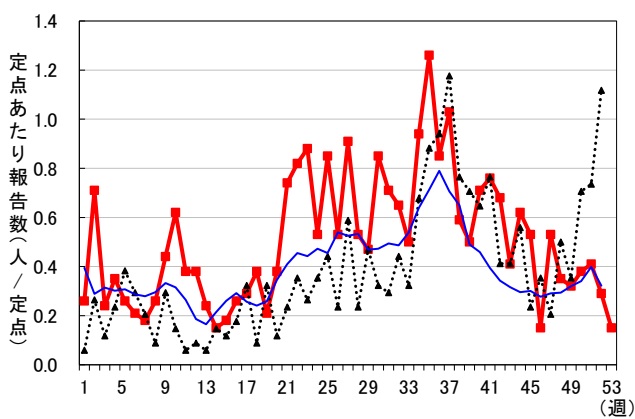
インフルエンザ



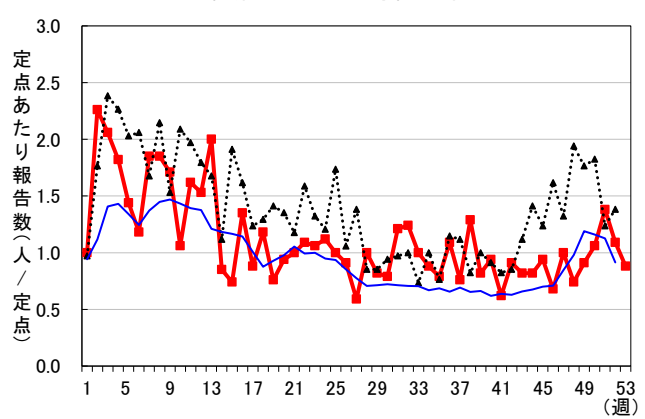
RSウイルス感染症



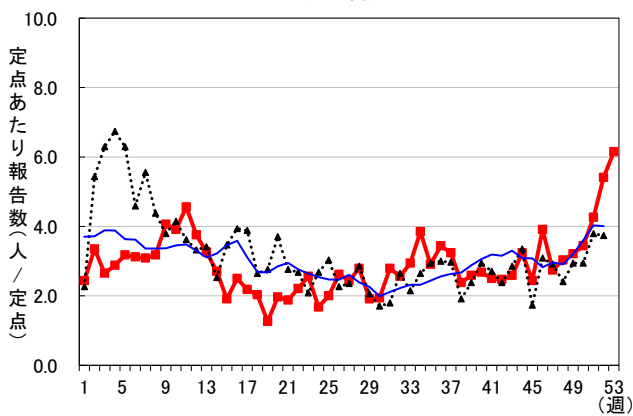
咽頭結膜熱



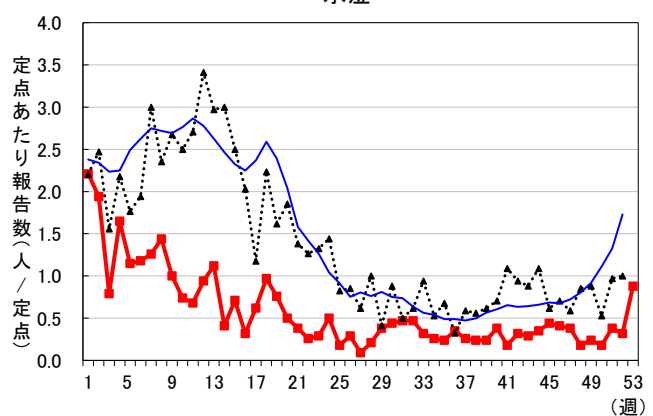
A群溶血性レンサ球菌感染症



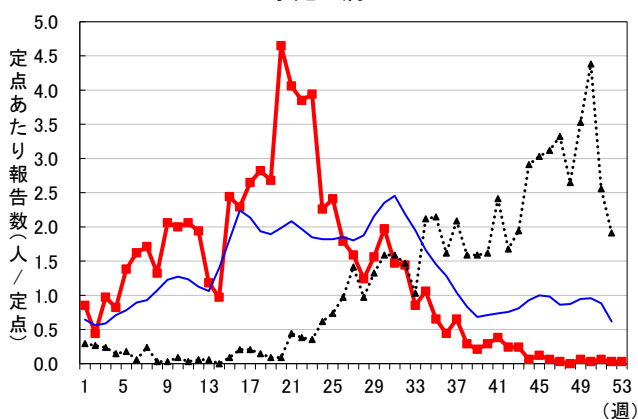
感染性胃腸炎



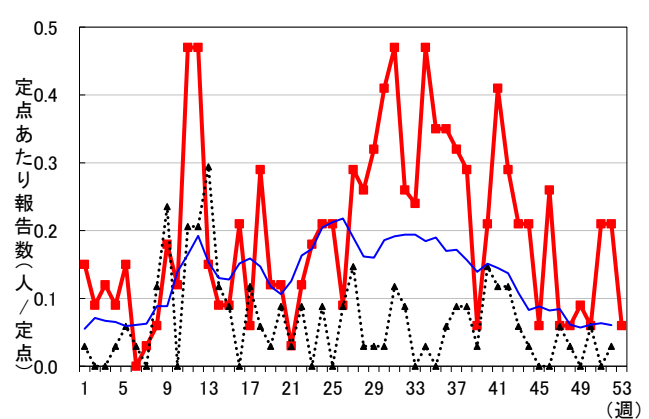
水痘

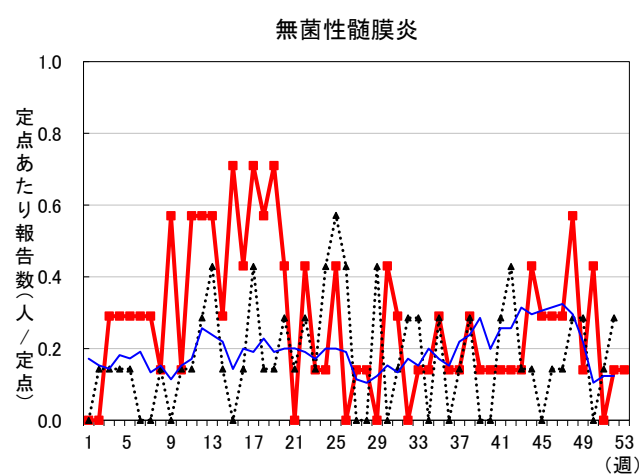
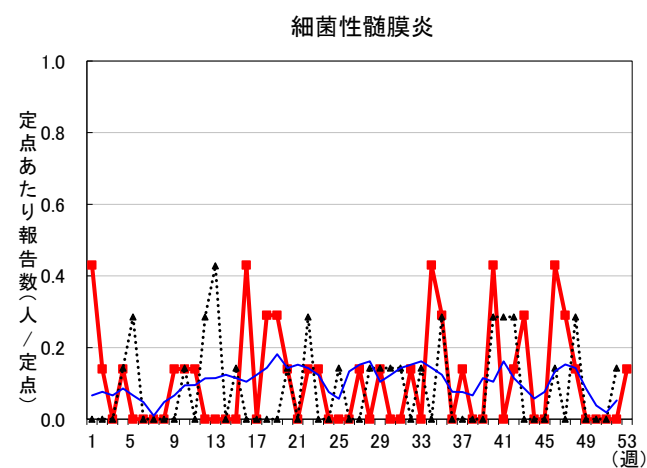
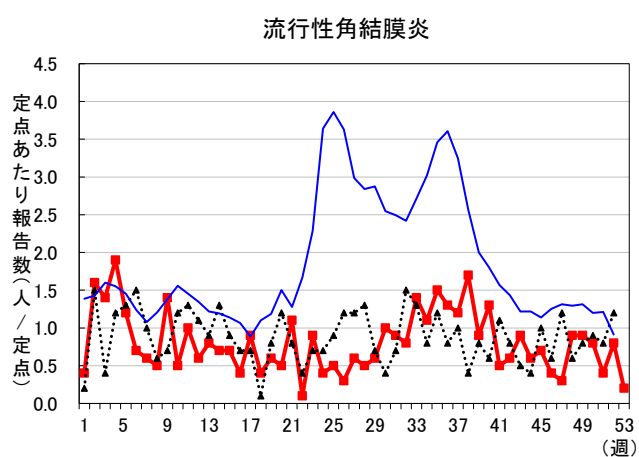
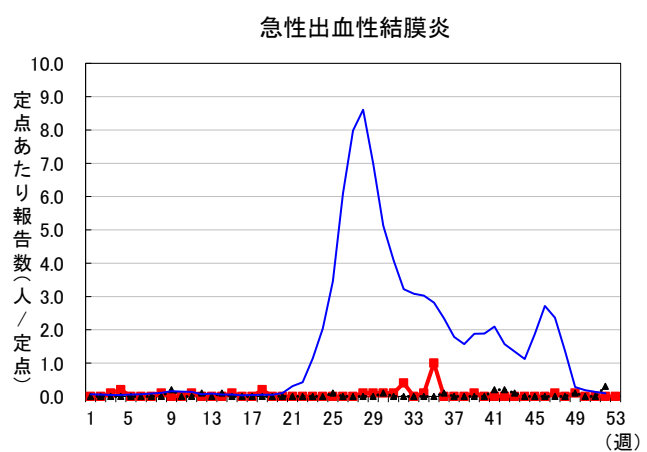
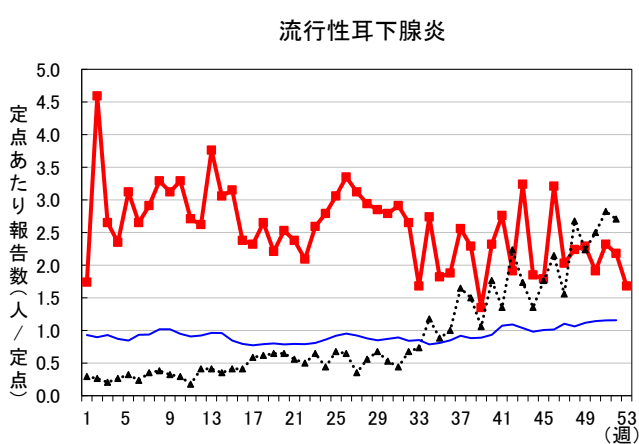
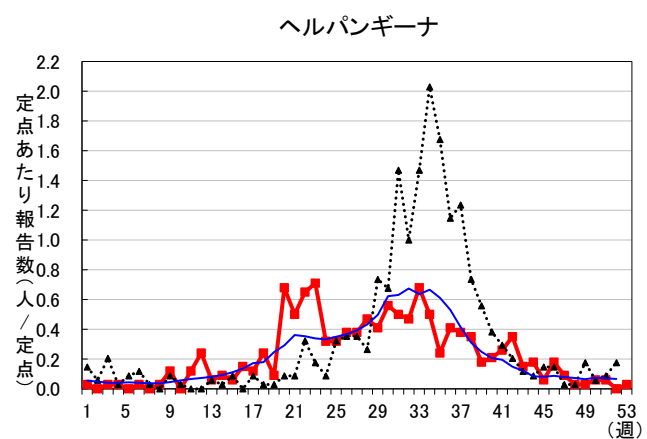
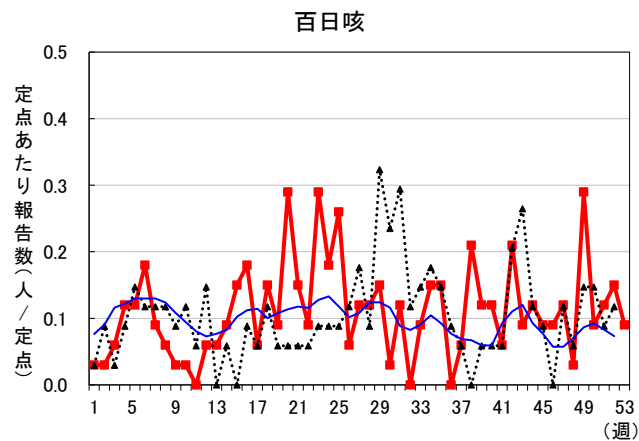
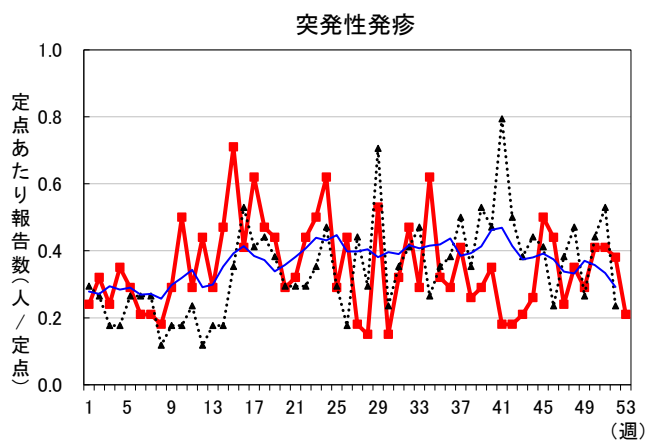


手足口病

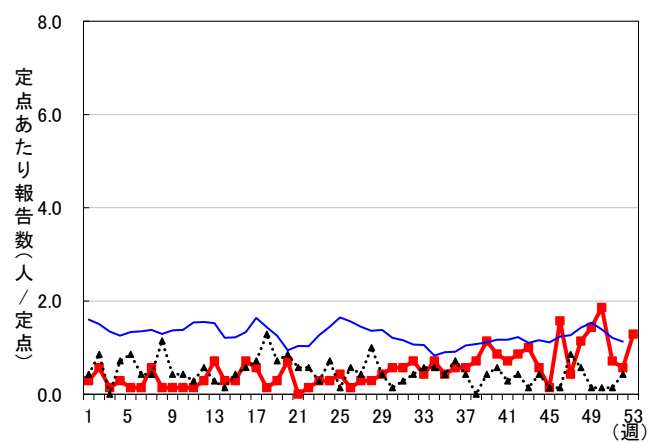


伝染性紅斑

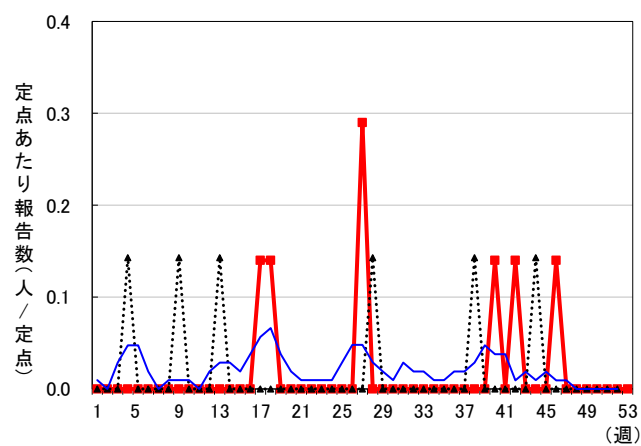




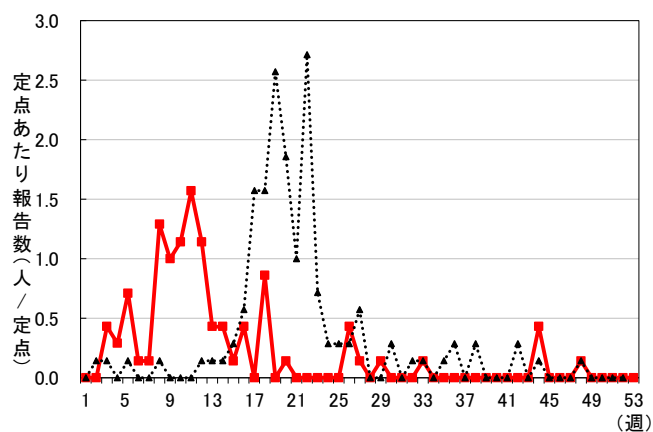
マイコプラズマ肺炎



クラミジア肺炎



感染性胃腸炎(ロタウイルス)

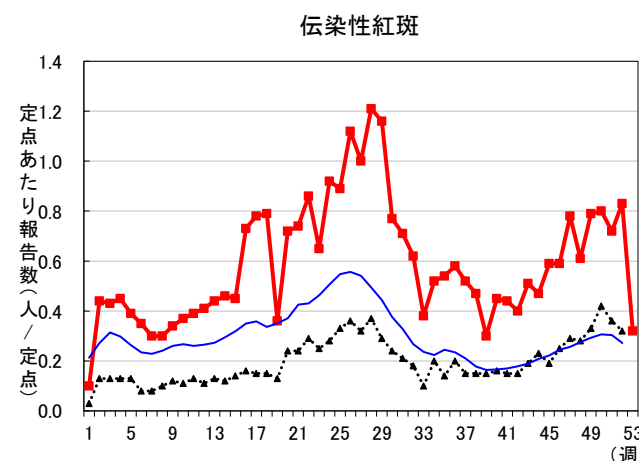
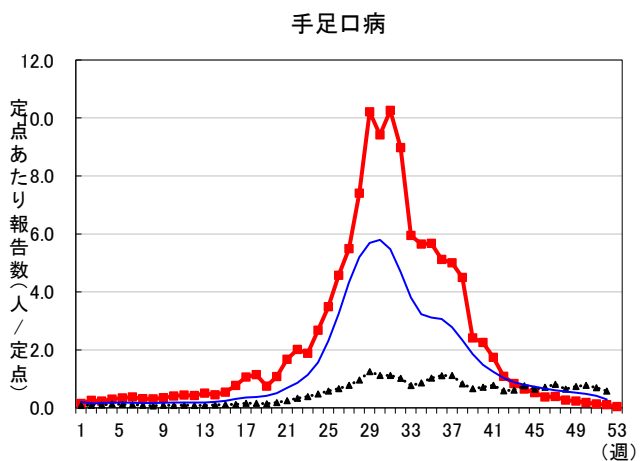
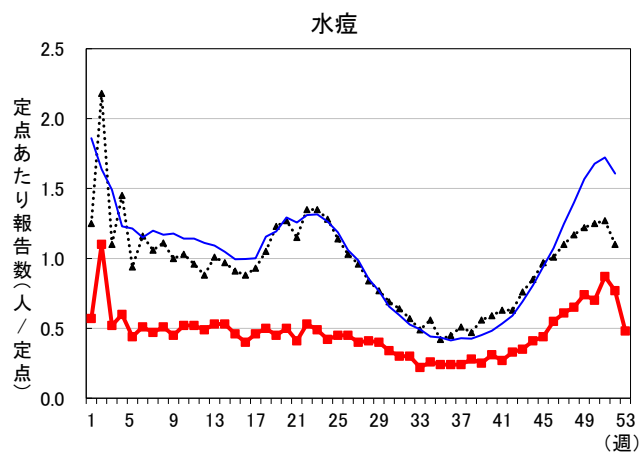
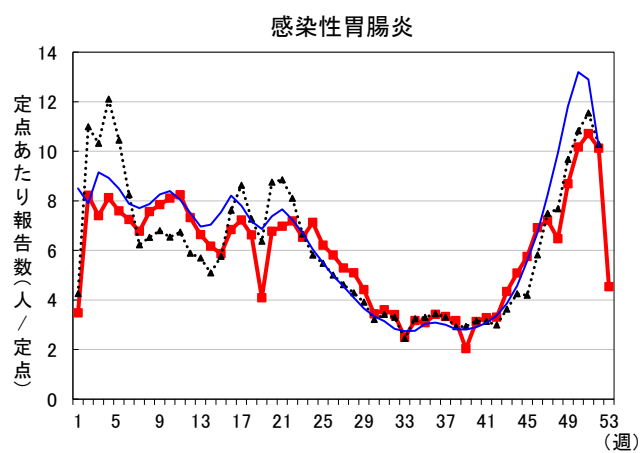
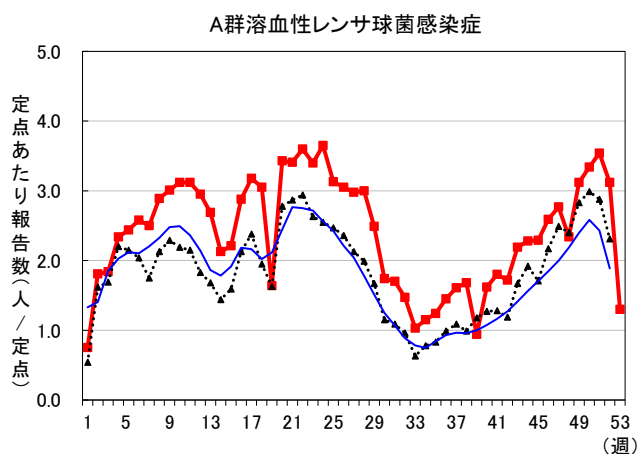
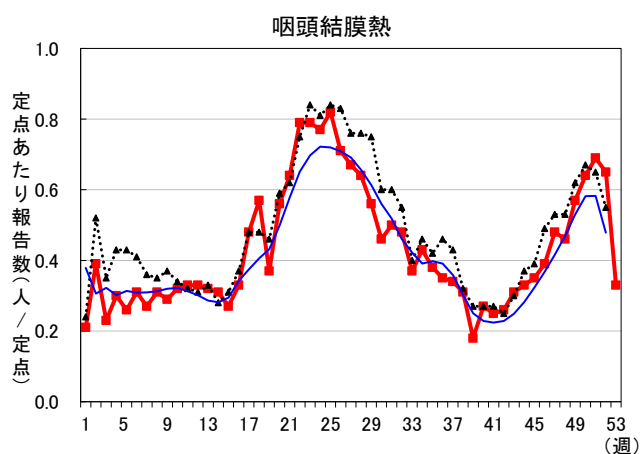
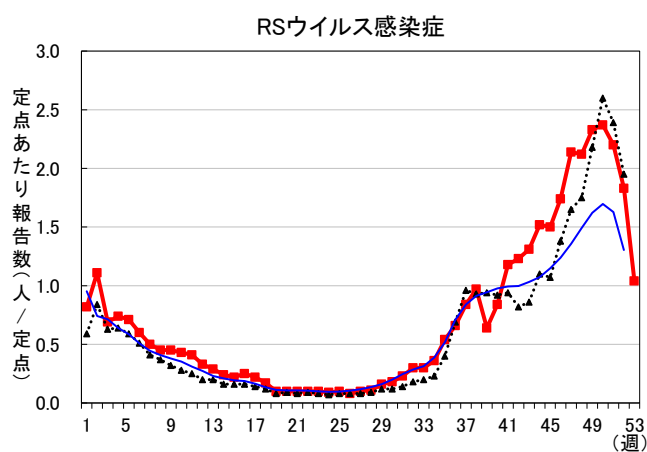
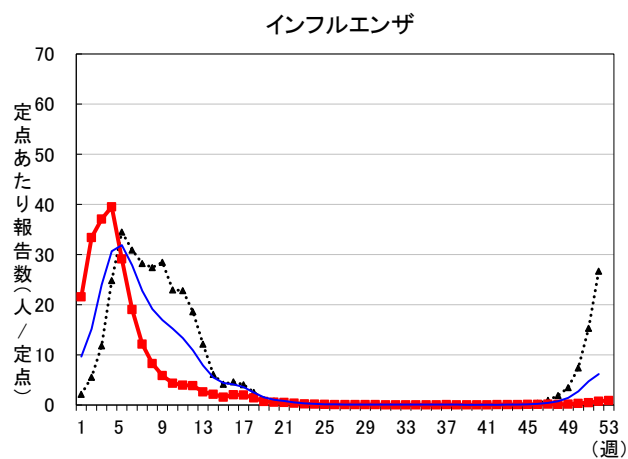


**2013年第42週からの集計のため、過去5年間の平均なし

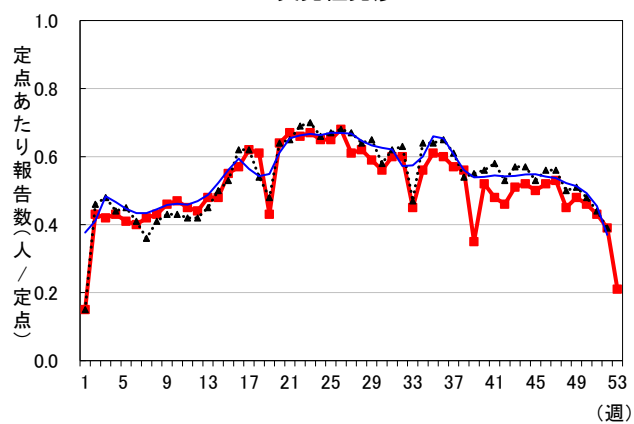
(4) グラフ一覧(全国)

—■— 2015年 ...▲... 2014年 — 過去5年間の平均 *

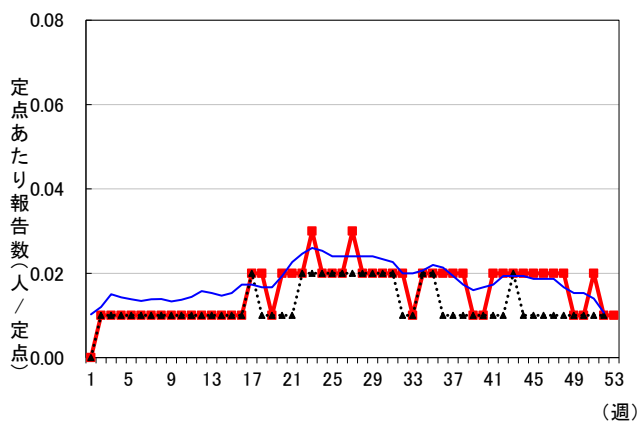
*過去5年間の平均: 前週、当該週、後週の合計15週の平均



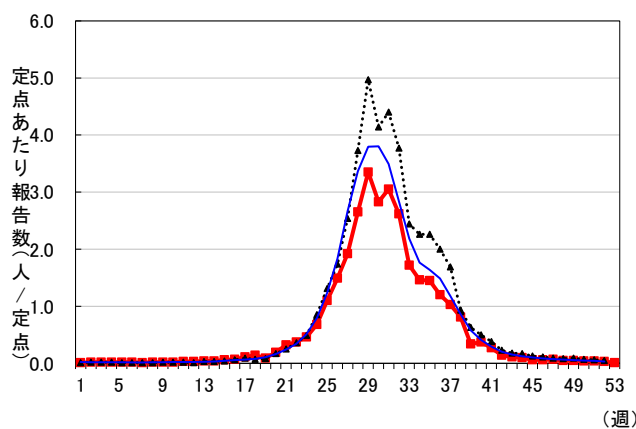
突発性発疹



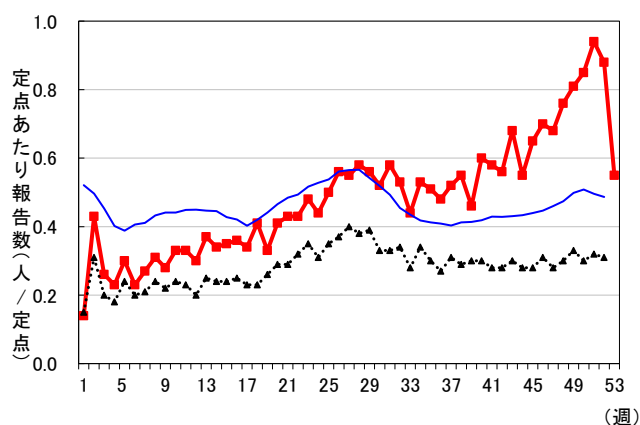
百日咳



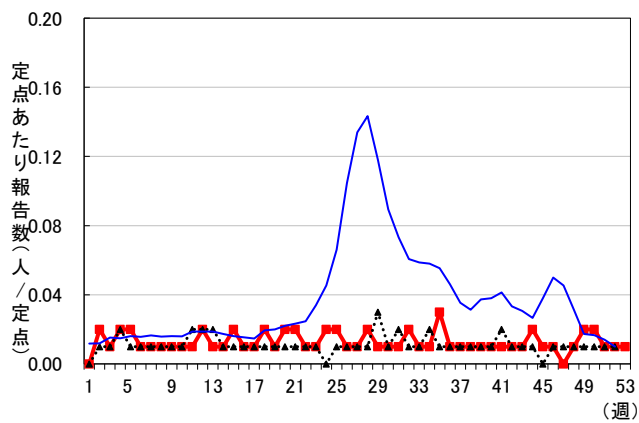
ヘルパンギーナ



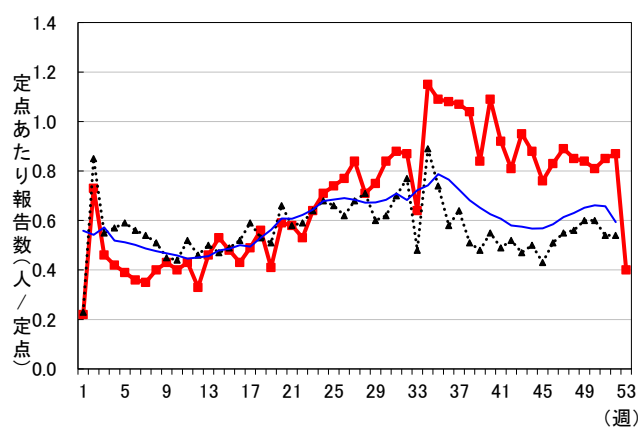
流行性耳下腺炎



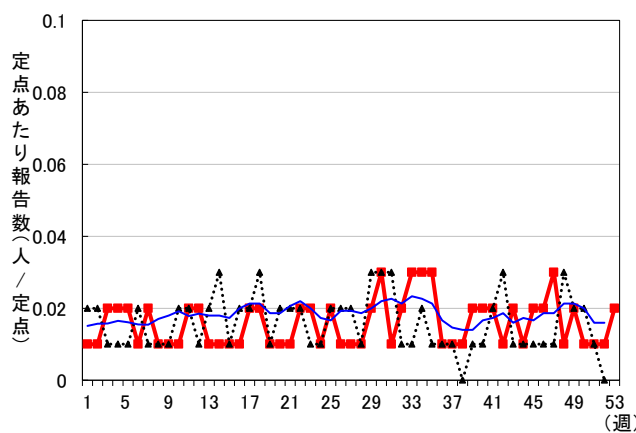
急性出血性結膜炎



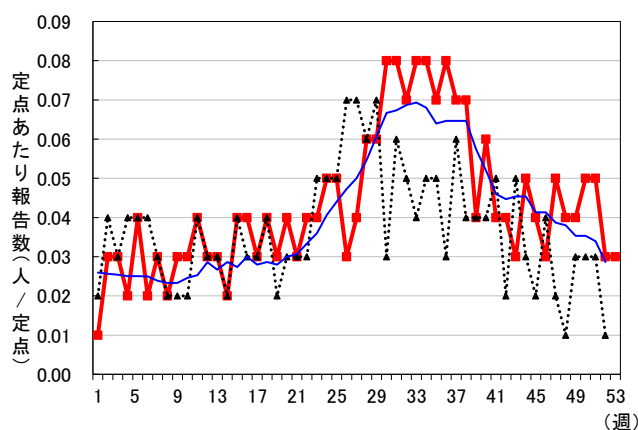
流行性角結膜炎



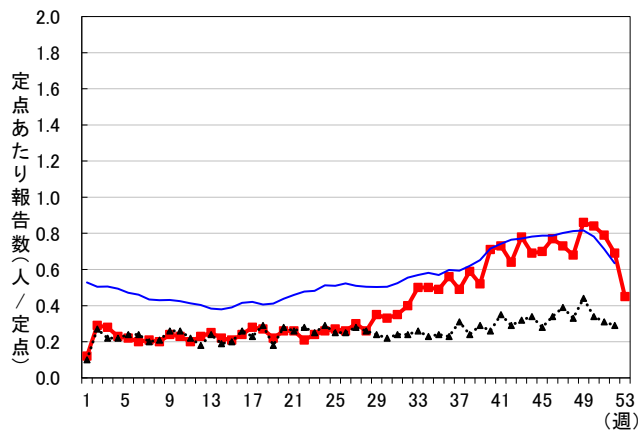
細菌性髄膜炎



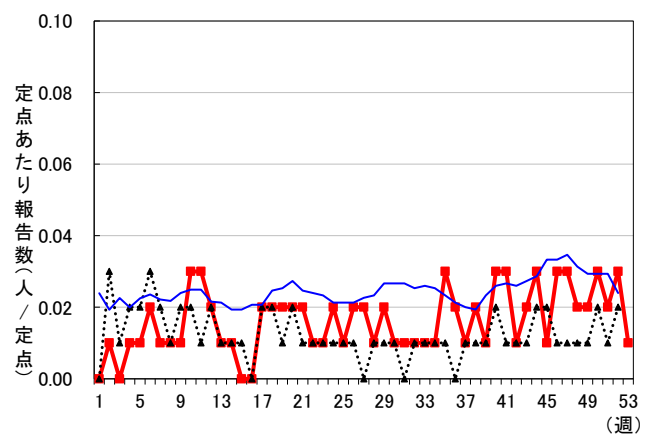
無菌性髄膜炎



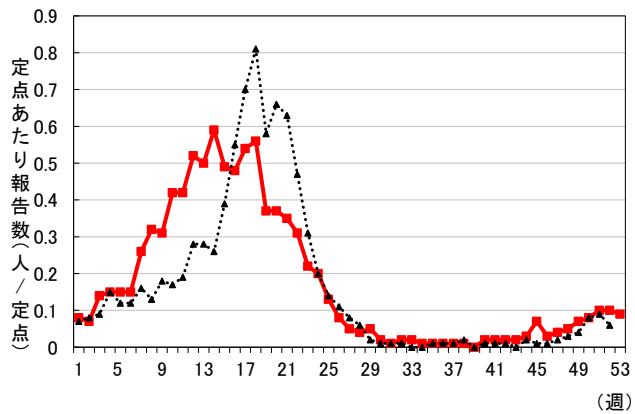
マイコプラズマ肺炎



クラミジア肺炎



感染性胃腸炎(ロタウイルス)

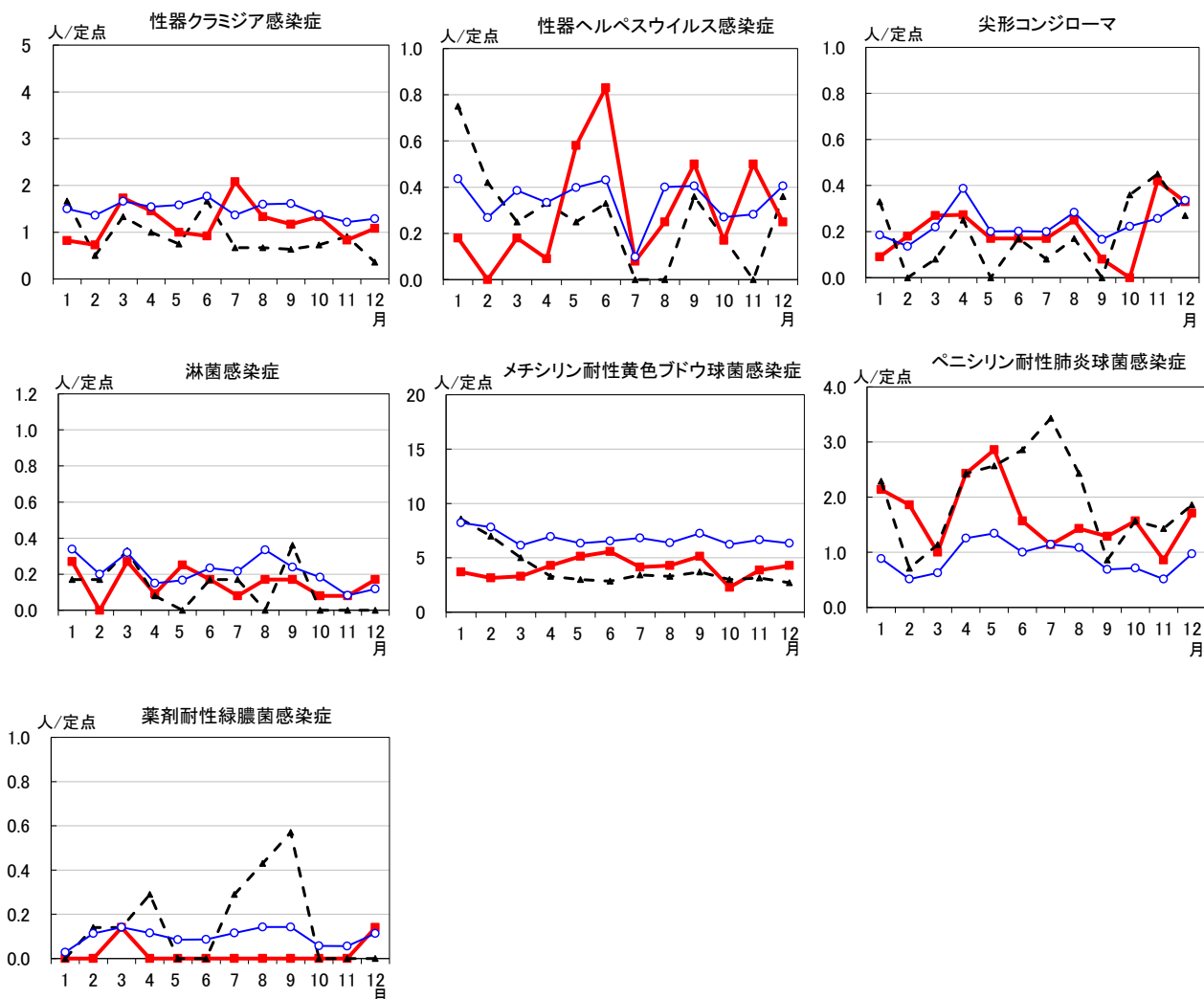


**2013年第42週からの集計のため、過去5年間の平均なし

4. 月別患者発生状況

(1) グラフ一覧(沖縄県)

—■— 2015年 - - - 2014年 —○— 過去5年間の平均

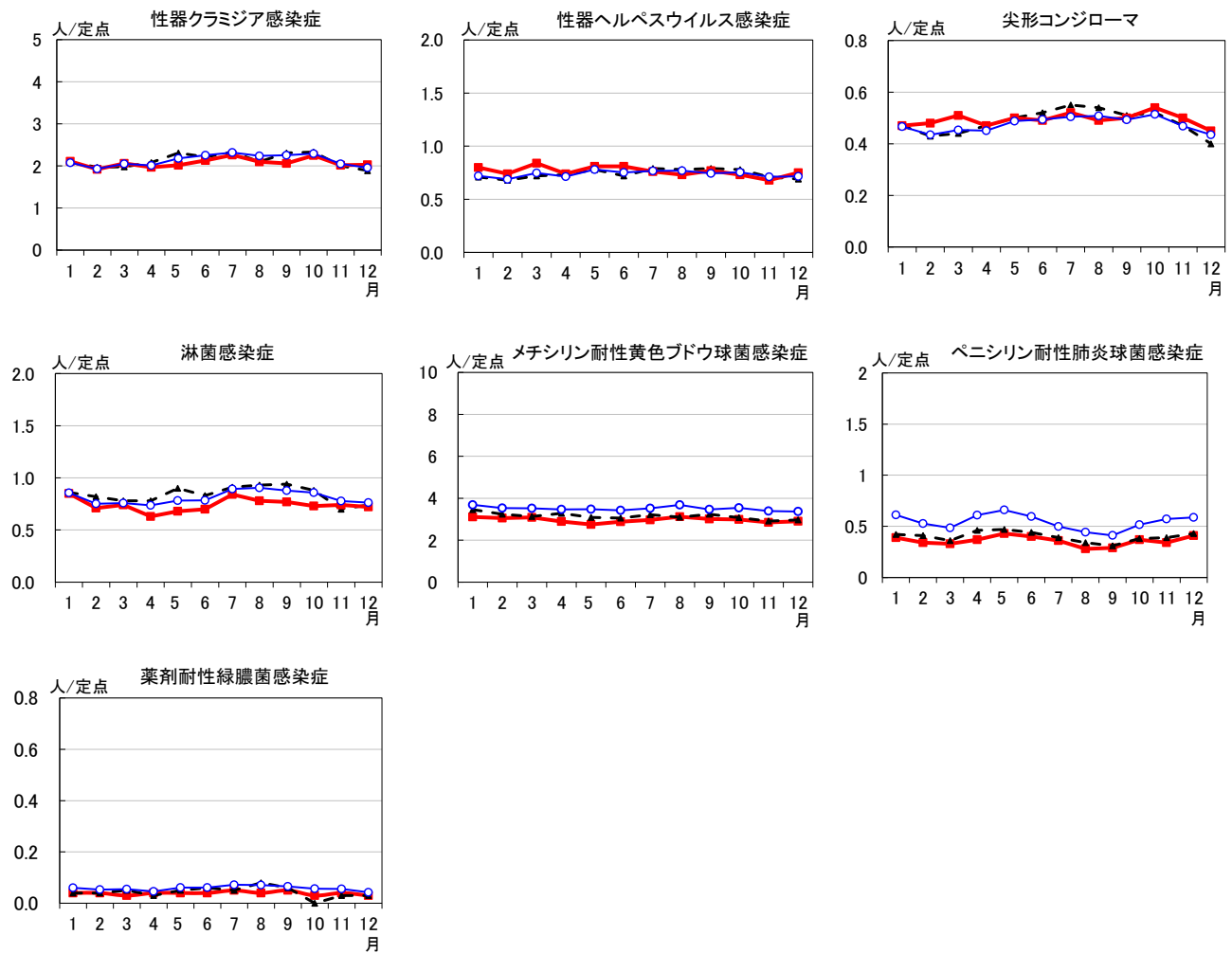


(2) 報告数一覧表(沖縄県)

	疾患名	報告数(人)		定点あたり患者報告数(人/定点)		月平均の定点あたり患者報告数(人/定点/月)	
		2014年	2015年	2014年	2015年	2014年	2015年
STD	性器クラミジア感染症	128	169	10.89	14.48	0.91	1.21
	性器ヘルペスウイルス感染症	38	43	3.24	3.62	0.27	0.30
	尖形コンジローマ	25	28	2.16	2.40	0.18	0.20
	淋菌感染症	17	21	1.45	1.80	0.12	0.15
基幹 定点	メチシリン耐性黄色ブドウ球菌感染症	343	344	48.99	49.14	4.08	4.10
	ペニシリン耐性肺炎球菌感染症	165	139	23.58	19.86	1.96	1.66
	薬剤耐性緑膿菌感染症	13	2	1.86	0.29	0.15	0.02

(3) グラフ一覧(全国)

—■— 2015年 -▲- 2014年 ○— 過去5年間の平均



(4) 報告数一覧表(全国)

	疾患名	報告数(人)		定点あたり患者報告数(人/定点)		月平均の定点あたり患者報告数(人/定点/月)	
		2014年	2015年	2014年	2015年	2014年	2015年
STD	性器クラミジア感染症	24,960	24,450	25.60	24.95	2.13	2.08
	性器ヘルペスウイルス感染症	8,653	8,974	8.88	9.16	0.74	0.76
	尖形コンジローマ	5,687	5,806	5.82	5.92	0.49	0.49
	淋菌感染症	9,805	8,698	10.07	8.88	0.84	0.74
基幹 定点	メチシリン耐性黄色ブドウ球菌感染症	18,042	17,057	37.77	35.61	3.15	2.97
	ペニシリン耐性肺炎球菌感染症	2,292	2,057	4.37	4.29	0.40	0.36
	薬剤耐性緑膿菌感染症	268	217	0.52	0.45	0.05	0.04

Ⅲ 定点把握対象 五類感染症(週報・月報)発生状況

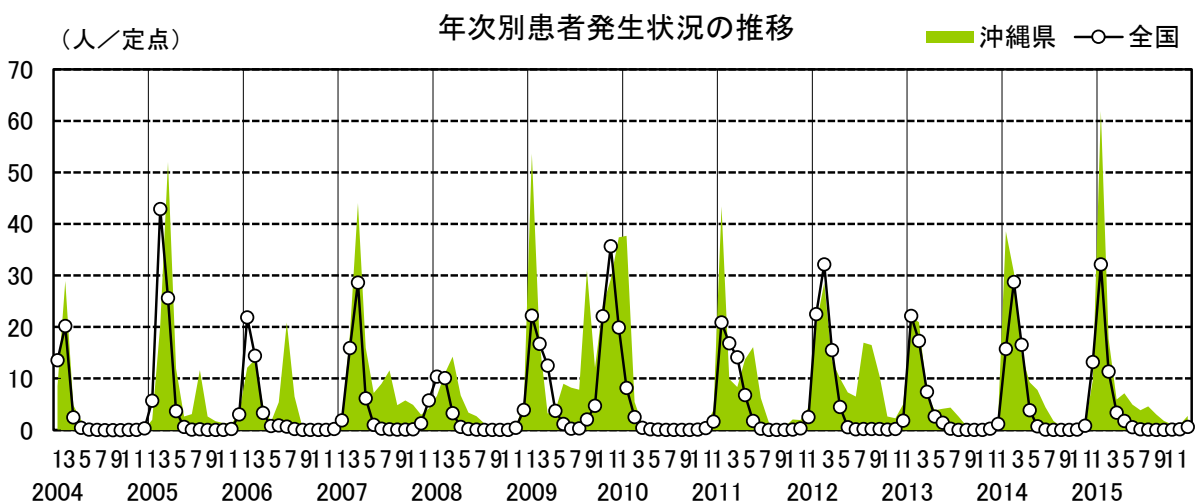
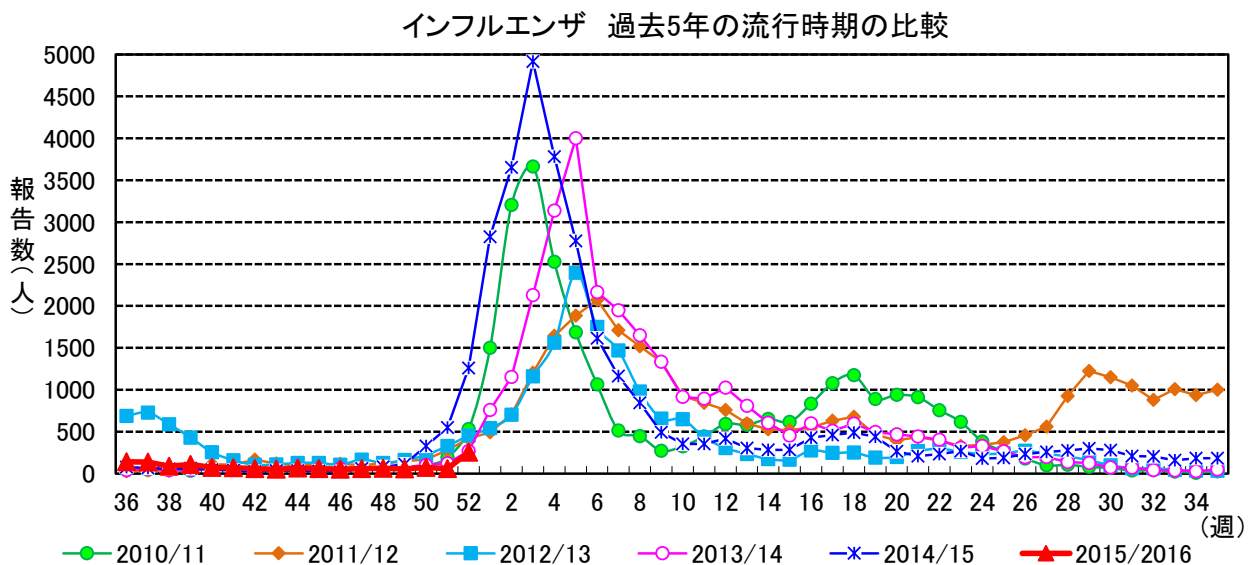
(インフルエンザ／小児科定点)

インフルエンザ

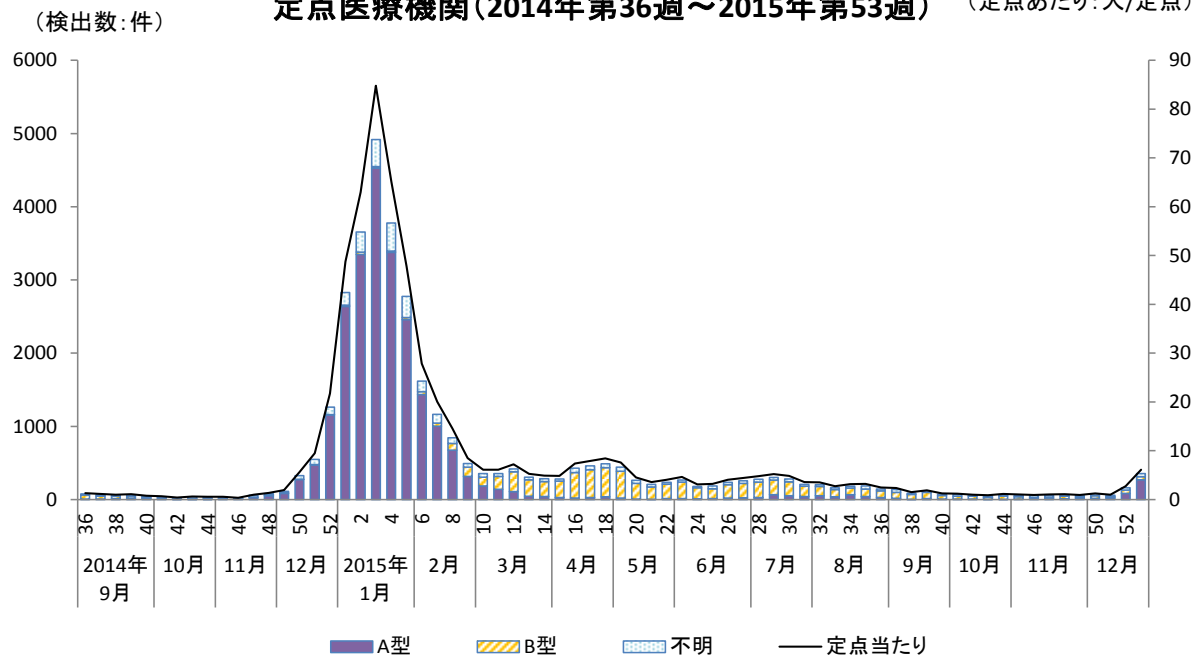
2015年沖縄県内の患者報告数は31,238人、定点あたりの報告数は538.59人であった。沖縄県は、2013/14シーズン第32週（8月）から流行の兆しである1.0人／定点を下回った状態で2014/15シーズン（2014年第36週～2015年第35週）に入った。2014年第52週（12月）には21.72人／定点と注意報レベルを超え、第1週（1月）から第8週（2月）まで警報レベルが継続した。今シーズンのピークは、第3週（1月）84.78人／定点であった。警報解除後も、流行の兆しレベルを上回り続け、翌2015/2016シーズンの第42週（10月）まで継続した。

年齢階級別では、5-9歳が最も多く全体の18.1%を占め、続いて0-4歳が15.7%であった。

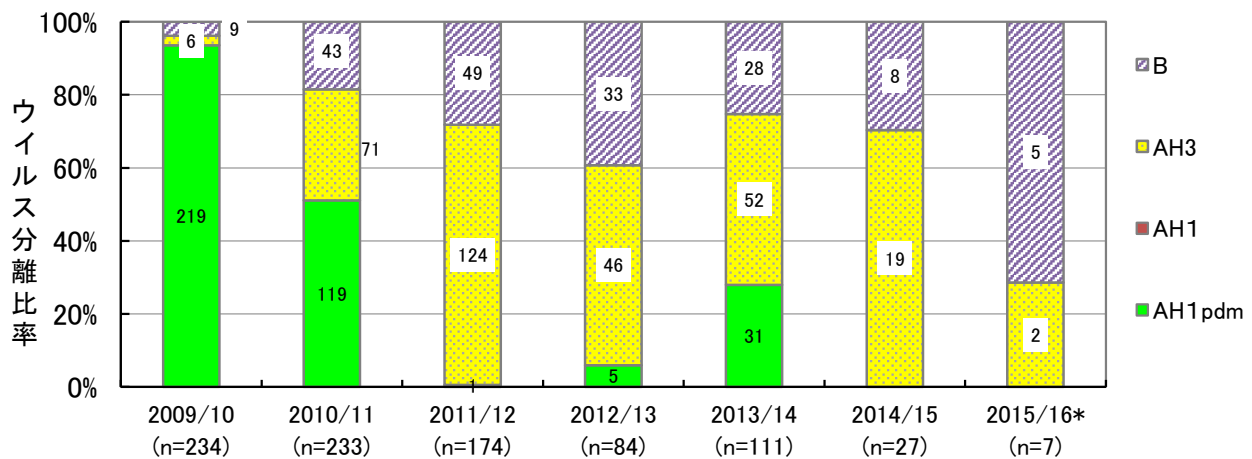
2014/15シーズンに検出されたインフルエンザウイルスは、AH3亜型が全体の約70%を占め最も多く、残りはB型が約30%であった。



インフルエンザウイルス型別報告 定点医療機関(2014年第36週～2015年第53週)



シーズン別インフルエンザウイルス検出状況(衛生環境研究所 検査分)

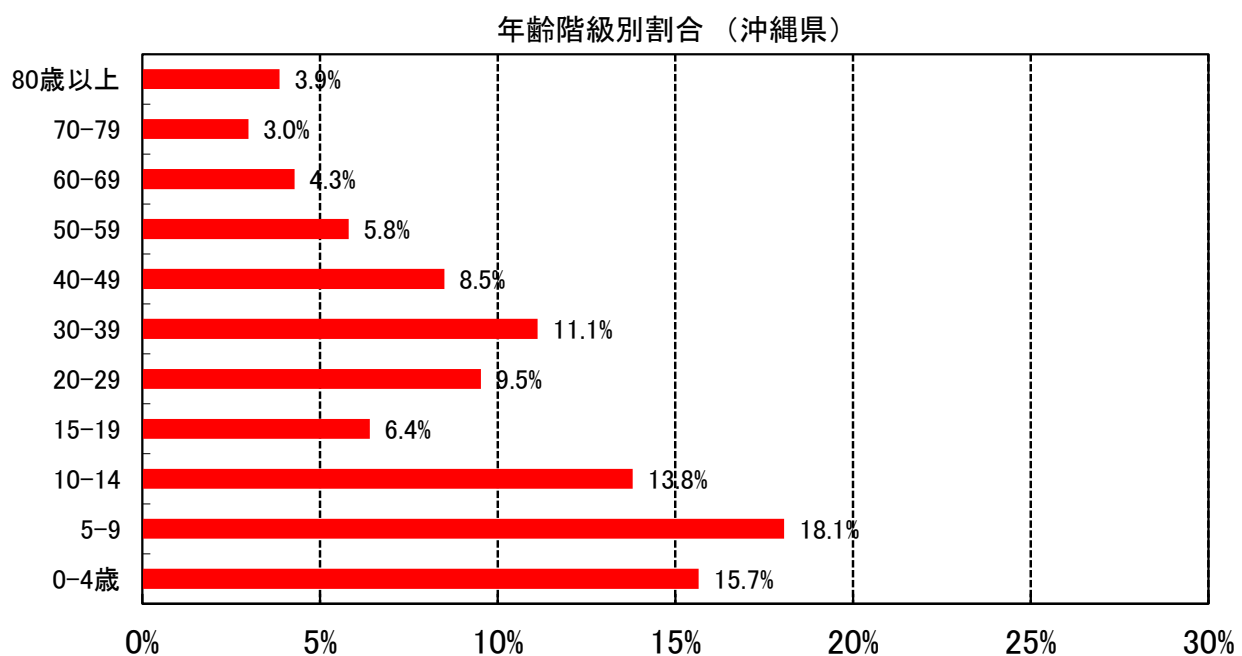
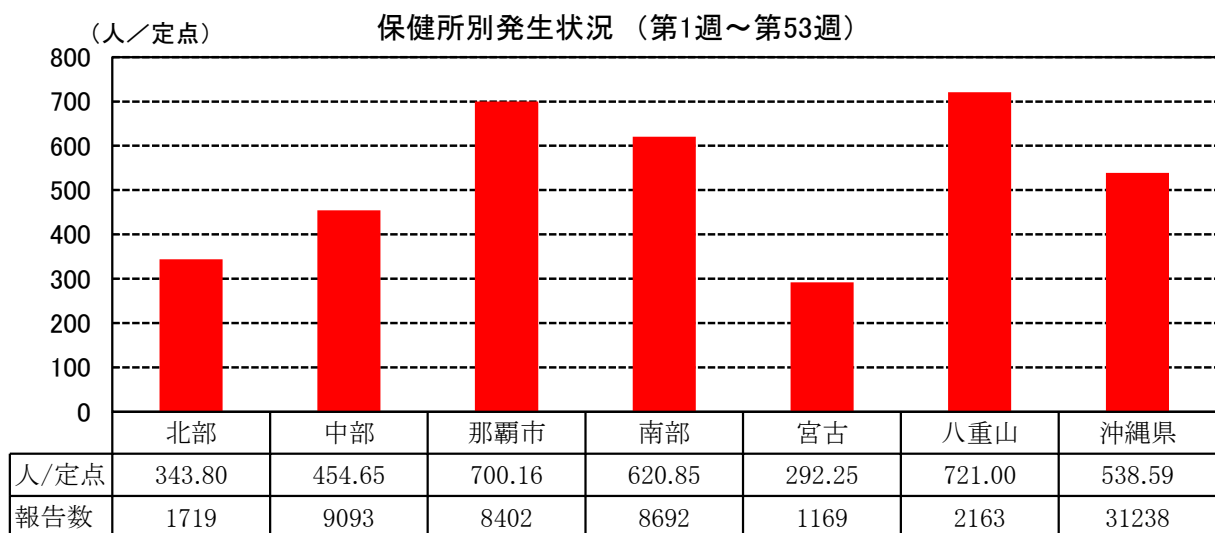
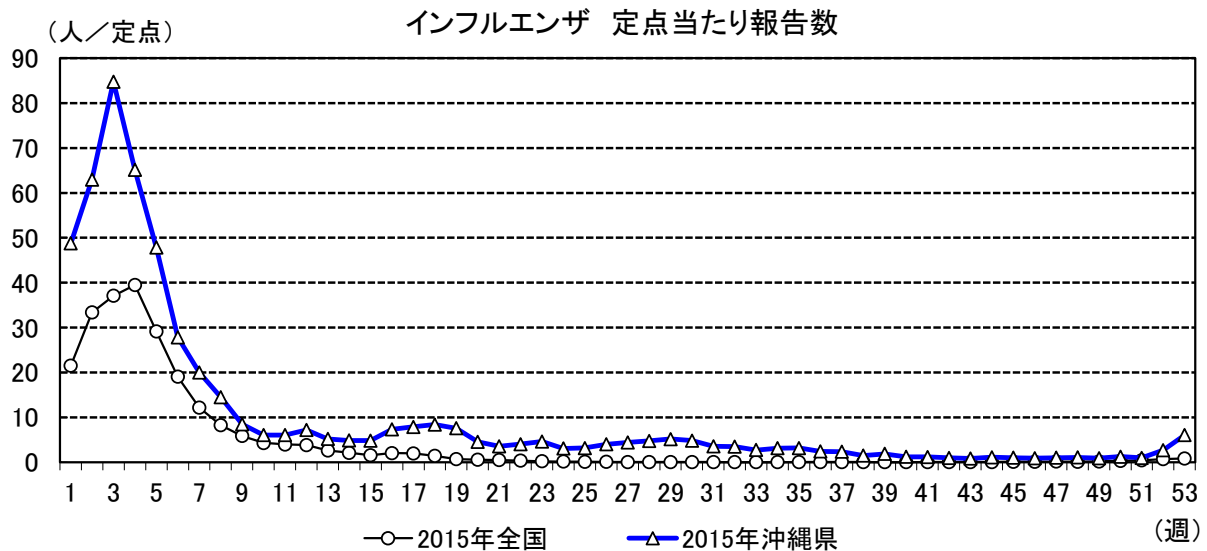


*2015年第36週～第53週

シーズン(9月～翌年8月)別の報告数合計: インフルエンザ

平均報告数 (2015/16)を除く	2010/11	2011/12	2012/13	2013/14	2014/15	2015/16*
28,915	28,157	32,729	21,735	29,570	32,386	1,733

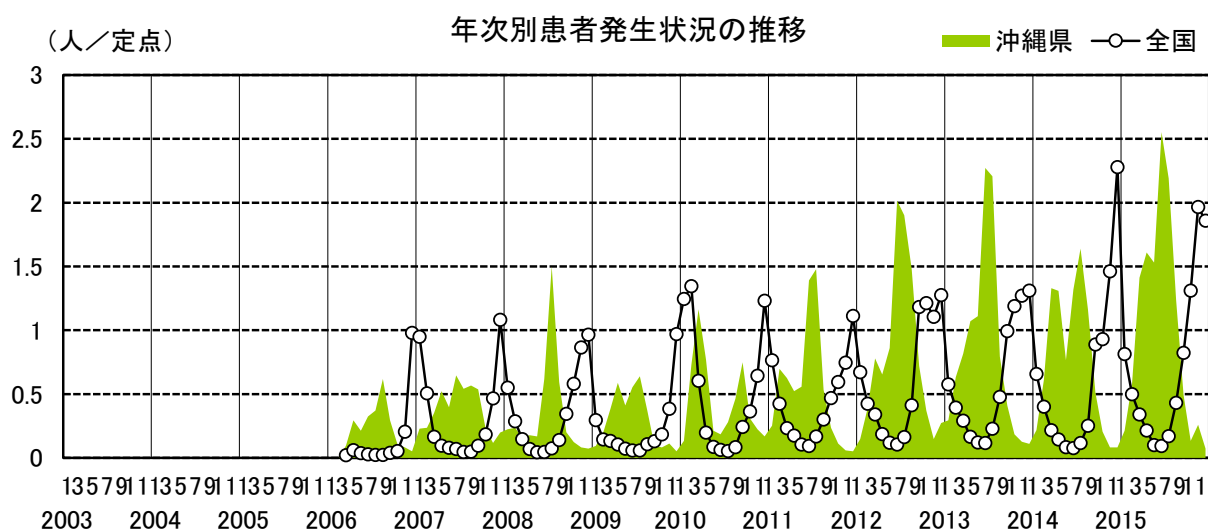
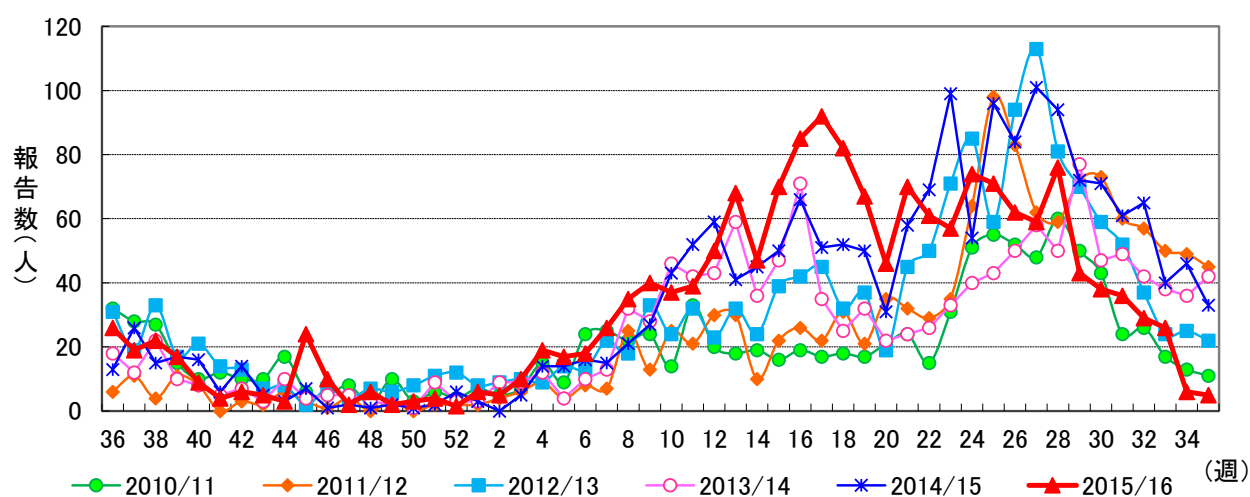
*2015年9月～12月末(第36週～第53週)



RSウイルス感染症

RSウイルス感染症は、RSウイルスによる急性呼吸器感染症である。生後1歳までに半数以上が、2歳までにほぼ100%の児がRSウイルスに少なくとも1度は感染するとされている。特に乳児期早期（生後数週間～数カ月間）にRSウイルスに初感染した場合は、重症化しやすいため感染しないよう注意が必要である。

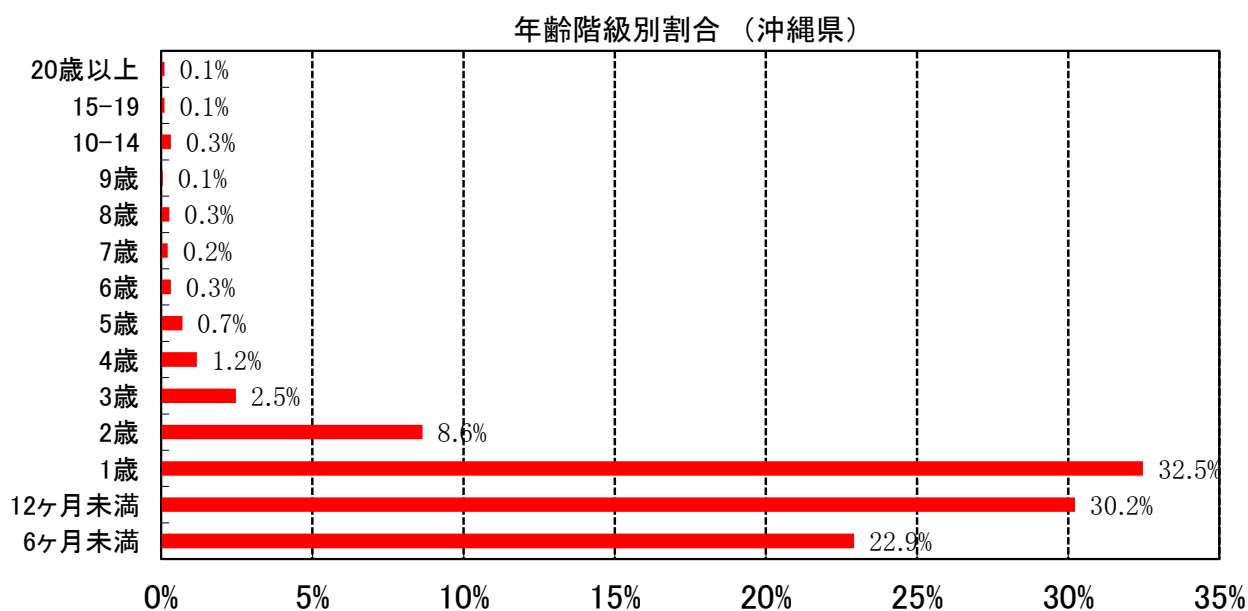
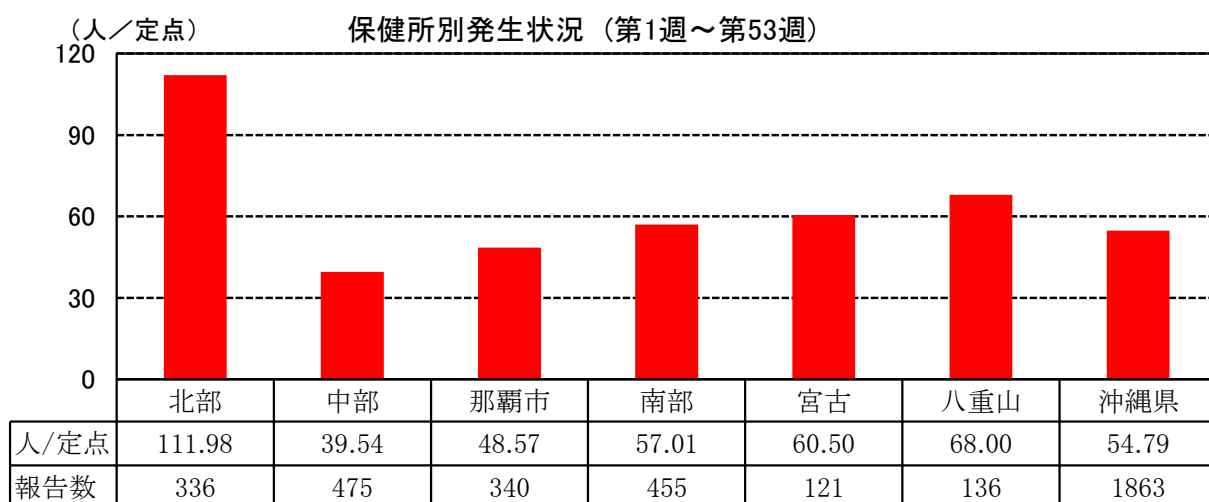
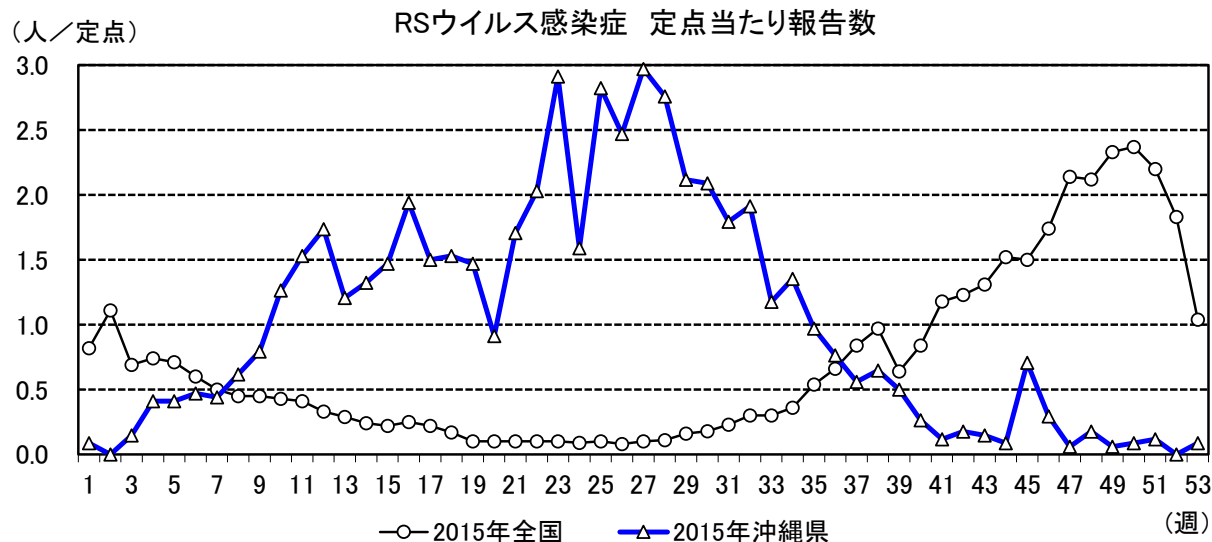
2014/15シーズンの県内患者報告数は1,835人、定点当たり53.96人であった。患者数は年々増加傾向にあり、このシーズンは過去5シーズンでもっとも報告数が多かった。全国では冬季に流行のピークが認められたのに対し、本県では春季と夏季に流行が認められた。2015年の年齢階級別では1歳が最も多く全体の32.5%を占めていた。



シーズン(9月～翌年8月)別の報告数合計：RSウイルス感染症

平均報告数 (2015/16)を除く	2010/11	2011/12	2012/13	2013/14	2014/15	2015/16*
1,429	1,075	1,285	1,592	1,360	1,835	165

*2015年9月～12月末(第36週～第53週)



咽頭結膜熱（プール熱、PCF）

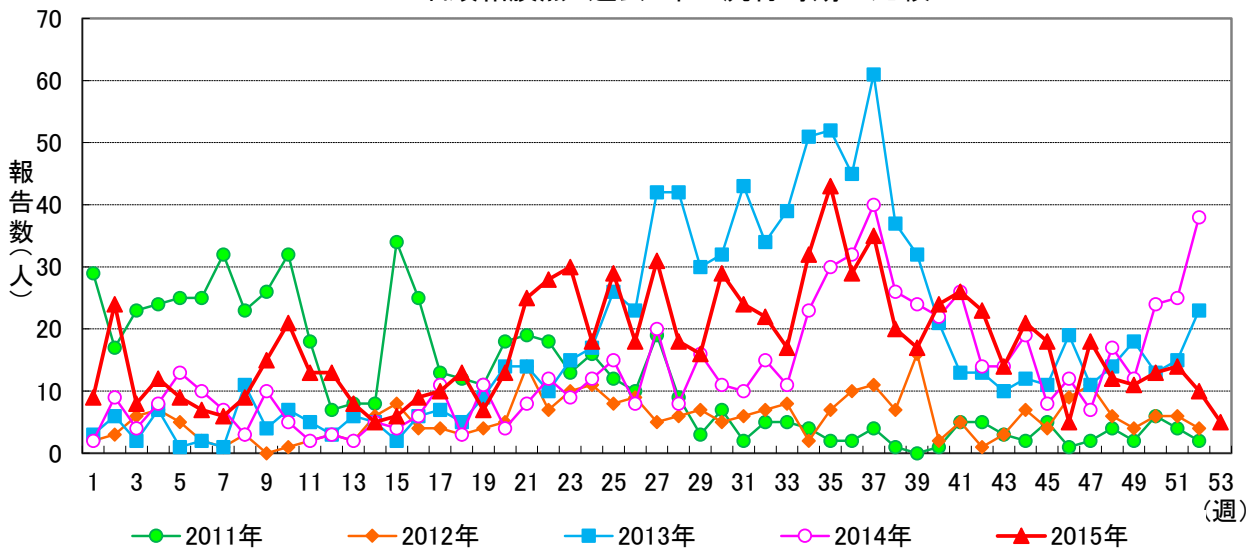
咽頭結膜熱は、アデノウイルスによる発熱、咽頭炎、眼症状を主とする小児の急性ウイルス感染症であり、プールを介した感染も多く、プール熱とも呼ばれている。

2015年県内の患者報告数は912人、定点当たり26.82人であり、2011年以降の5年間で2013年に次ぐ件数となった。全国では5月から6月にかけて多いが、本県では8月から9月にかけて多くなった。

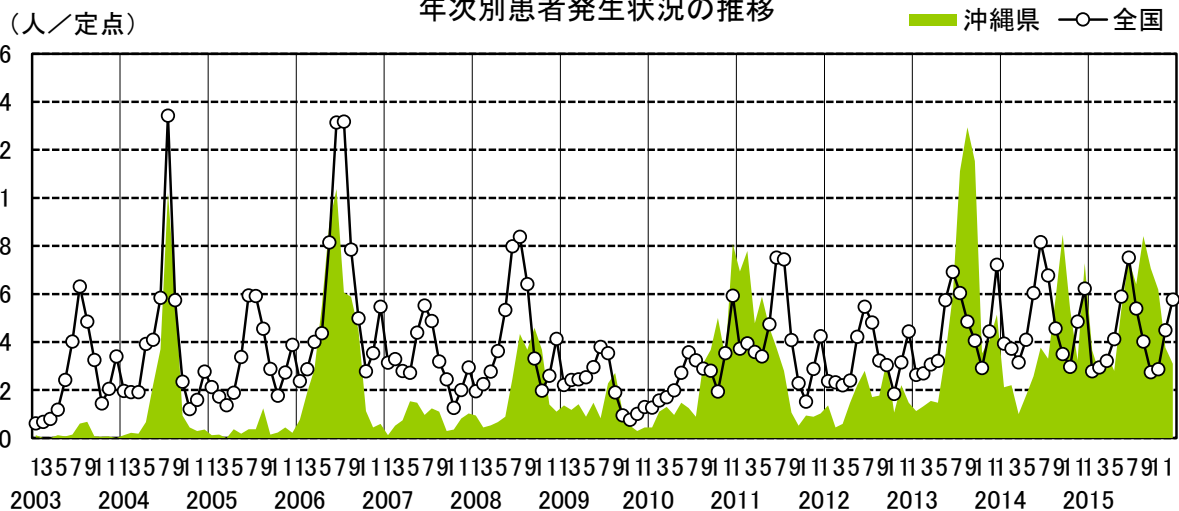
第1週から2週（1月）にかけて北部保健所と宮古保健所管内で、第10週から12週（3月）にかけて北部保健所管内で警報レベルに達した。

保健所別では、北部保健所の患者報告数が72.69人/定点と最も多かった。年齢階級別では、1歳が最も多く全体の34.0%を占めていた。

咽頭結膜熱 過去5年の流行時期の比較



年次別患者発生状況の推移

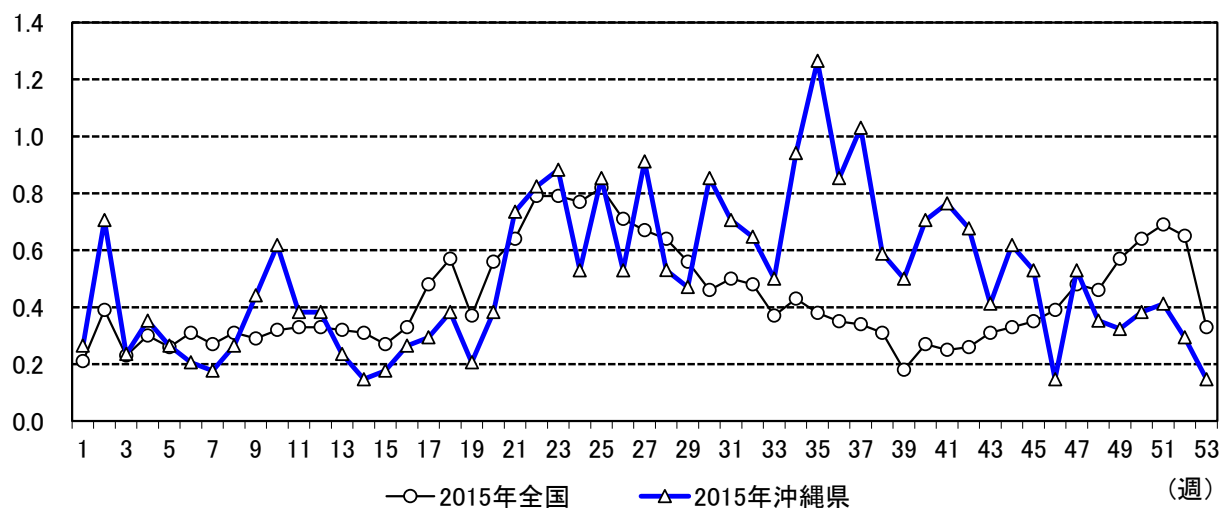


年別の報告数合計：咽頭結膜熱

平均報告数	2011年	2012年	2013年	2014年	2015年
689	603	295	944	690	912

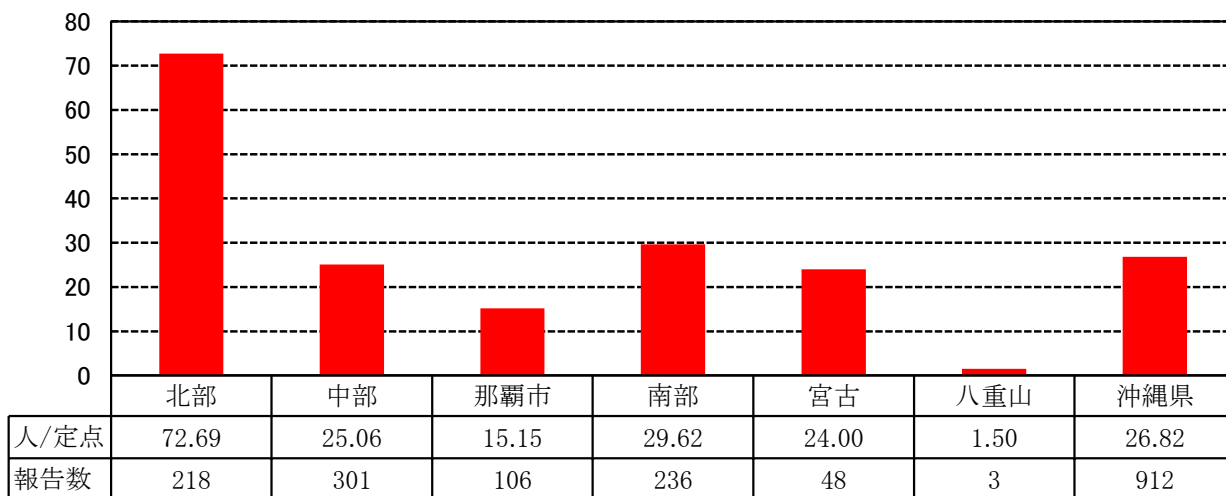
(人／定点)

咽頭結膜熱 定点当たり報告数

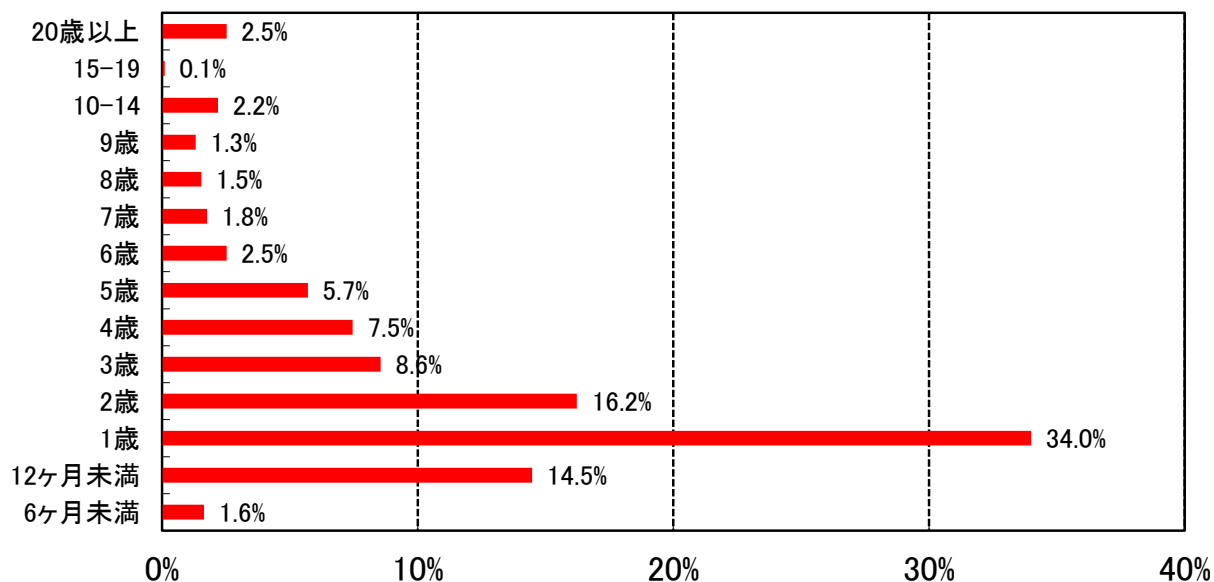


(人／定点)

保健所別発生状況（報告数及び定点あたり報告数）



年齢階級別割合（沖縄県）

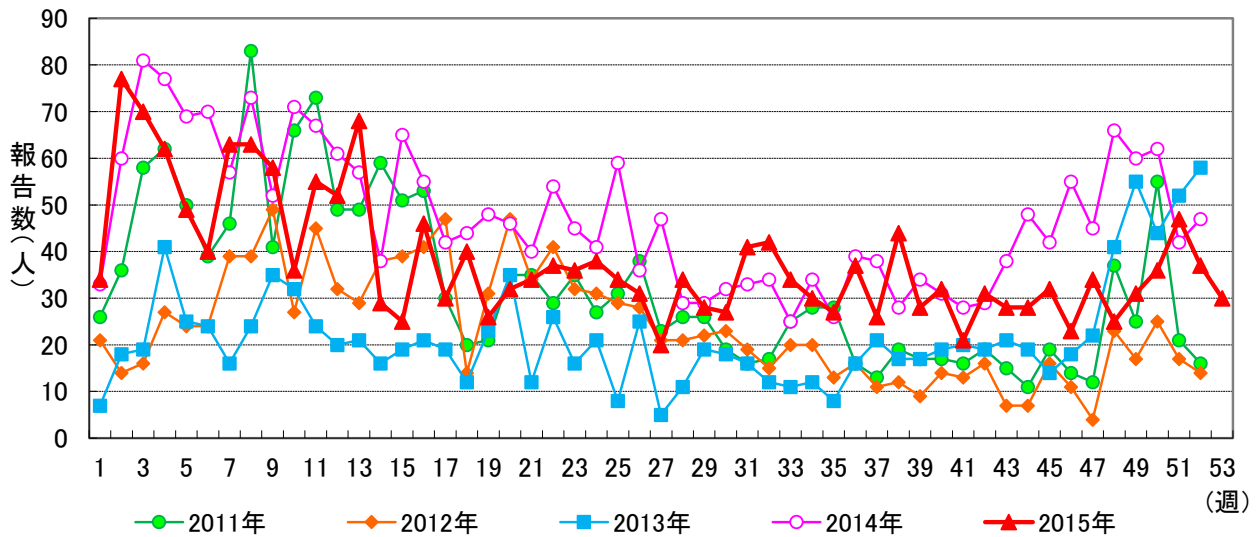


A群溶血性レンサ球菌咽頭炎

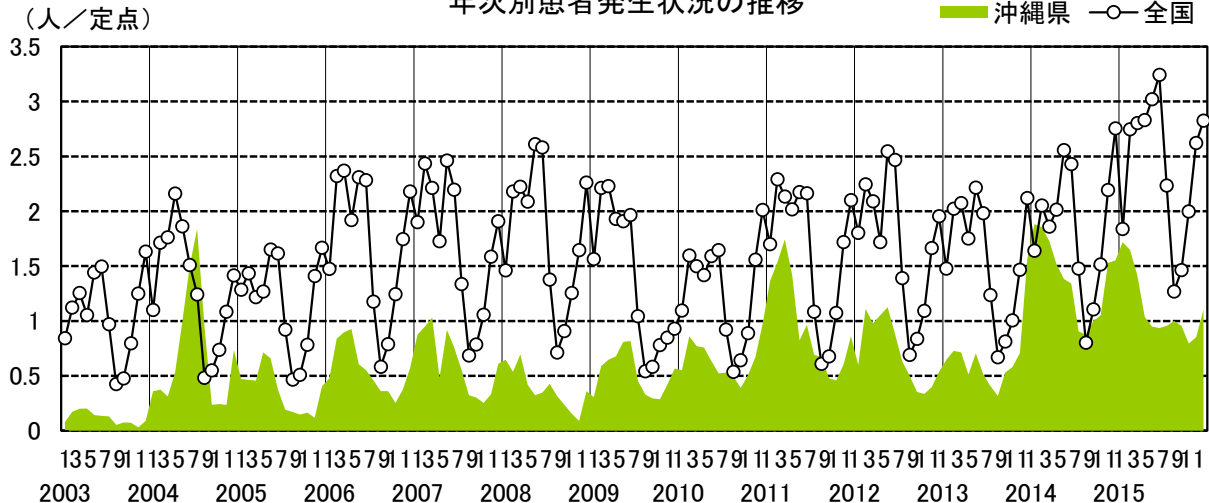
A群溶血性レンサ球菌咽頭炎は、いずれの年齢でも起こり得るが、学童期の小児に最も多く認められる。乳幼児では咽頭炎、年長児や成人では扁桃炎が現れ、発赤毒素に免疫のない人は猩紅熱を呈する。発疹を伴うこともあり、リウマチ熱や急性糸球体腎炎などの二次疾患を起こすこともある。

2015年県内の患者報告数は2,018人、定点当たり59.35人であり、報告数は、2011年以降の5年間で2014年に次いで多かった。全国では夏季及び冬季にピークがみられるが、県内では、冬季に報告が多い。警報レベルは八重山保健所管内では、第2週から4週（1月）にかけて継続した。

A群溶血性レンサ球菌咽頭炎 過去5年の流行時期の比較

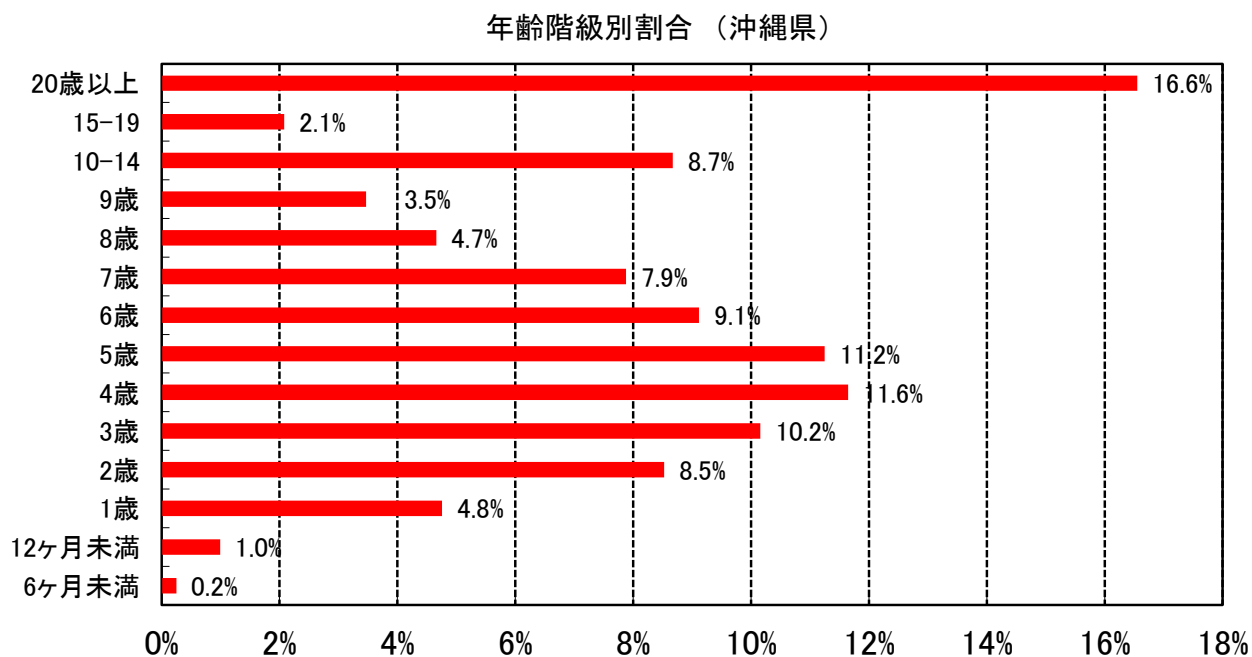
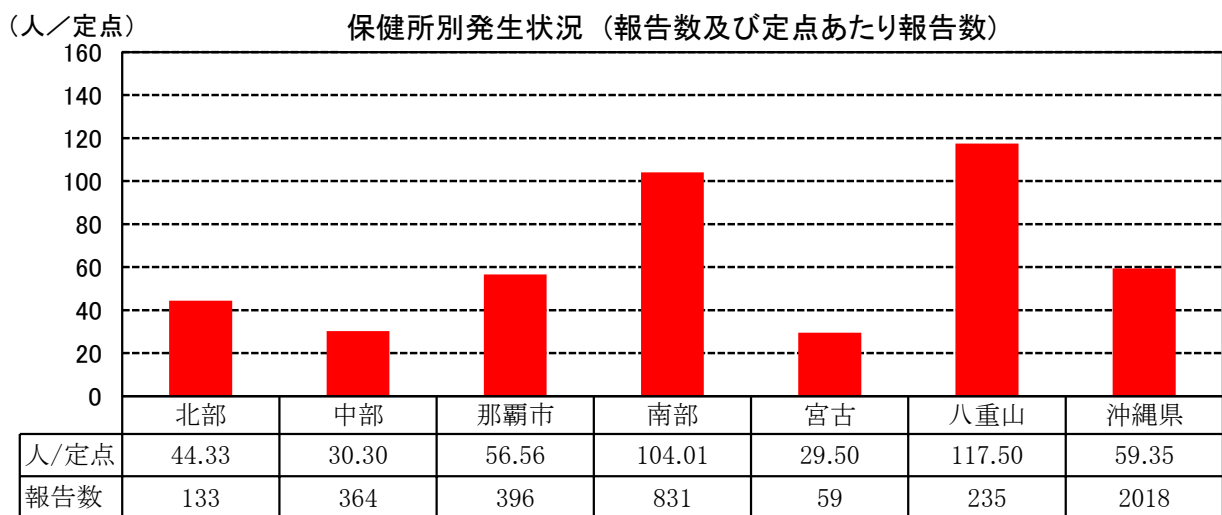
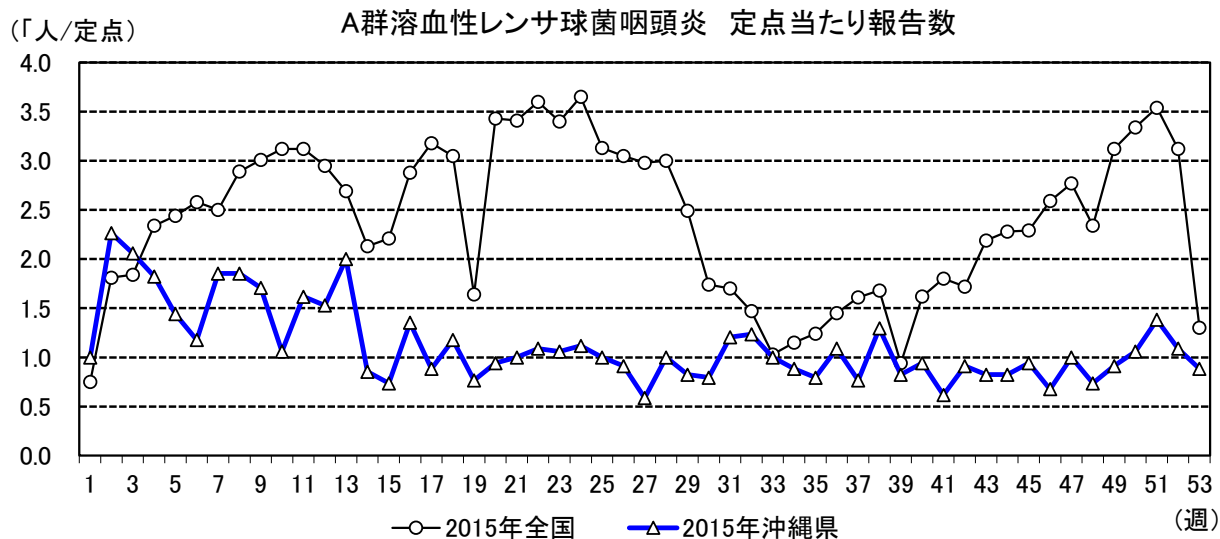


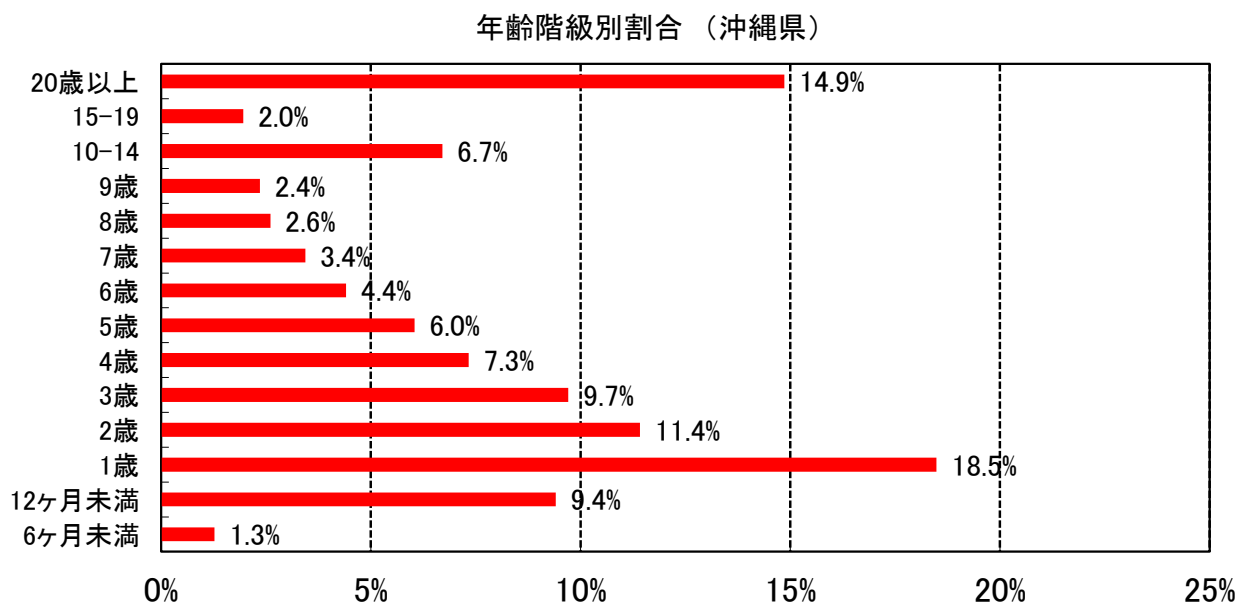
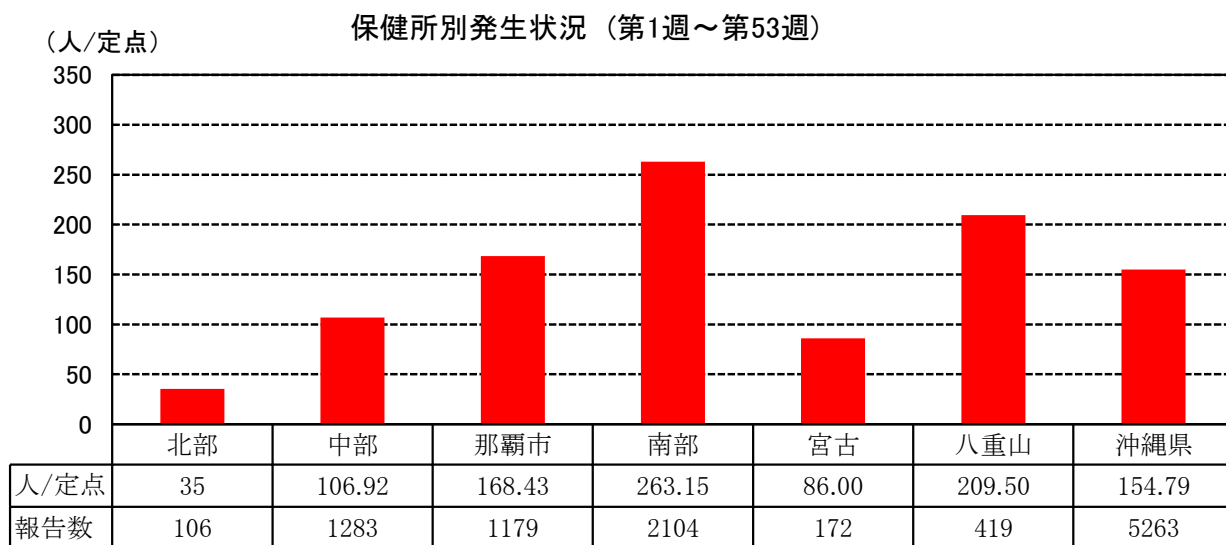
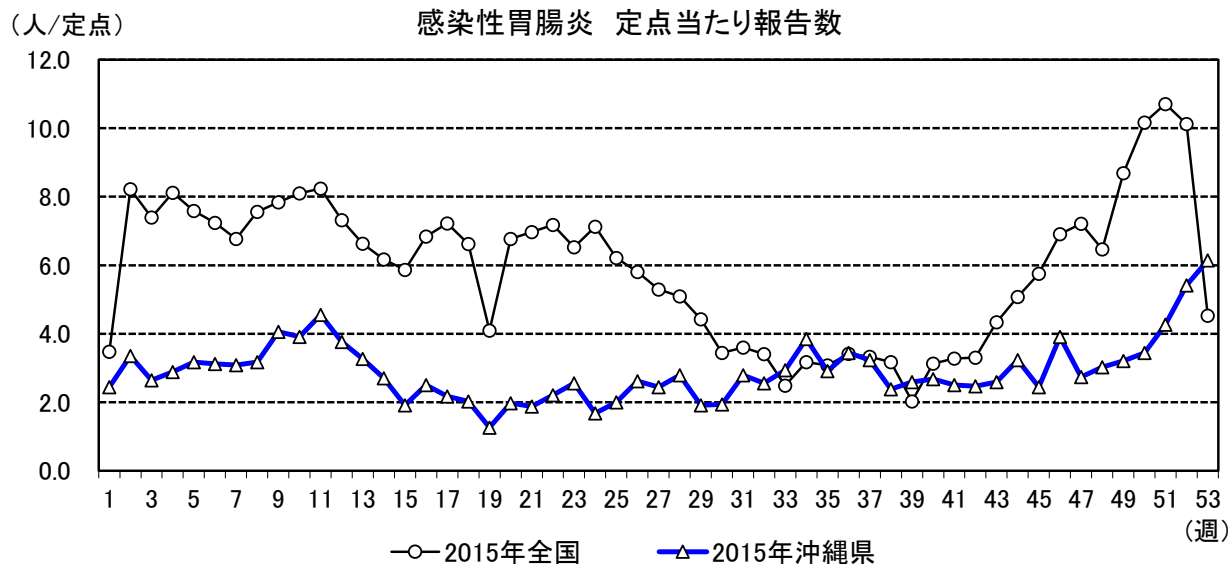
年次別患者発生状況の推移



シーズン別の報告数合計: A群溶血性レンサ球菌咽頭炎

平均報告数	2011年	2012年	2013年	2014年	2015年
1,712	1,692	1,245	1,144	2,462	2,018





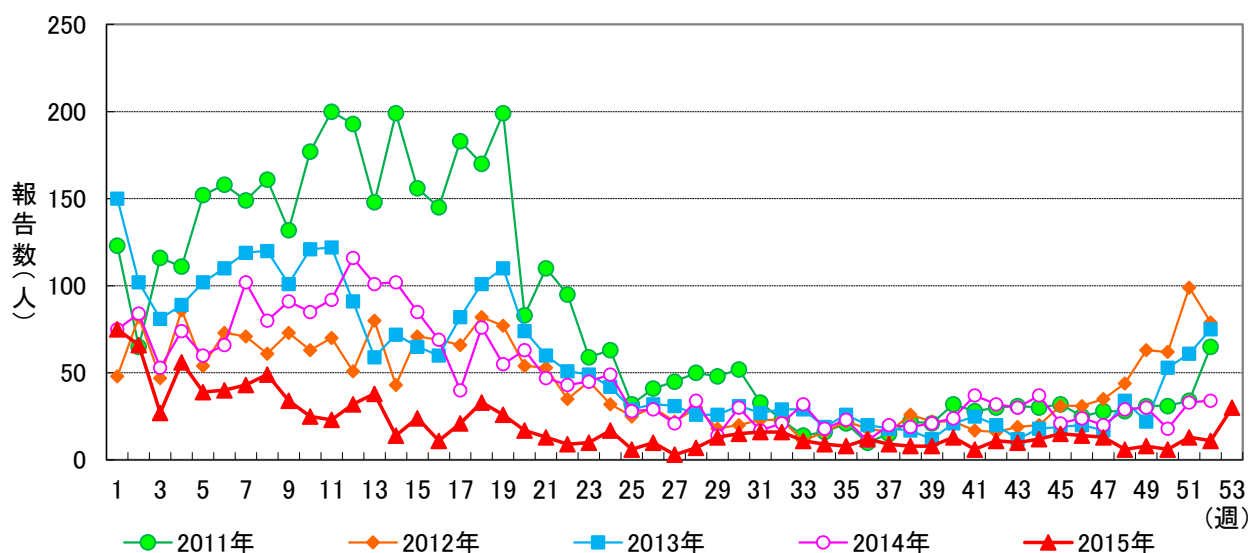
水痘

水痘は、水痘帯状疱疹ウイルス（VZV）によって起こる急性の伝染性疾患である。例年12月～7月に患者発生報告が多く、罹患年齢はほとんどが9歳以下であることが知られている。

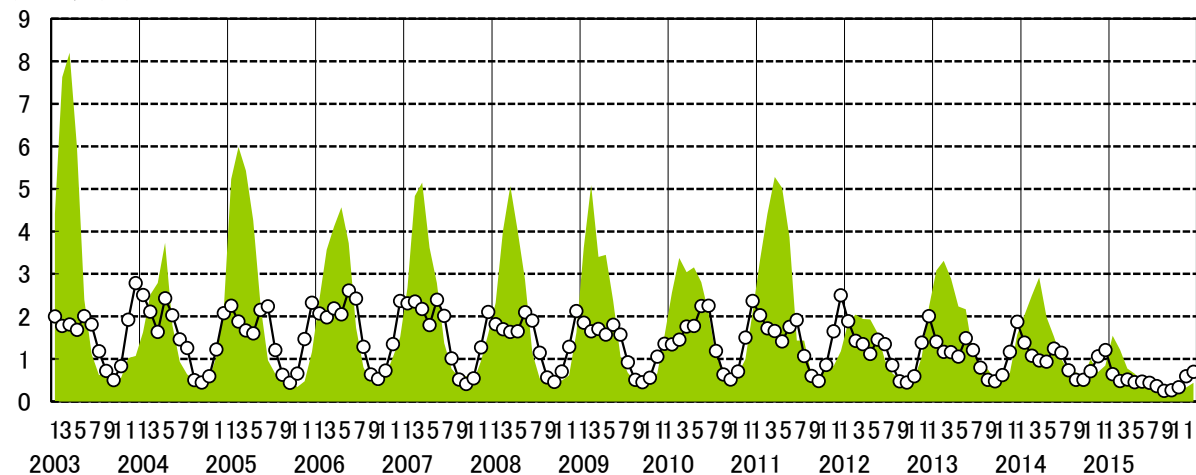
2015年県内の患者報告数は1,061人、定点当たり31.21人であり、前年比0.43と大幅に減少した。2014年10月から定期予防接種の対象（1歳以降に2回、弱毒生ワクチン）となったことが要因と思われる。県内では、例年1月～5月にかけて流行がみられ、2015年は1月から4月にかけて報告が多かった。保健所単位では那覇市保健所管内にて第1週（1月）に注意報レベルに達した。

年齢階級別では、1歳が最も多く全体の22.7%、続いて2歳が全体の14.2%、3歳児13.1%を占めていた。

水痘 過去5年の流行時期の比較

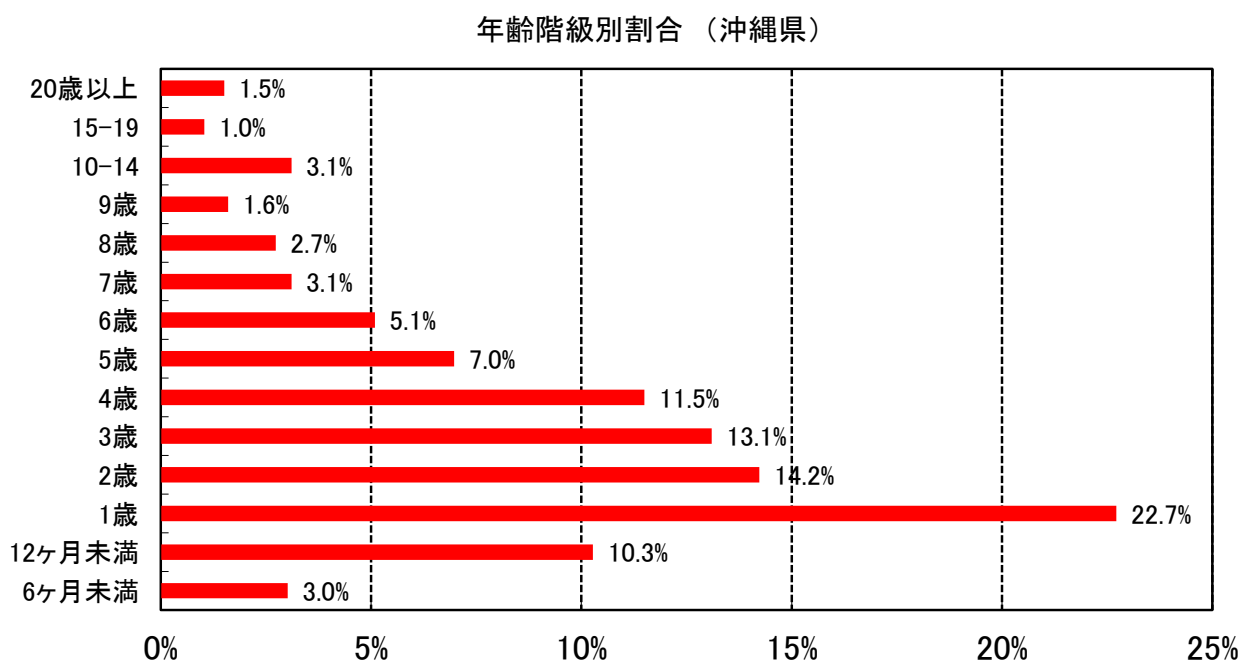
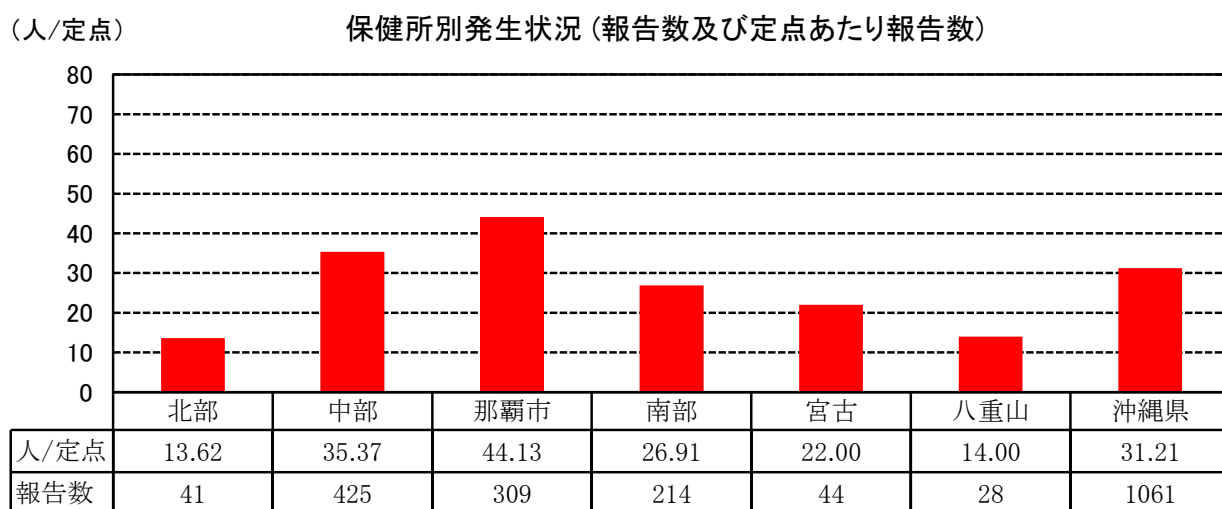
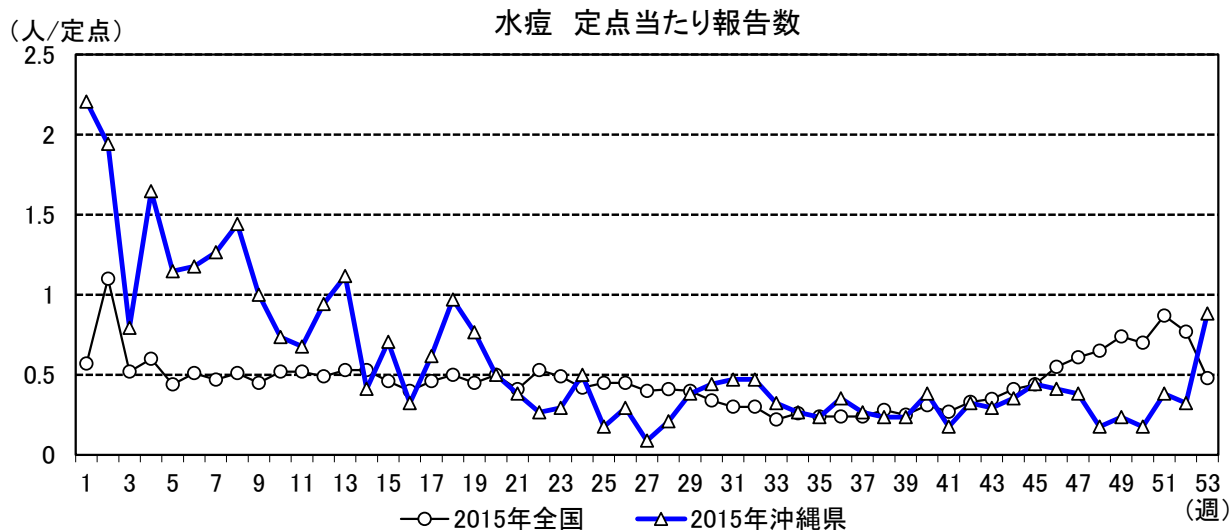


年次別患者発生状況の推移 (人／定点) 沖縄県 全国



シーズン別の報告数合計: 水痘

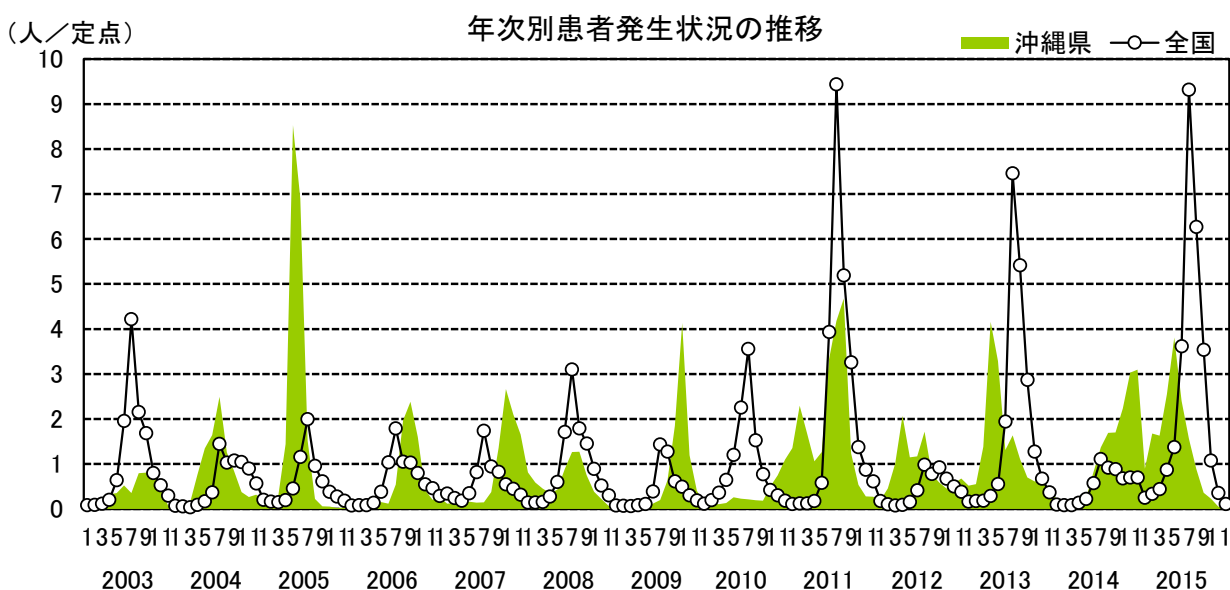
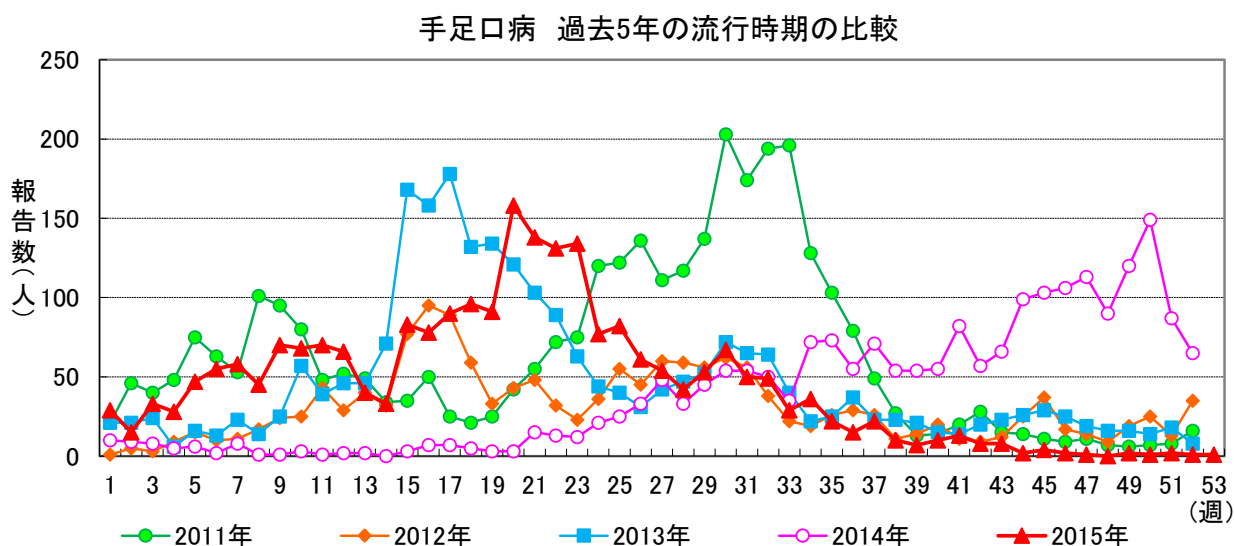
平均報告数	2011年	2012年	2013年	2014年	2015年
2,597	4,215	2,346	2,902	2,460	1,061



手足口病

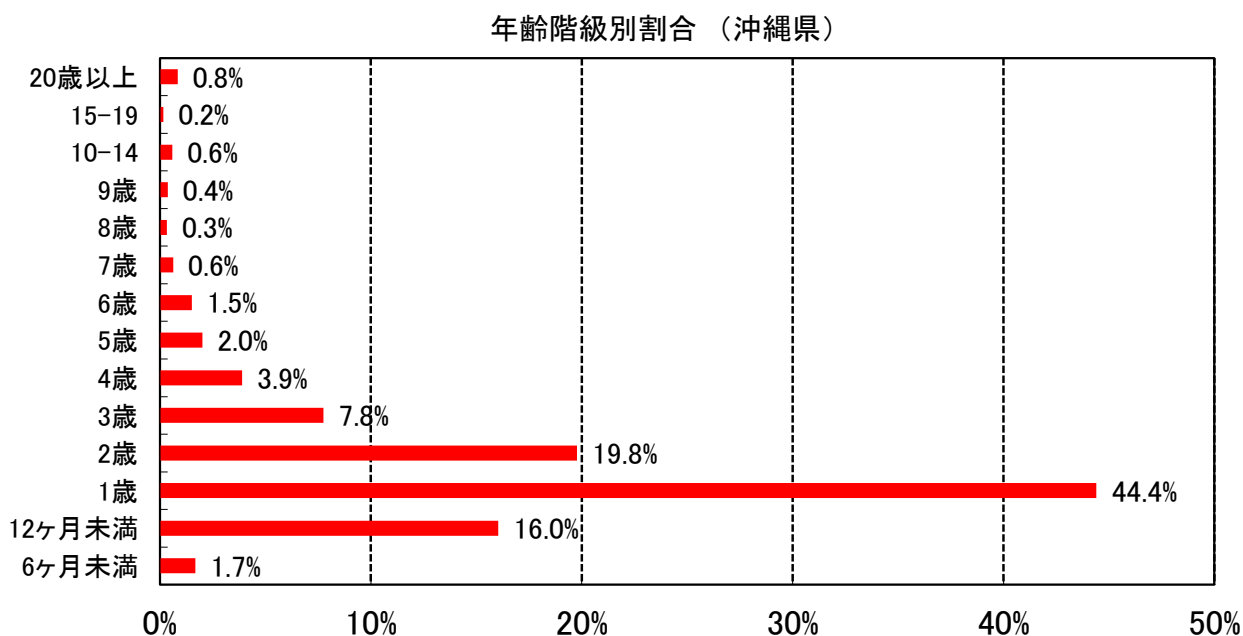
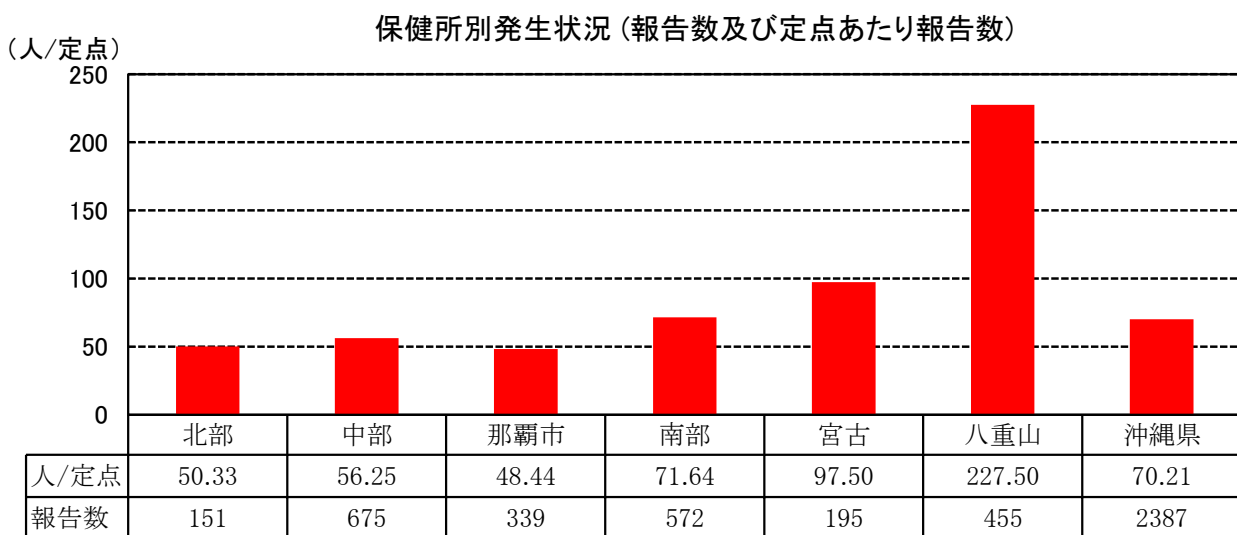
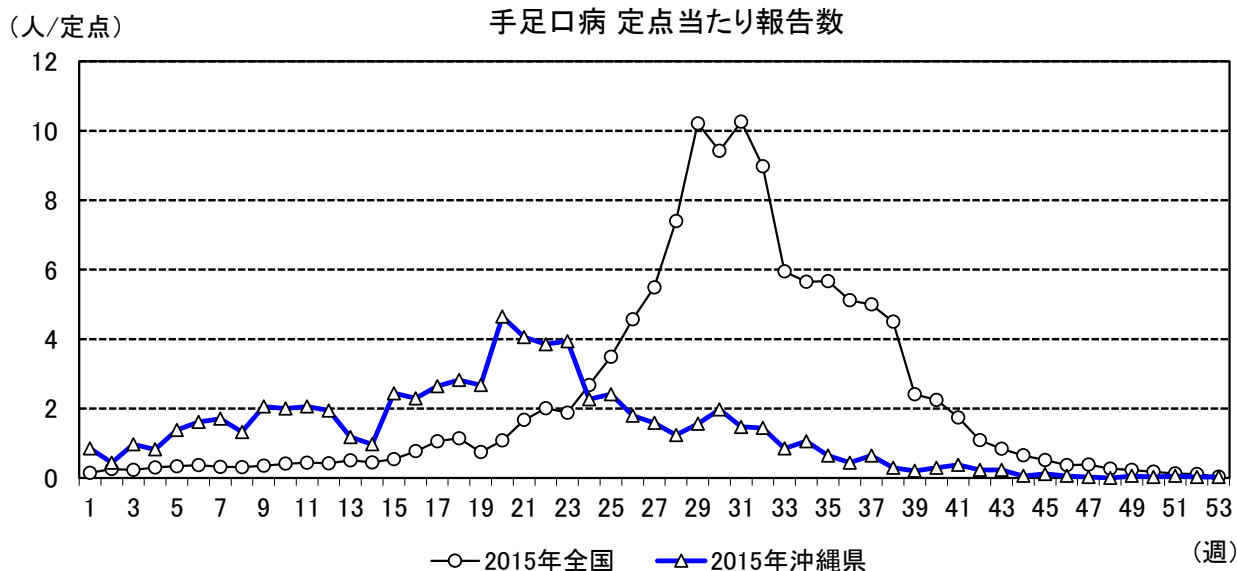
手足口病は、口腔粘膜および手や足などに現れる水疱性の発疹を主症状とした急性ウイルス感染症で、幼児を中心に夏季に流行が見られる。コクサッキーA16（CA16）、CA10、CA6、エンテロウイルス71（EV71）などが起因ウイルスである。EV71は中枢神経系合併症の発生率が他のウイルスより高いことが知られている。

2015年県内の患者報告数は2,387人、定点当たり70.21人であり、前年比1.14と増加した。1月から5月にかけて全国を上回る報告数であった。警報レベルに達したのは、八重山保健所管内で第5週から第12週（1月から3月）及び第29週から第37週（7月から9月）、北部保健所管内で第18週から第23週（4月から6月）、南部保健所管内で第20週から第25週（5月から6月）、宮古保健所管内で第20週から第24週（5月から6月）であった。年齢階級別では、1歳が最も多く、全体の44.4%を占めていた。



シーズン別の報告数合計：手足口病

平均報告数	2011年	2012年	2013年	2014年	2015年
2,369	3,280	1,623	2,459	2,095	2,387

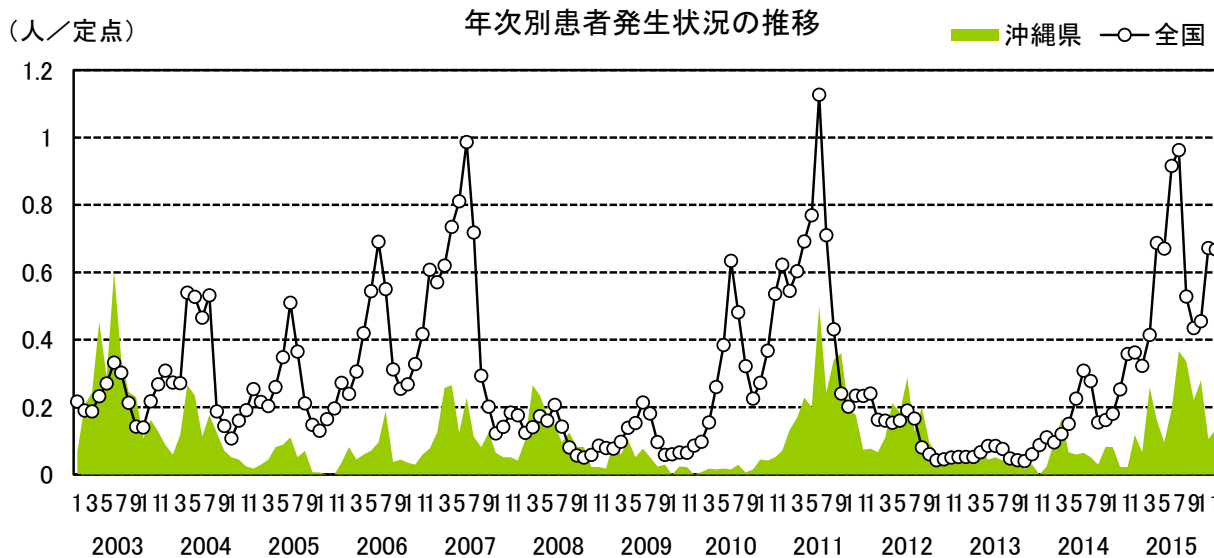
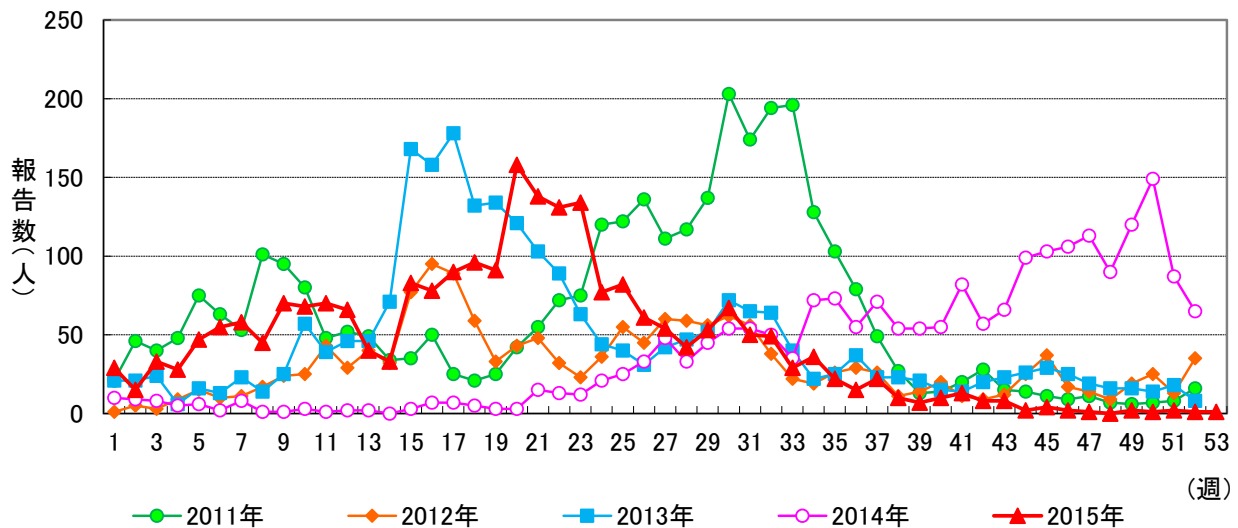


伝染性紅斑

伝染性紅斑は、頬に出現する蝶翼状の紅斑を特徴とし、小児を中心にしてみられる流行性発疹性疾患である。両頬がリンゴのように赤くなることから、「リンゴ病」と呼ばれることもある。1月から7月にかけて報告数が増加し、9月頃最も少なくなるという流行パターンを呈する。

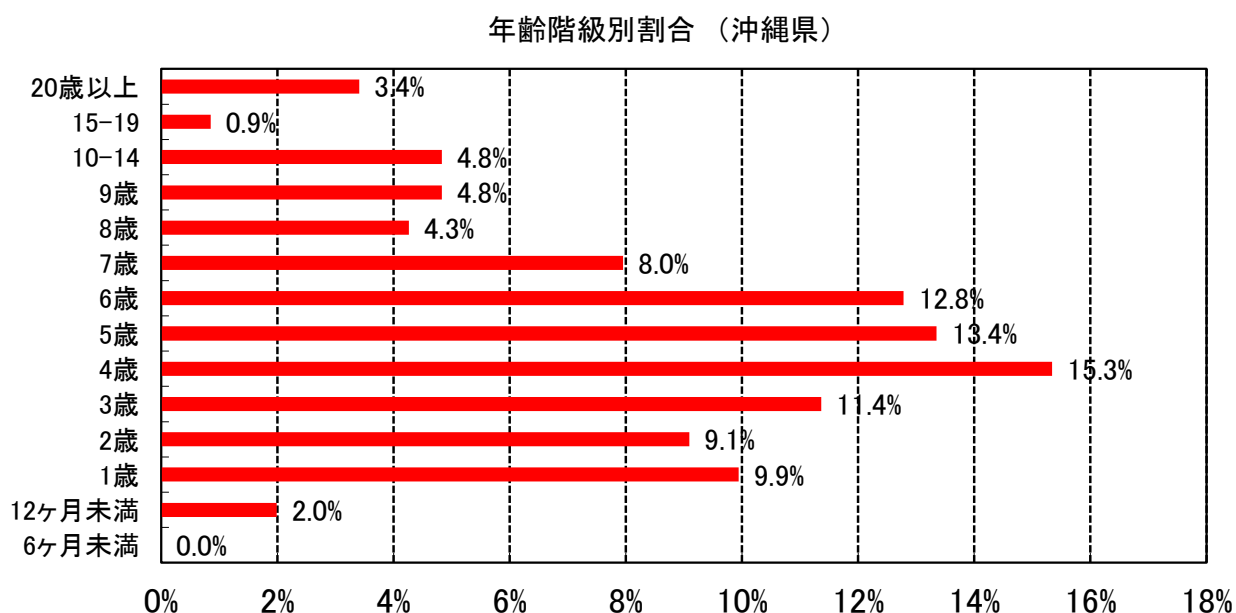
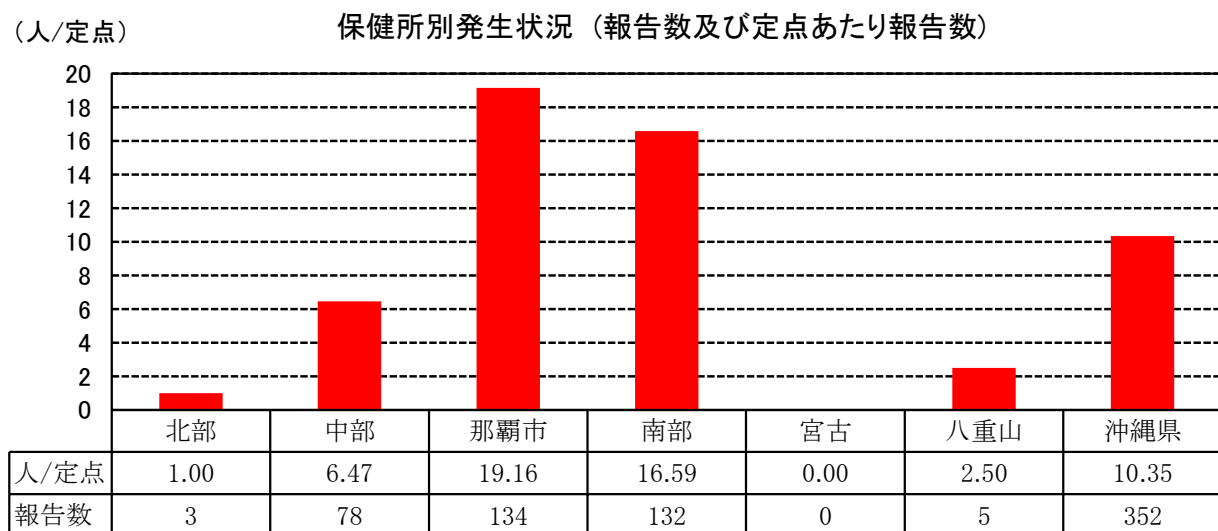
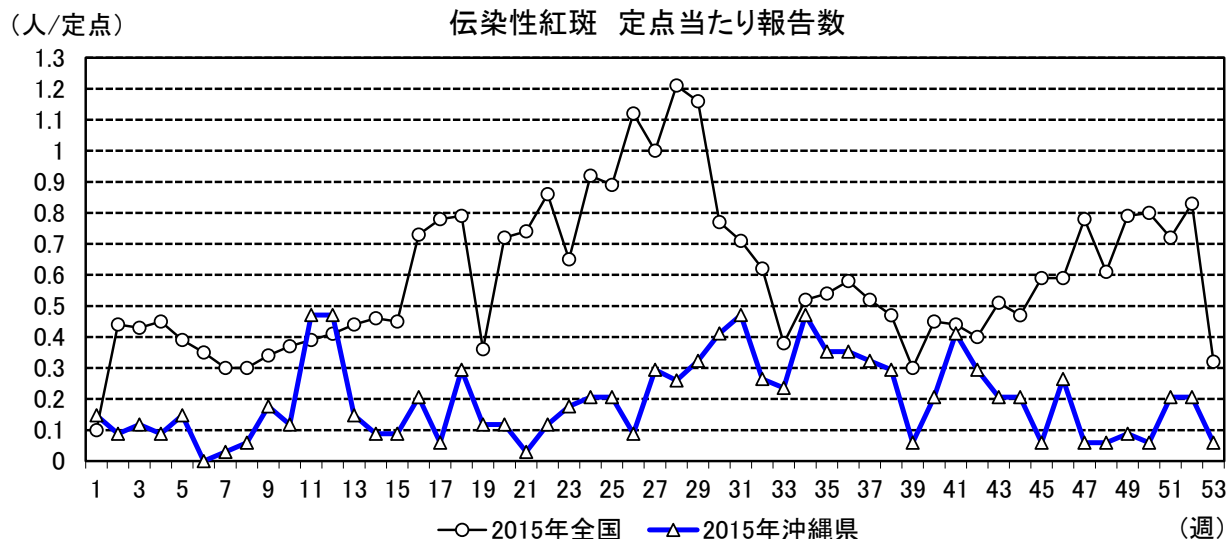
2015年県内の患者報告数は352人、定点当たり10.35人であり、前年比3.06と増加したが、年間を通して警報レベルには達しなかった。年齢階級別では、12ヶ月未満から成人まで幅広く分布していた。

伝染性紅斑 過去5年の流行時期の比較



シーズン別の報告数合計：伝染性紅斑

平均報告数	2011年	2012年	2013年	2014年	2015年
231	393	225	71	115	352

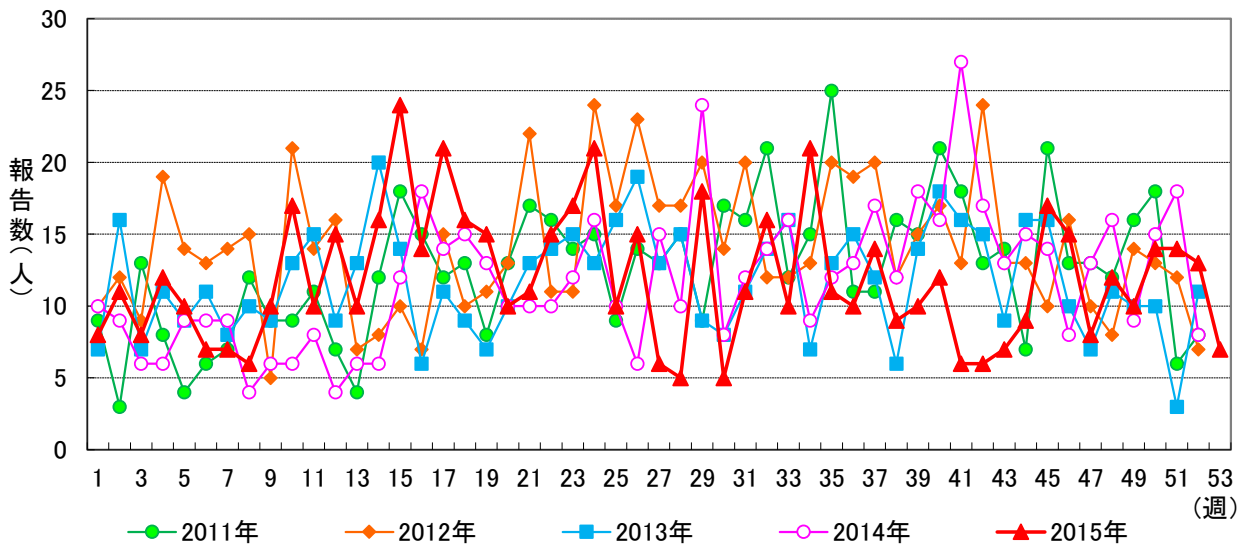


突発性発疹

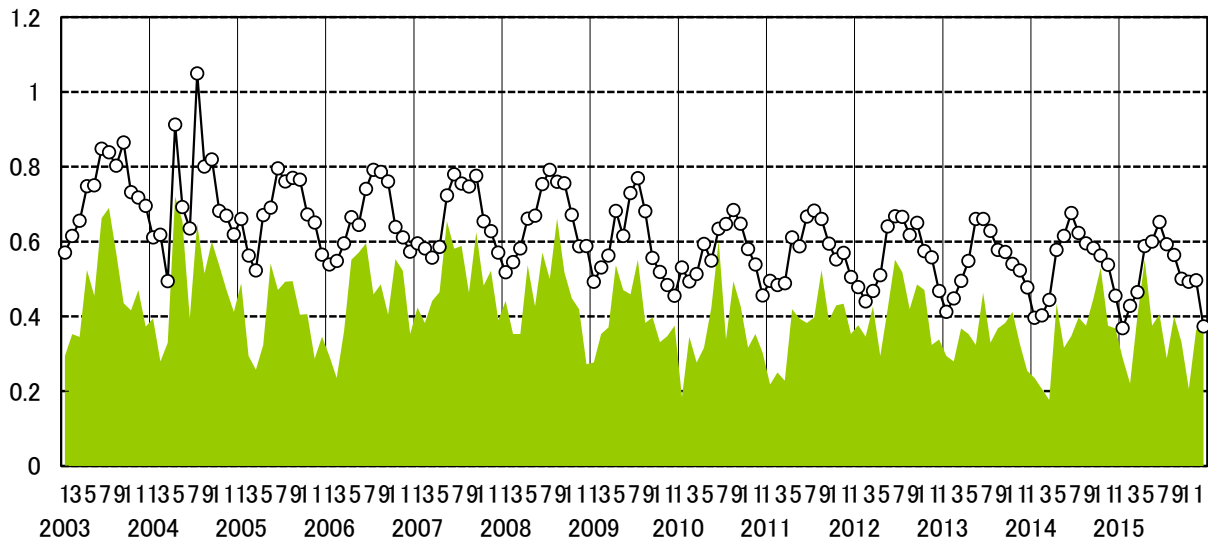
突発性発疹は、乳児期に罹患することが多く、突然の高熱と解熱前後の発疹を特徴とするウイルス感染症で、予後は一般に良好である。原因ウイルスは、ヒトヘルペスウイルス6あるいは7であることが多い。

2015年県内の患者報告数は632人、定点当たり18.59人であり、前年比1.03とほぼ前年並みであった。年齢階級別の患者報告数は、6ヶ月から1歳代で全体の約86%を占めていた。

突発性発疹 過去5年の流行時期の比較

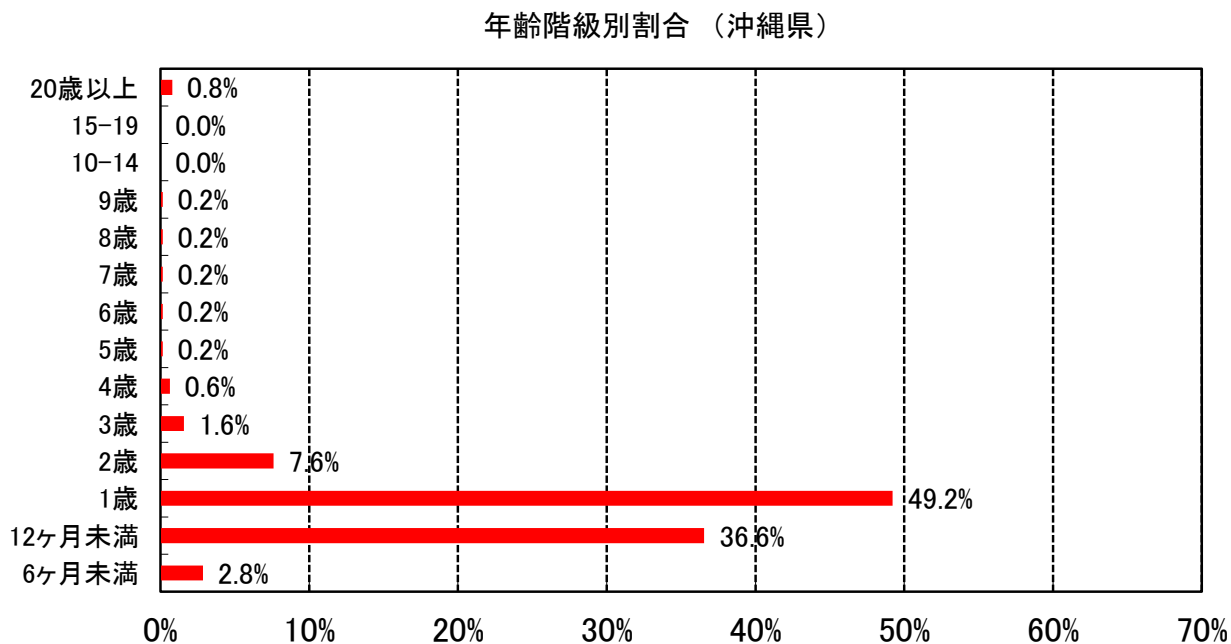
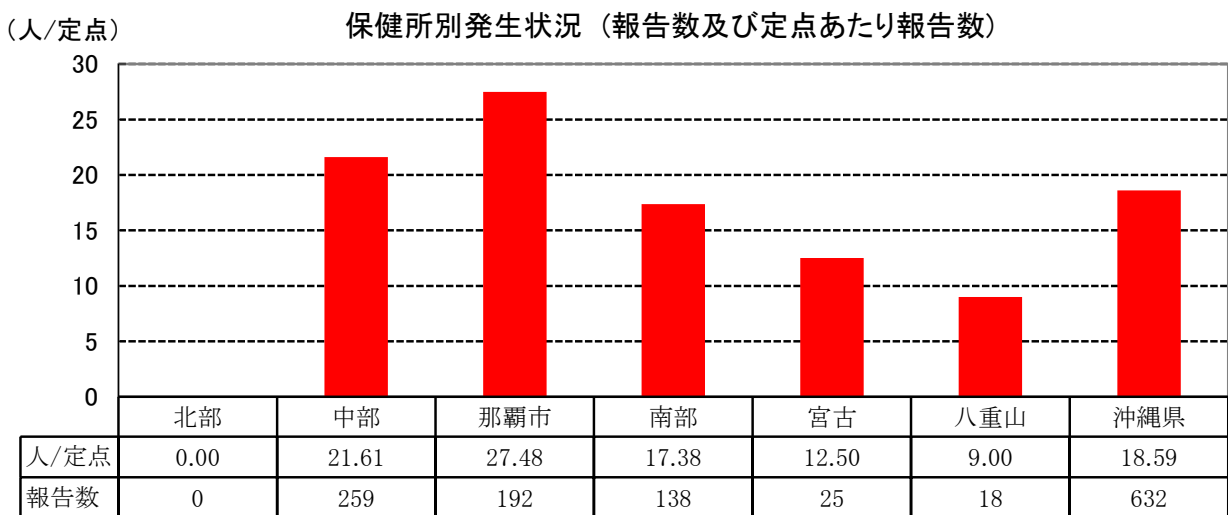
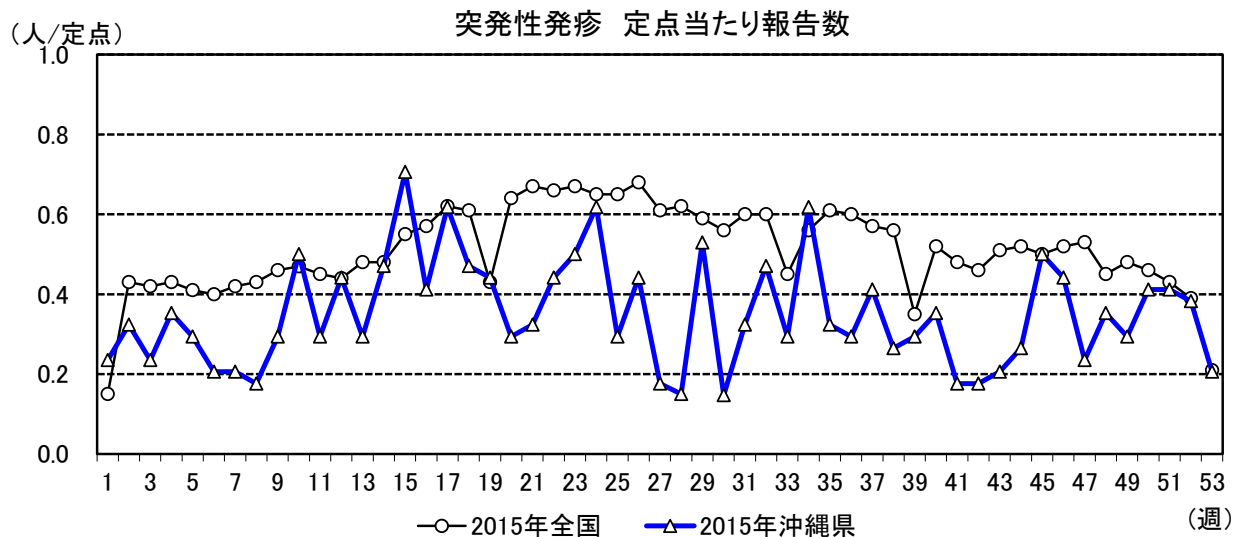


年次別患者発生状況の推移 (人／定点) 沖縄県 全国



シーズン別の報告数合計: 突発性発疹

平均報告数	2011年	2012年	2013年	2014年	2015年
648	654	732	610	613	632



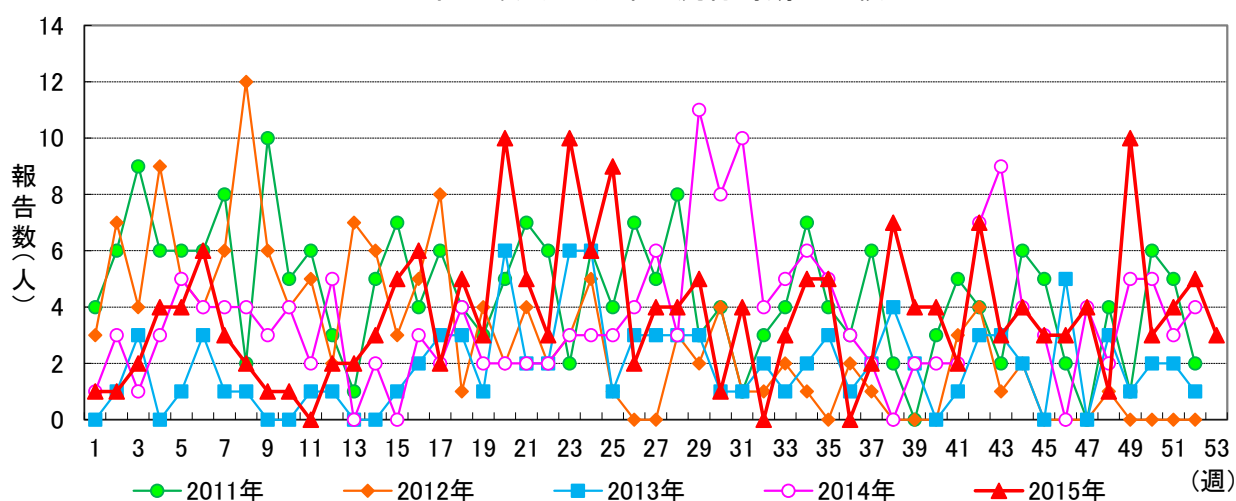
百日咳

百日咳は、特有のけいれん性の咳発作を特徴とする急性気道感染症である。母親からの免疫（経胎盤移行抗体）が期待できないため、乳児期早期から罹患し、1歳以下の乳児、ことに生後6カ月以下では死に至る危険性も高い。百日せきワクチンによる免疫効果は5～10年程度であるため、ワクチン既接種の成人も感染する。成人が感染した場合、症状が軽いため本人が気づかないうちに乳幼児への感染源となることがあり、注意が必要である。

2015年県内での患者報告数は198人、定点当たり5.83人であった。ほぼ年間を通して、報告数が全国より多いが、警報レベルに達した保健所管内はなかった。

年齢階級別では、全国は20歳以上（25.0%）と10-14歳（18.7%）で報告が多いが、県内では20歳以上が70.2%、6ヶ月未満児が10.6%とやや年齢構成が異なっている。

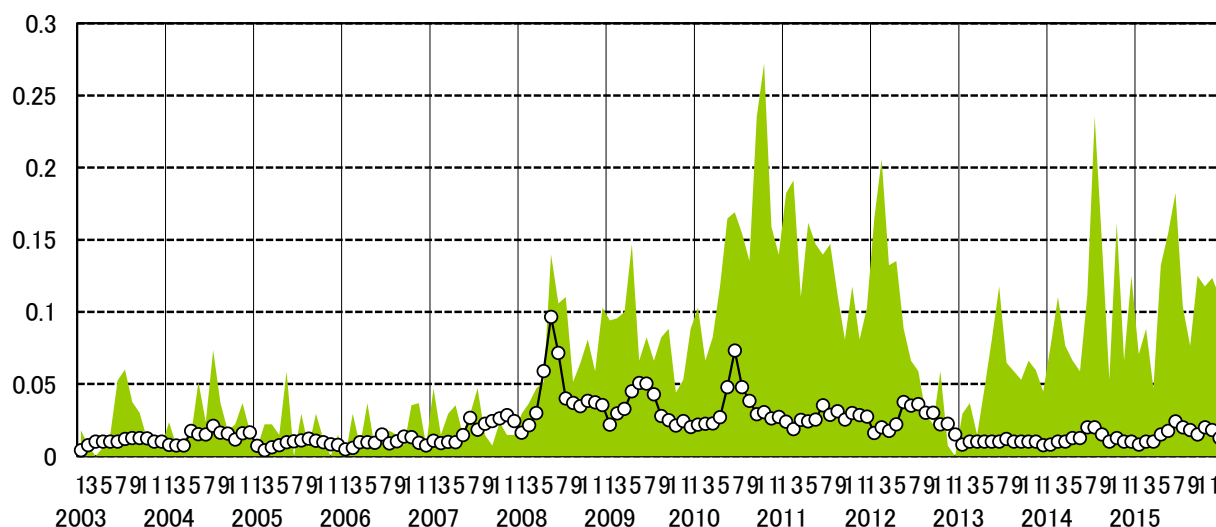
百日咳 過去5年の流行時期の比較



(人／定点)

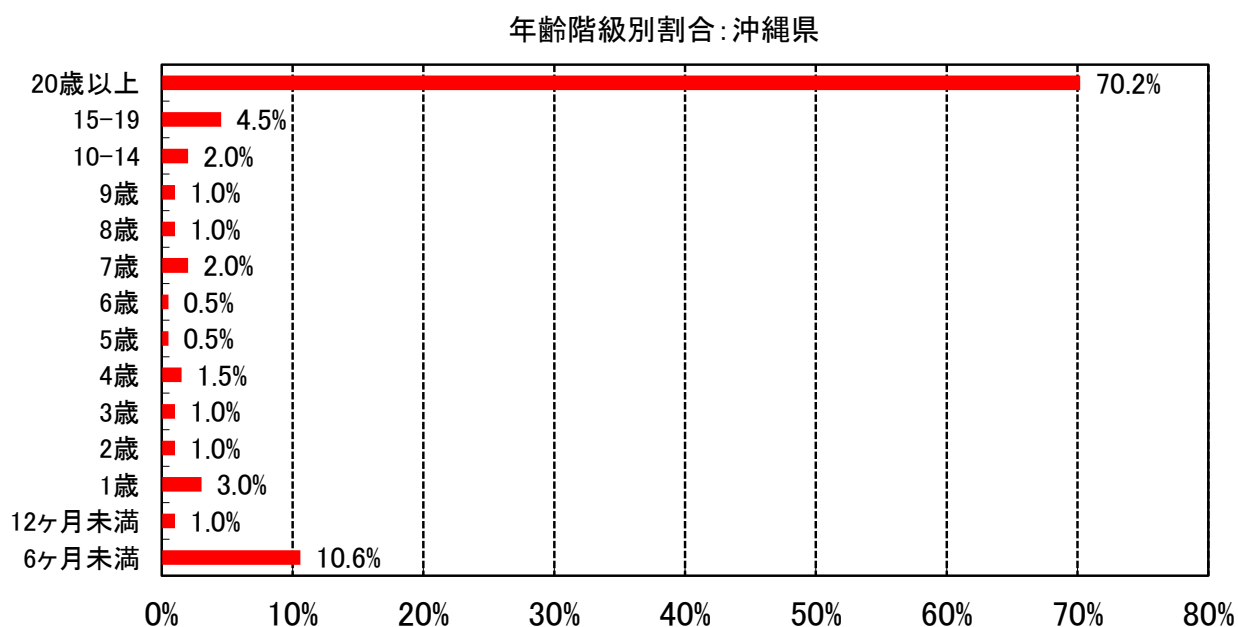
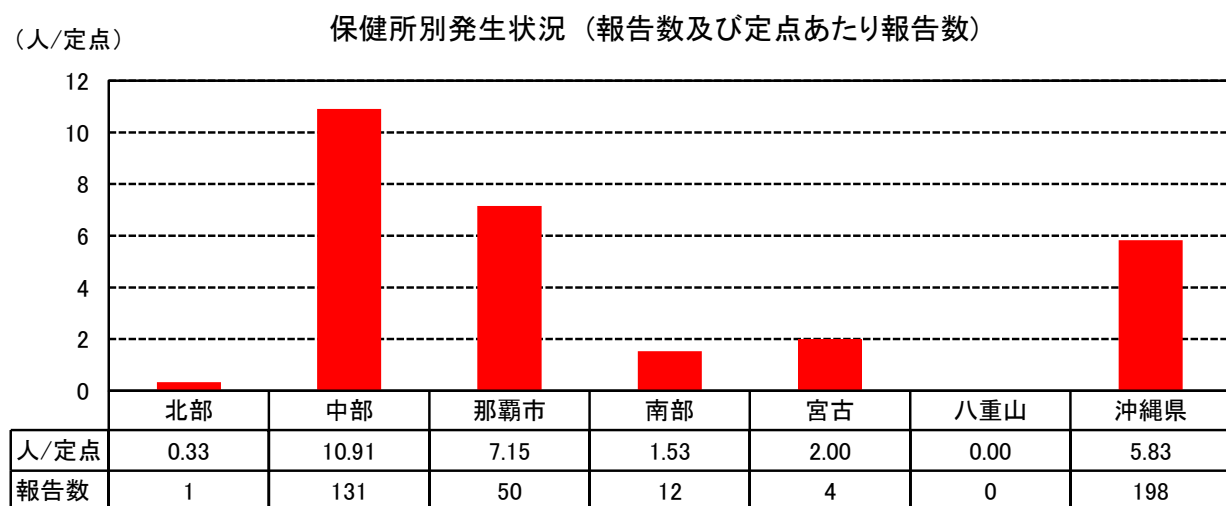
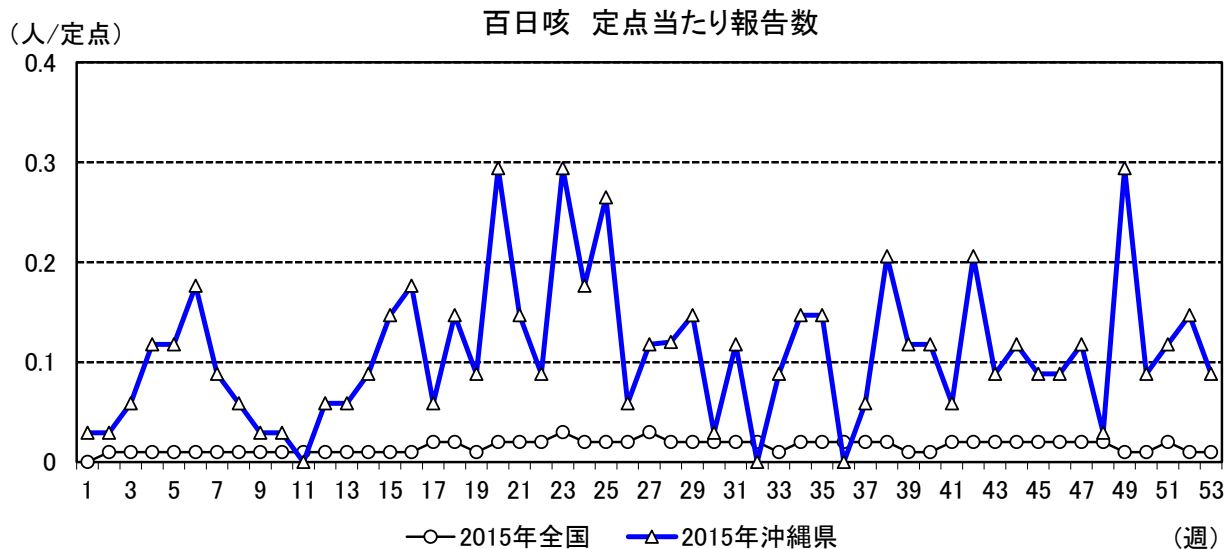
年次別患者発生状況の推移

■ 沖縄県 ○ 全国



シーズン別の報告数合計：百日咳

平均報告数	2011年	2012年	2013年	2014年	2015年
172	233	146	99	186	198

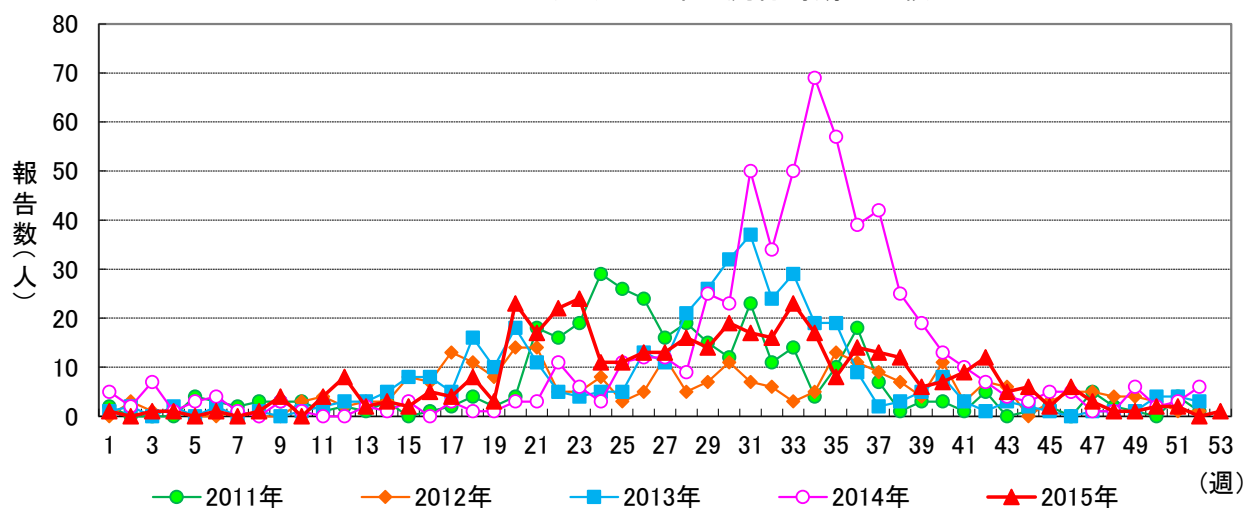


ヘルパンギーナ

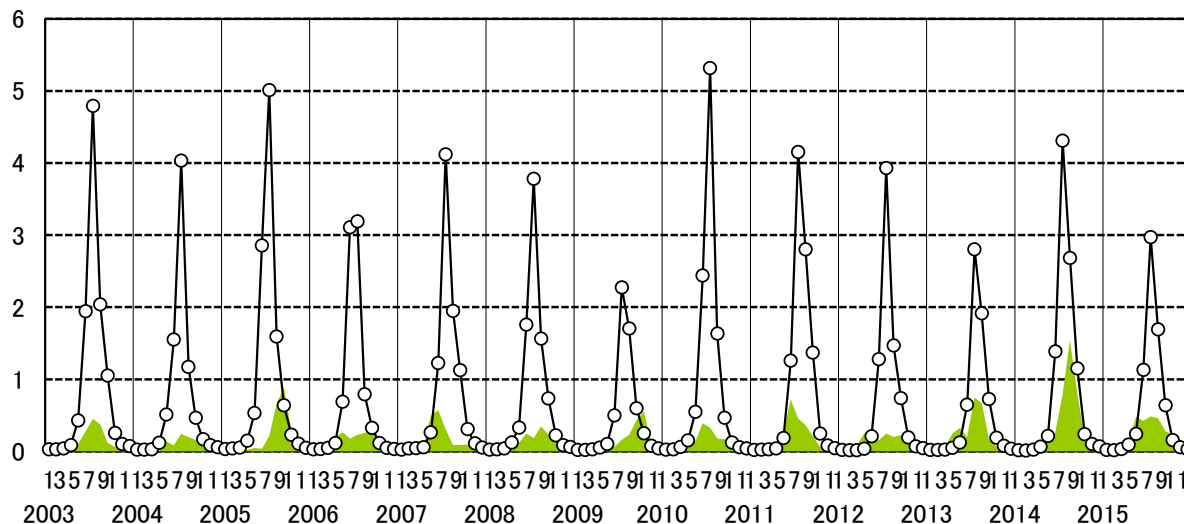
ヘルパンギーナは、エンテロウイルス属、特にA群コクサッキーウイルスを主原因とする感染症である。発熱と口腔粘膜の水疱性発疹を特徴とし、夏期に流行する夏かぜの代表的疾患である。

2015年県内の患者報告数は414人、定点当たり12.18人であり、前年比0.68と減少した。八重山保健所管内で、第22週から第23週（5月から6月）まで警報レベルが継続した。年齢階級別では、1歳の患者報告数が最も多く全体の40.1%を占めていた。

ヘルパンギーナ 過去5年の流行時期の比較



年次別患者発生状況の推移 (人／定点) 沖縄県 全国

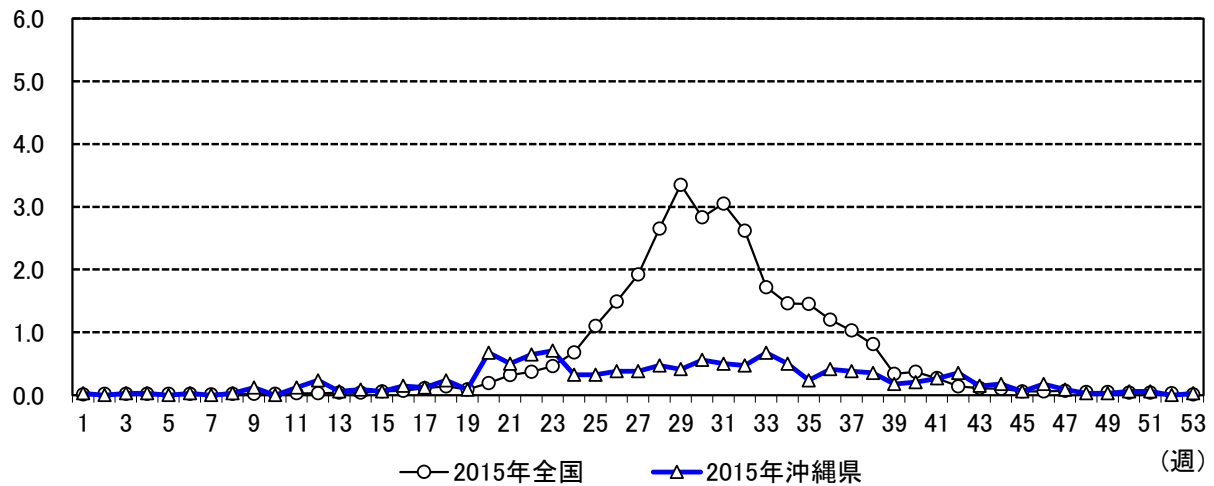


シーズン別の報告数合計：ヘルパンギーナ

平均報告数	2011年	2012年	2013年	2014年	2015年
409	350	275	399	607	414

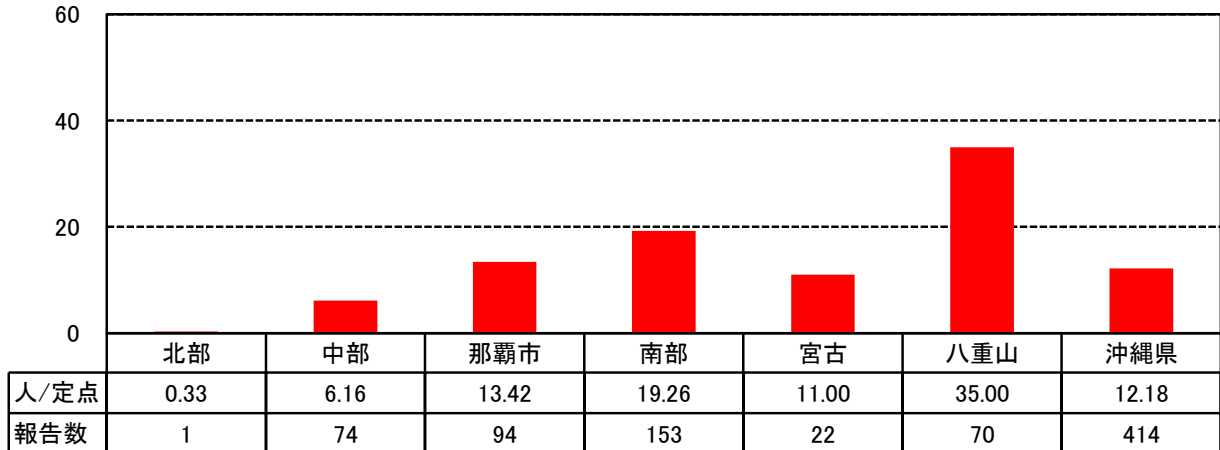
(人/定点)

ヘルパンギーナ 定点当たり報告数

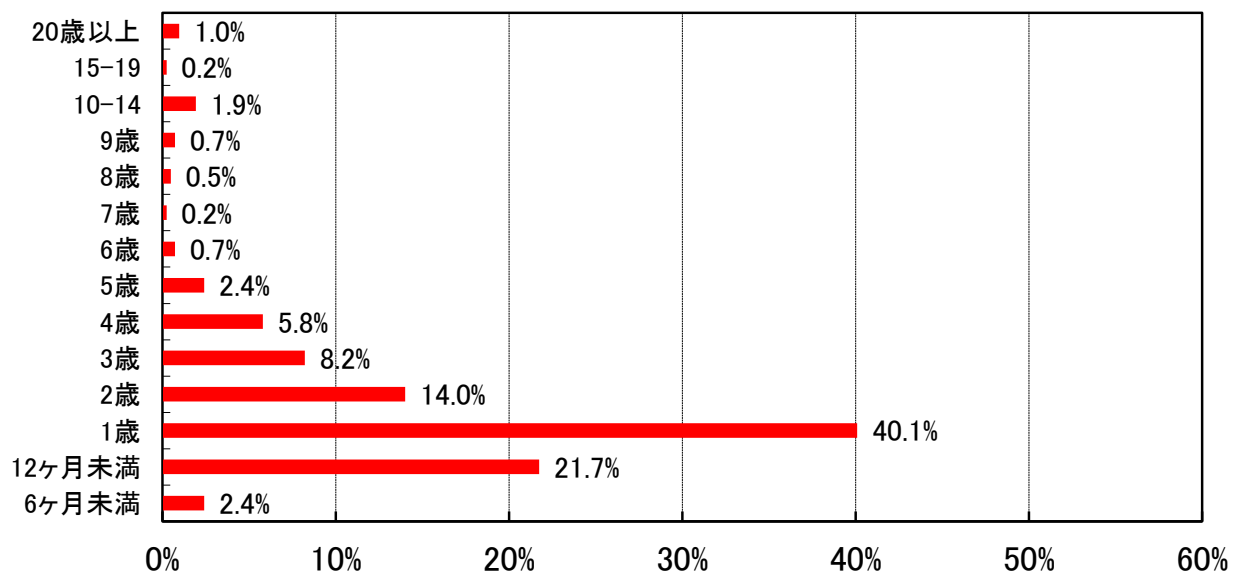


(人/定点)

保健所別発生状況（報告数及び定点あたり報告数）



年齢階級別割合（沖縄県）



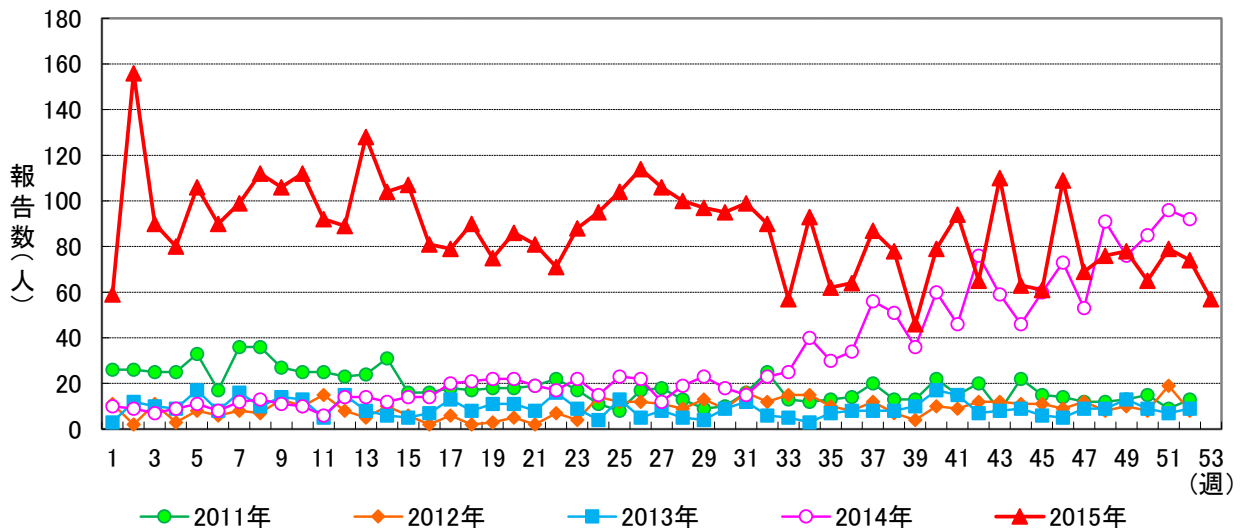
流行性耳下腺炎

流行性耳下腺炎は、片側あるいは両側の唾液腺の腫脹を特徴とするムンプスウイルスによる感染症である。本疾患は全国でも毎年、3～4年周期での患者増加がみられており、本県でも概ね4年周期で増加が認められている。前回の増加期は2009年（2,295人）、2010年（3,530人）であった。

2015年県内の患者報告数は4,647人、定点当たり136.68人であり、2003年以降最多となった。警報レベルに達した保健所管内は、中部保健所管内が第2週から第25週（1月から6月）、北部保健所管内が第14週から第43週（3月から10月）、宮古保健所管内が第38週（9月）及び第41週から第53週（10月から12月）、八重山保健所管内が第50週から第53週（12月）と、場所を変えつつ流行が長期化した。

年齢別では4歳をピークに2歳代から6歳代で65.5%を占めた。また加齢に伴い、難聴などの合併症の発症率も高くなるといわれるが、20歳以上の報告が3.8%（175例）みられた。

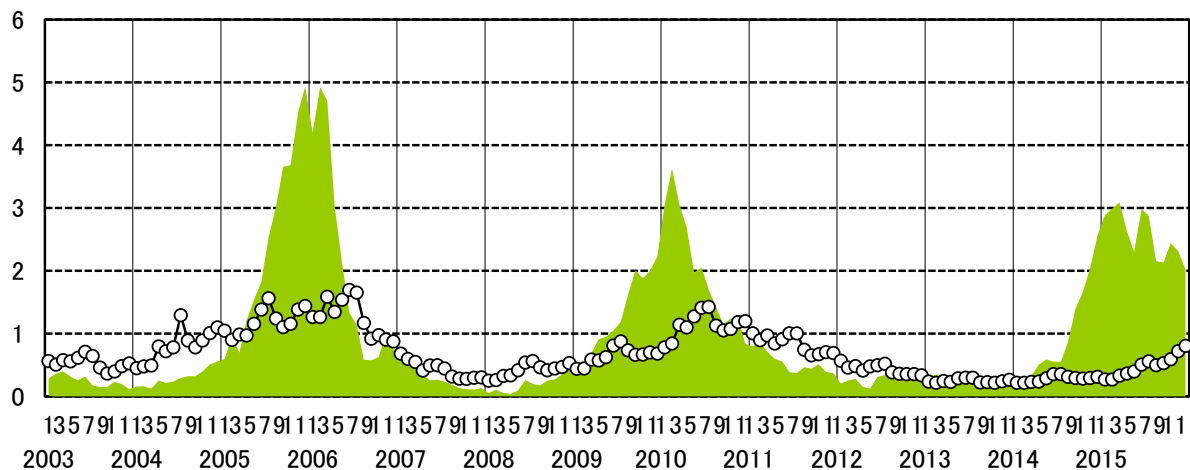
流行性耳下腺炎 過去5年の流行時期の比較



(人／定点)

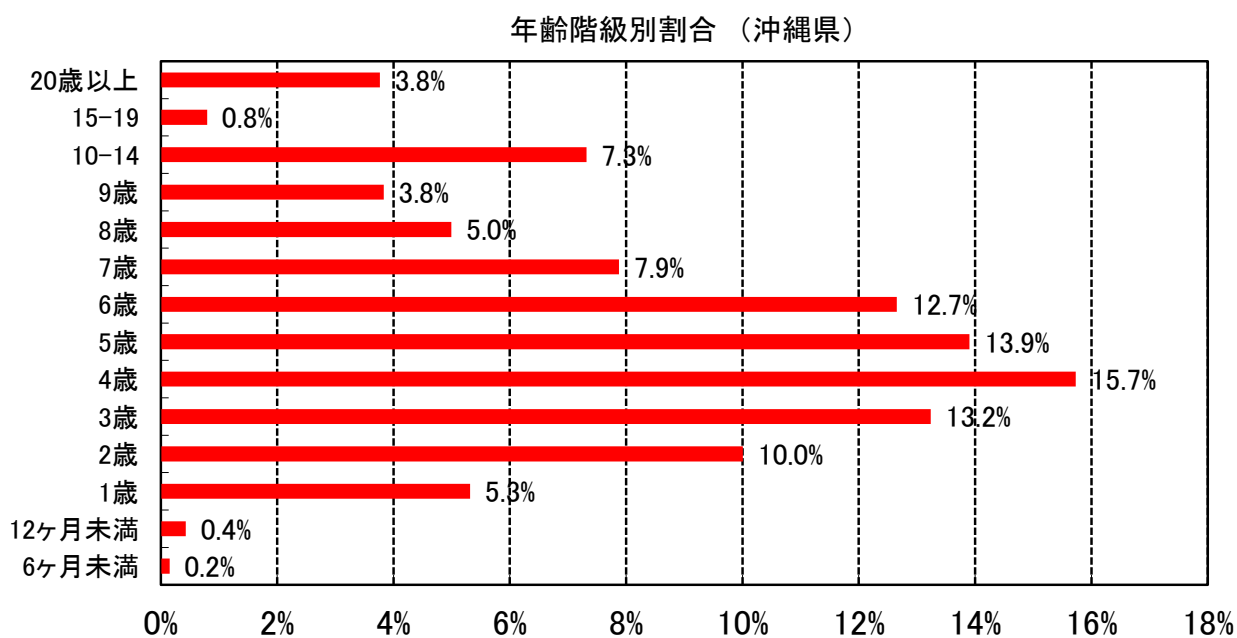
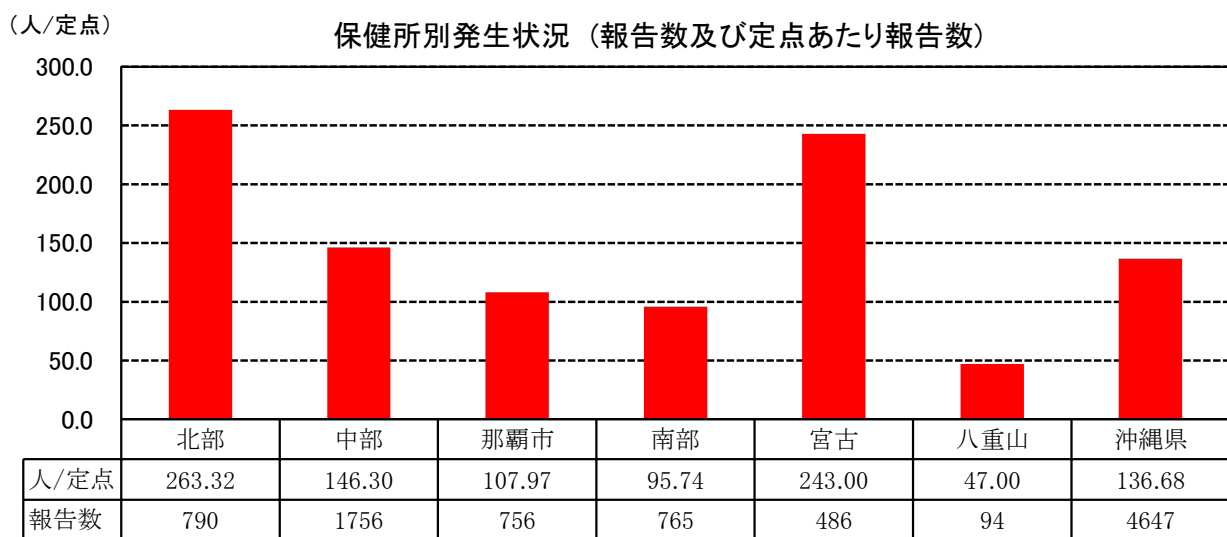
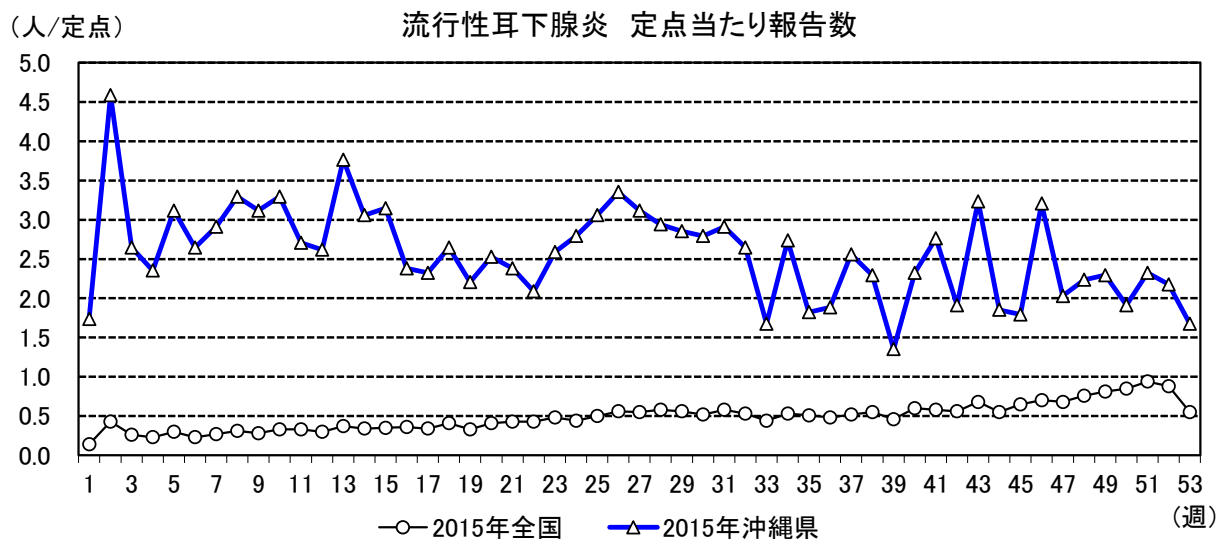
年次別患者発生状況の推移

■ 沖縄県 ○ 全国



シーズン別の報告数合計：流行性耳下腺炎

平均報告数	2011年	2012年	2013年	2014年	2015年
1,644	955	472	472	1,672	4,647

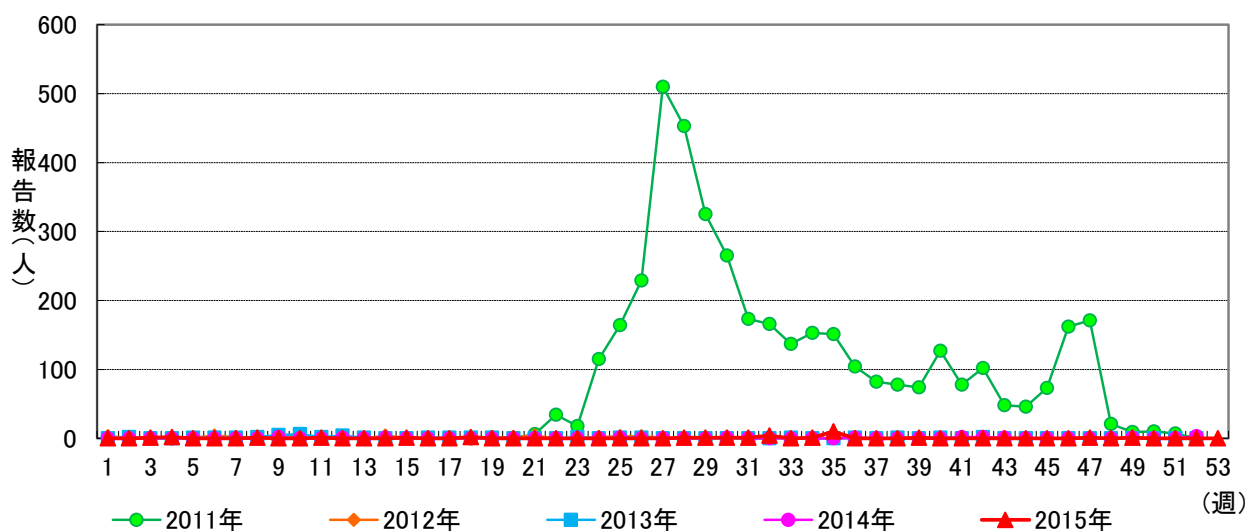


(眼科定点)
急性出血性結膜炎

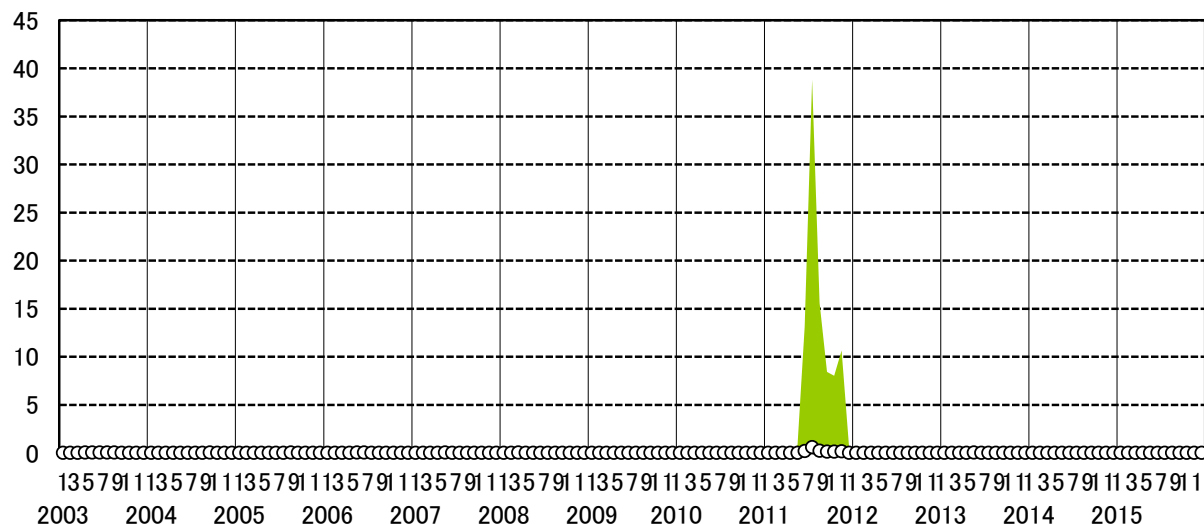
急性出血性結膜炎（AHC）は、エンテロウイルス70型（EV70）とコクサッキーウイルスA24変異型（CA24v）を主原因とする激しい出血症状を伴う結膜炎である。県内では2011年夏に大きく流行した。

2015年県内の患者報告数は30人、定点当たり3.00人であり、前年比1.88と増加した。第35週（8月）に那覇市保健所内及び南部保健所管内にて警報レベルに達したことに伴い、県全体でも警報レベルとなった。

急性出血性結膜炎 過去5年の流行時期の比較

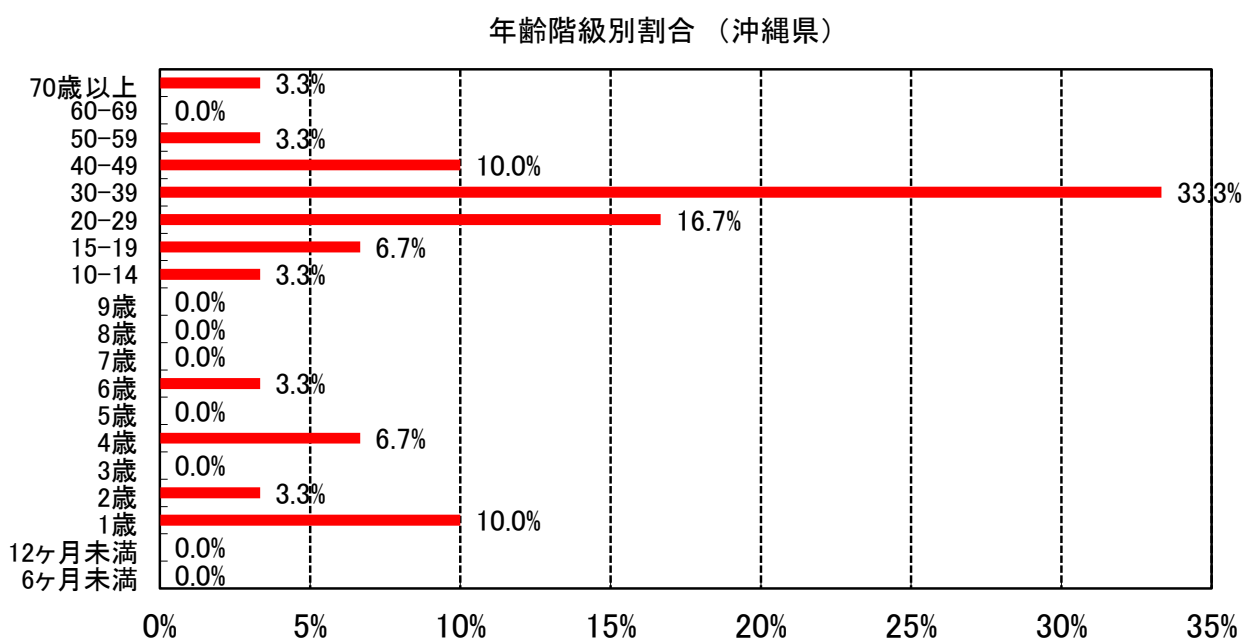
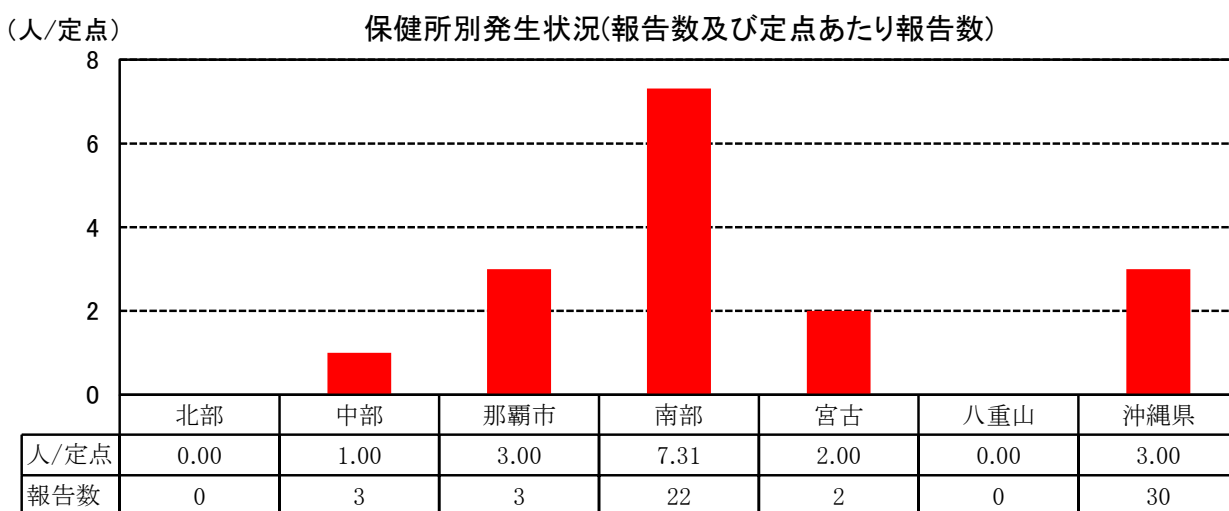
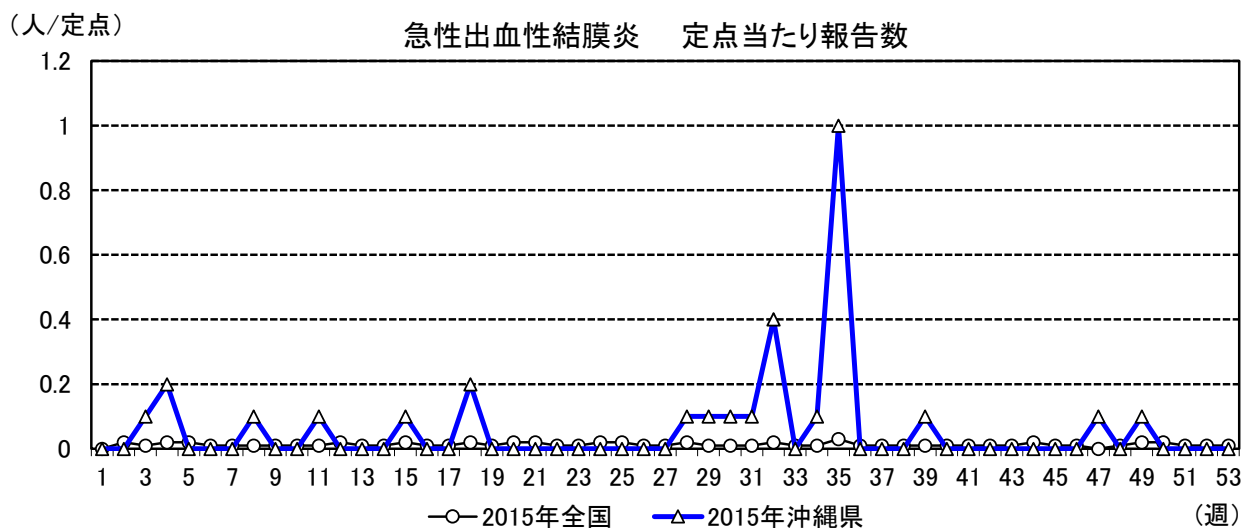


(人／定点) 年次別患者発生状況の推移 沖縄県 全国



シーズン別の報告数合計：急性出血性結膜炎

平均報告数	2011年	2012年	2013年	2014年	2015年
845	4094	48	39	16	30



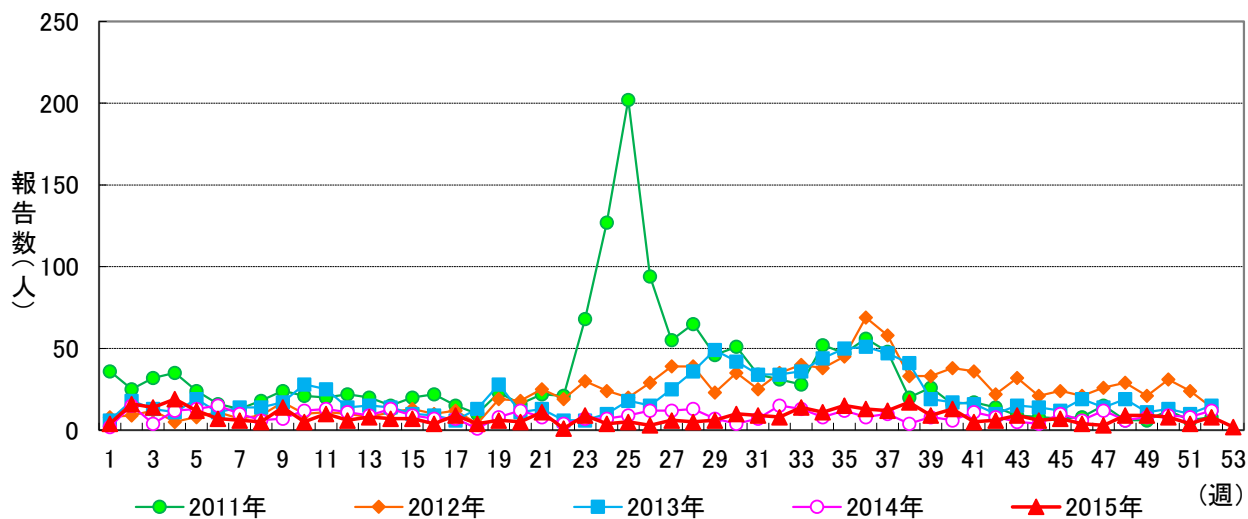
流行性角結膜炎

流行性角結膜炎（EKF）は、D群のアデノウイルス8、19、37型等を原因ウイルスとし、流涙（なみだ目）・充血・眼脂（めやに）を主症状とする。家庭内、職場、病院などの人が濃密に接触する場所で流行しやすいとされている。

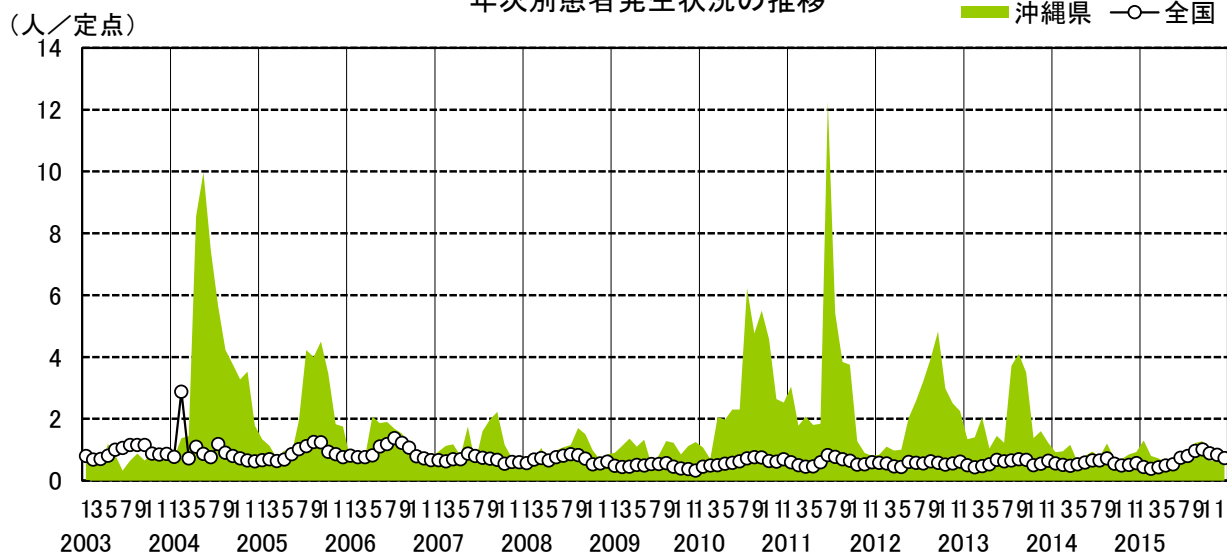
2015年県内の患者報告数は429人、定点当たり42.90人であり、前年比0.93とほぼ前年並で、年間通して全ての保健所管内で警報レベルには達することはなかった。

年齢階級別では、乳児から高齢者まで幅広く報告され、そのうち30代が最も多く全体の23.8%を占めていた。

流行性角結膜炎 過去5年の流行時期の比較

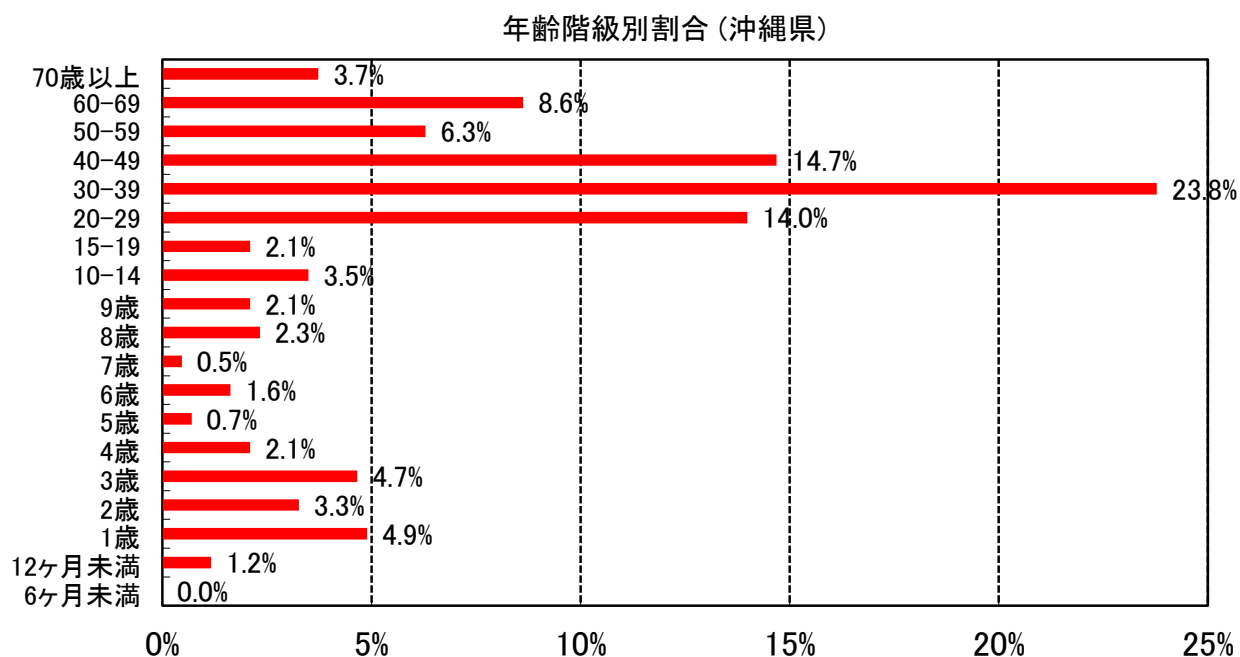
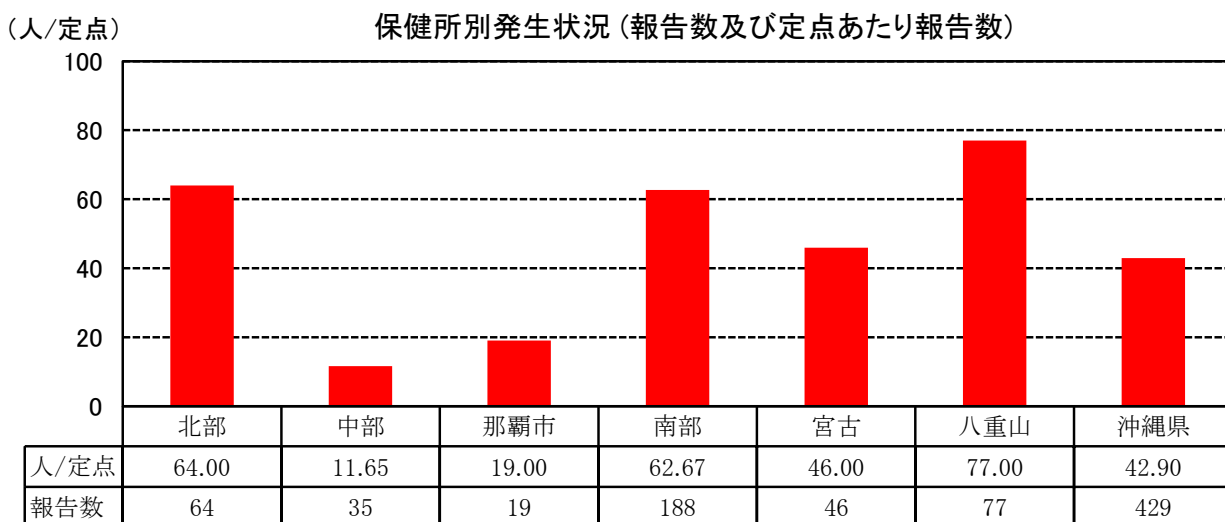
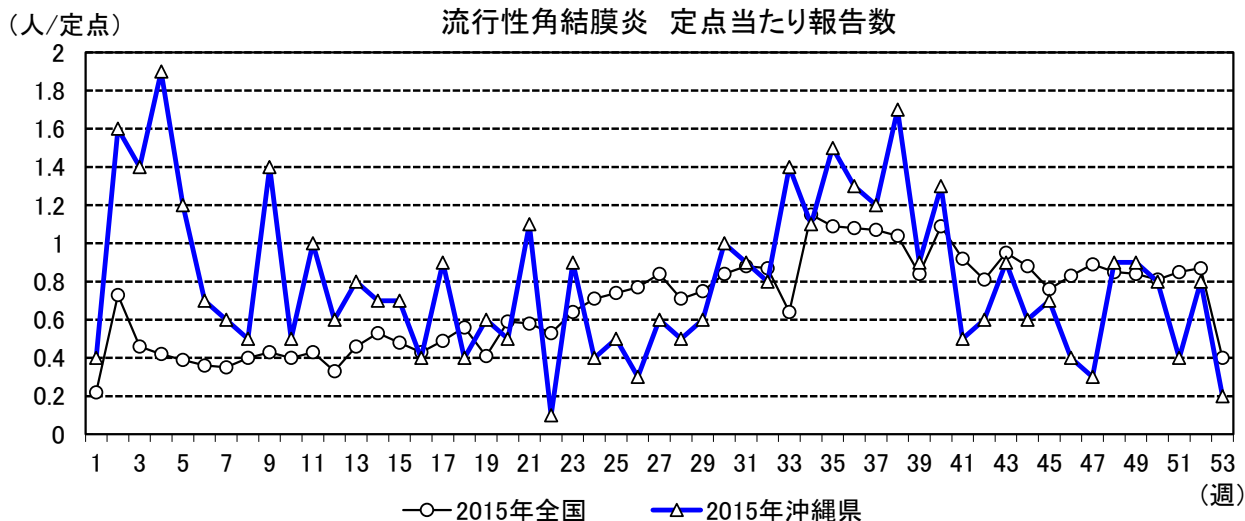


年次別患者発生状況の推移



シーズン別の報告数合計：流行性角結膜炎

平均報告数	2011年	2012年	2013年	2014年	2015年
961	1652	1210	1057	459	429

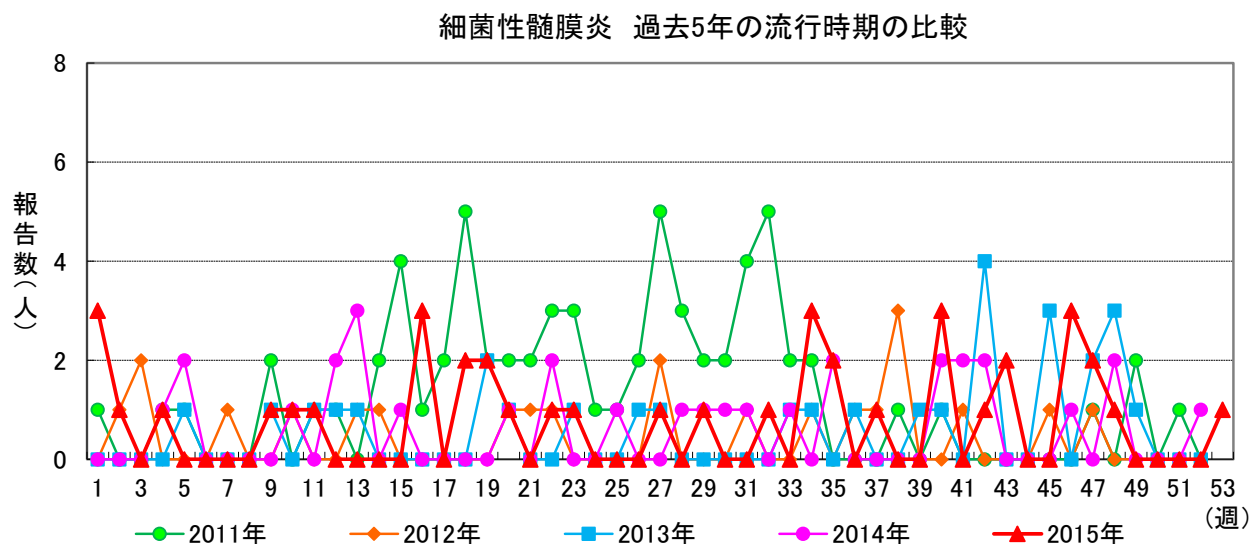


(基幹定点)

細菌性髄膜炎

細菌性髄膜炎は、種々の細菌感染による髄膜炎の総称であり、多くは発熱、頭痛、嘔吐を主症状とし、進行すると意識障害や痙攣がみられる。季節性はなく、原因菌はインフルエンザ菌、肺炎球菌が多い。

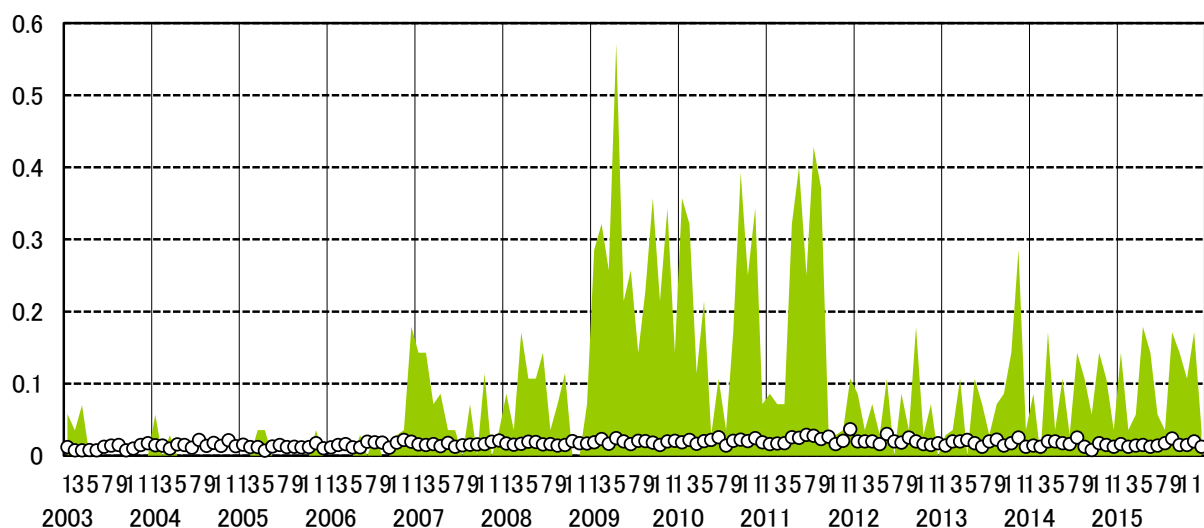
2015年県内の患者報告数は40人、定点当たり5.71人であった。年齢階級別には、0歳代と70歳以上が比較的多くみられた。



(人／定点)

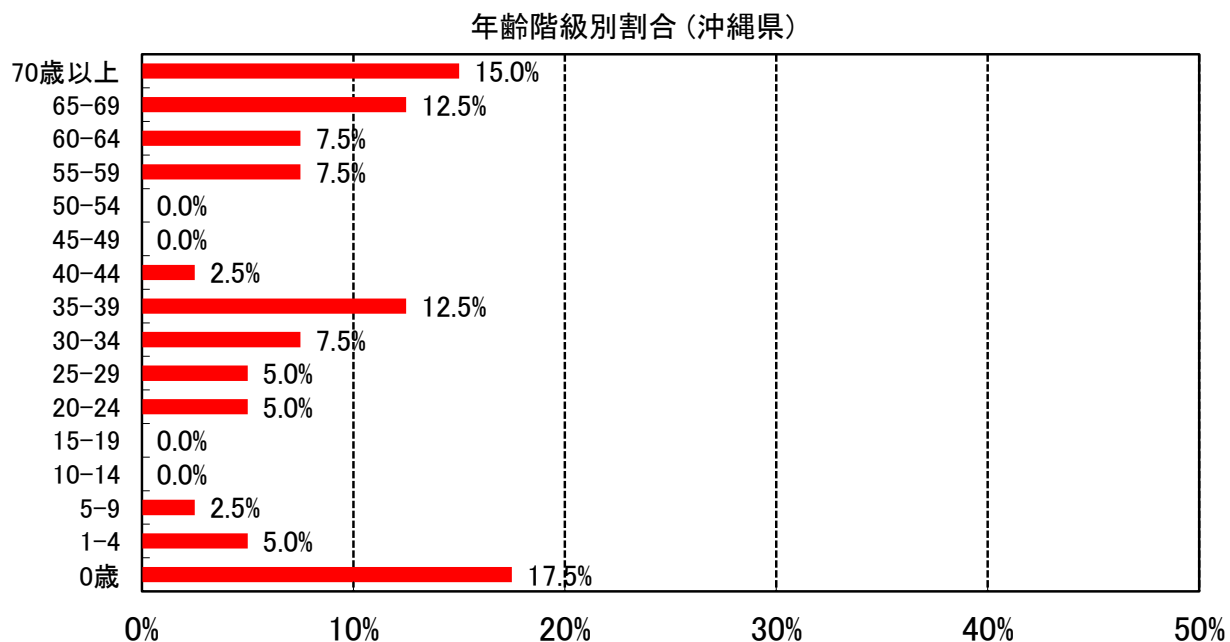
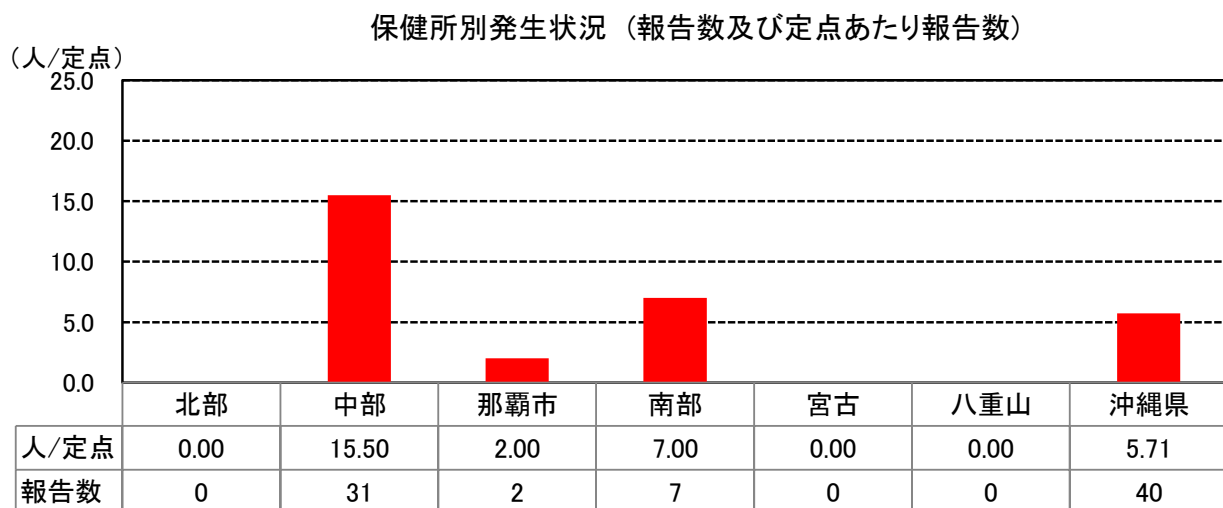
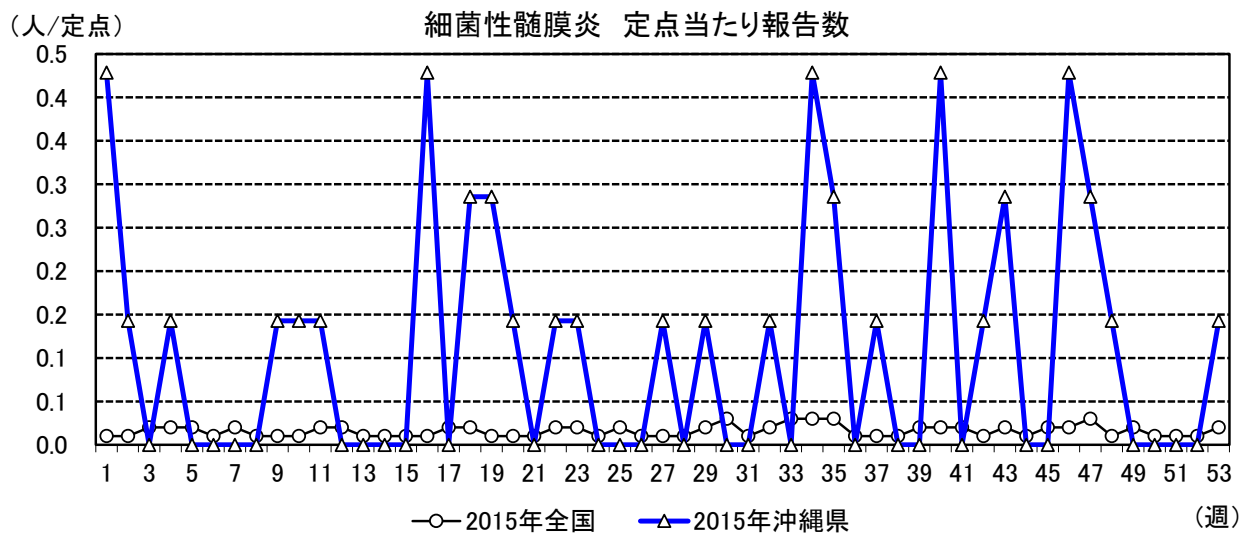
年次別患者発生状況の推移

■ 沖縄県 ○ 全国



シーズン別の報告数合計：細菌性髄膜炎

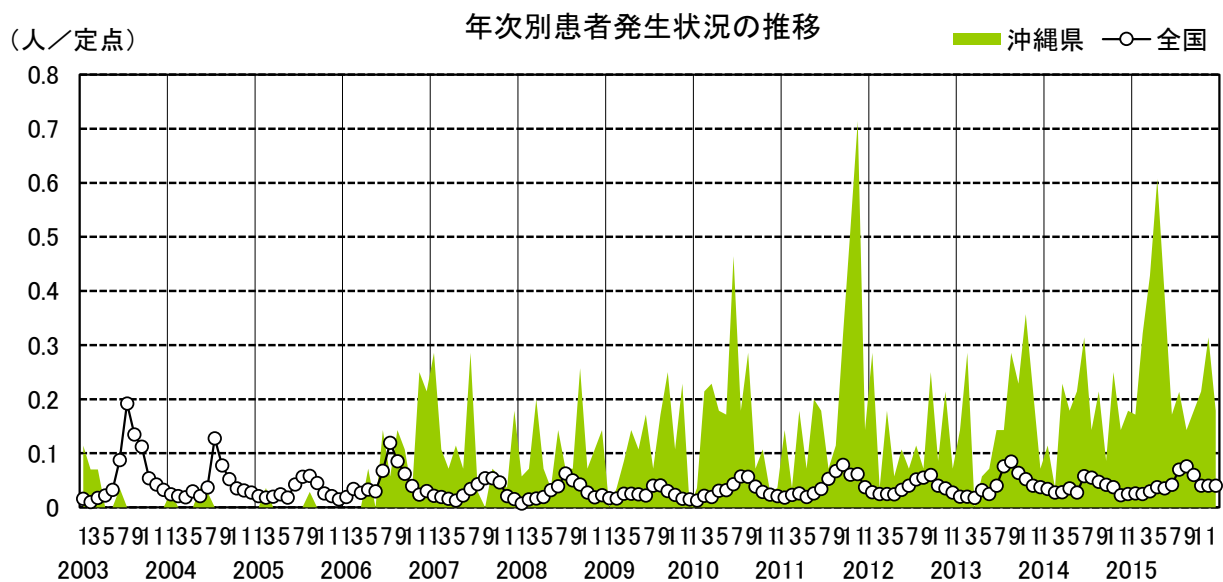
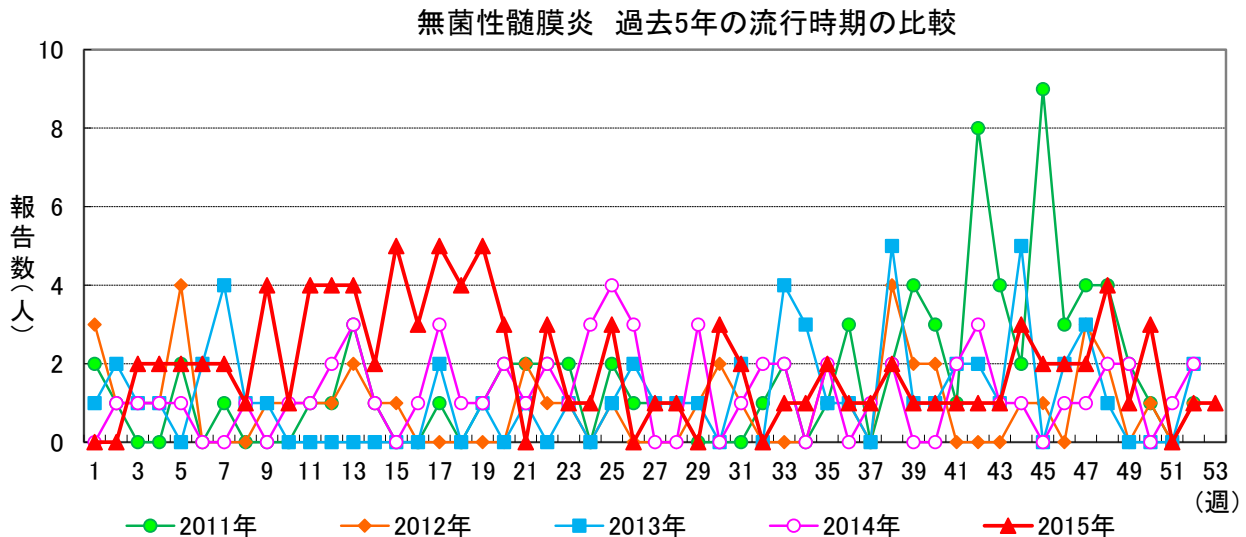
平均報告数	2011年	2012年	2013年	2014年	2015年
38	68	22	29	31	40



無菌性髄膜炎

無菌性髄膜炎は、多種多様な起因病原体があるが、全体の85%がエンテロウイルスによるものである。通常、発熱、嘔吐、頭痛を主症状とする。

2015年県内の患者報告数は102人、定点あたり14.57人であった。前年比1.59と増加した。年齢階級別の患者報告数は0歳が最も多く、全体の18.6%を占めていた。



シーズン別の報告数合計：無菌性髄膜炎

平均報告数	2011年	2012年	2013年	2014年	2015年
71	82	47	60	64	102